
月虹-運命交叉-

Forseti

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月虹・運命交叉 -

【NZコード】

N2430D

【作者名】

Forseti

【あらすじ】

ふらふらと砂界を旅する男と人を助ける事を使命とする女。不死の力を受けた二人の男女の出会いの物語

月虹

運命交叉

in 6283 month

chapter 1 > 接觸 <

- - Side Horus - -

めんべくや・・・。

「ヒヤハハッ！ 兄ちゃん。運が悪かったなあ？
ここいら辺一帯は俺らの縄張りなんだわ」

目の前には曲刀を持って下卑た笑いを浮かべている奴らが・・・七
匹。

徒步での移動は久しぶりだったが、

砂海の治安がここまで荒れているとは誤算だった。
こんな事はここ一ヶ月で四回目。

正直この先の展開なんて分かつていいんだからとつとつ始末したい所なんだが・・・。

ため息をつく。

『さうもいかないんだよな・・・』

「あん？」

『あーいえいえ。そうですか。それで私はこのよつとすれば宜しこのでしようか?』
勤めて愛想よく。

後ろの方から不愉快な笑い声が起る。
先頭の男が手を出してきた。

「通行料だよ。通行料」

やつぱりですか。

『おこへりでしょ?』

笑顔は崩さずに一応聞いてみる。

田の前の男は一や一やしながら、そうだな、と顎に手をやつ
「お前は中々見所が有りそつだからな。五千ジムで勘弁してやる」

五千つてオイ。今までの中で一番たけ一つての。

『いやーあいにくそんなに持ち合わせて無いんですよー』

男の顔が一変して不愉快そうになる。

「アア! ? ジヤあその手に持つてる荷物を全部よこしなー」

『断る死ね』

即答。笑顔は崩さない。

男は呆然としながら、

「・・・今、何つた?」

『いやですか? オ前等のよつな害虫にやる荷物は持つていな
わけでして、

これ以上くだらない事をぬかしやがるつもりで御座いましたら死んで頂ければ幸いです、

と言つてゐるんですよ。分かりましたか？『害虫さん達』

害虫と呼ばれた者たちのこめかみに青筋が走る。

「あん・・・だとコラアア！！！」

目の前の男が曲刀を振りかぶる。

はい、正当防衛成立・・・と

やれやれ、と眩きながら右手の指で【衝撃波】の印を紡ぎ、襲つてくるであらう曲刀を持つ手に向かつて放とうとした刹那――

・・・あら？

曲刀を振りかぶつていた男がドサリと倒れる。
倒れた男の上、そこには一人の女性が立つていた。

- - Side Aura - -

照りつける陽の光。砂地からの反射熱。
そして時折天を覆いつくす砂の嵐。

砂海を渡る者は襲い来るそれらの猛威に対抗、あるいは回避する為に万全を期して旅をする。

彼女は意に介さない。

そういつた【自分の命を守る為の準備】など必要が無いからだ。
身に纏つているのは砂地の色にも似た薄黄色の軽戦闘服、ベルトにかけた一本の短剣のみ。

それは動きやすさを重視し、その服の色は僅かでも他の眼に自分の

姿を映し難くする為である。

その砂海の地を歩くには全く相応しく無い軽装で、
彼女は後ろに結んだ漆黒の髪を揺らしながら一人歩いていた。

「の辺りの筈だが・・・
足を止める。

周りを見渡すが特に変わった姿は見当たらない。
目をつむり、聴覚に気を集中させる。

聞こえて来るのは風が砂を吹き上げる音、
履いているブーツに砂が当たる音、
それとほんの僅かに聞こえる話し声。

・・・いた

全身の感覚を聴覚から戻し、目を開く。
腰のベルトから一本、短剣を抜き取り、声がした方向へ颯爽と駆け
出した。

・
・

人の気配を感じ、足を止める。

・・・八人。内七人は武器を持っている、か
こちりにはまだ気付いていないようだ。

武器を持つた連中、

明らかに砂海の盗賊の類だ。
目が吊り上がる。

自分達の欲望の為には周りの人間の積み重ねてきた物を壊す事など何とも思ってはいない連中。

最近はまるでこの砂海の主でも気取ったかのようだ
砂海を渡る旅人から【通行料】などと言つものを要求しているらしい。

馬鹿げている。

彼らのような存在には最大限の嫌悪を抱いていた。

武器をもっていないもう一人の男に目を移す。

・・・自らが【視た】者だ。
妙だな・・・

盗賊に囮まれているにも関わらず、

特に怯えた様子も無く何かを喋っている。

何よりその格好。

降り注ぐ熱を最大限に吸収してしまいそうな黒い法衣、

左手に持つた小さな布袋。

砂海の旅人にしては余りにも無謀（人の事は言えないが）な風貌だ。

そんな観察している間にその男と話していた盗賊の一人が、
何か声を荒げ、殺氣を放つた。

まずい

右足のあつた場所に砂を舞い上げ、風を切る。

その距離約三十メートル。

次の瞬間には曲刀を振りかぶっている男の背後に到達し、
後頭部を短剣で突き刺した。

男は自分の身に何が起きたか分からなかつた。
全身から急激に力が抜け、ビクビクと痙攣しながら、砂の地に崩れ落ちた。

似合の末路だ。

冷たく見下しながら右手の短剣に付いた血と脳漿を振り払う。

顔を上げると、黒い衣を着た金髪の男が目に映つた。
その顔にはやはり怯えや怒り等は見当たらず、
賞賛と僅かな驚きを見せた表情を浮かべている。

一瞬、男に対し言ひ知れぬ感覚を感じた。

妙な男だ・・・。

この男に聞きたい事は色々とあつた。
何故そのような格好で砂海を歩いているのか。
何故、自分に凶器を向ける盜賊や、
平然と人を刺し殺した自分を見る目に怯えという物が一欠片も無い
のか。

そもそも何者なのか。いや 何故自分と同じ” におい ” がするのか。
だが、今は先にやらなければならない事がある。
細かい詮索は後回しとし、一つだけ確認すべき事を訊ねる事にした。

『お前は、この男達の仲間か?』

問われた男は嫌そうに、はあ? と漏らした後、
「こいつらの仲間? 勘弁してくれ。

俺はそこに居る連中の理不尽な要求に困り果ててたとこだ

嘘を吐け。

直感的に違和感を感じた。

【仲間ではない】といった部分ではなく、【困り果てていた】という部分にだ。

ふん、と鼻を鳴らす。

『・・・そ、うか。なら良い』

別の六人の方へ向き直る。

盗賊たちはしばし呆然としていたが、そのやり取りが終わると、ようやく現状を把握した。

「な、な何なんだてめえは！？ なんて事しやがる！..」

怒りと怯えが織り交ざった表情。

それに応えず彼らを鋭く睨み、ゆらりと短剣を構えた。

- - Side Horus - -

一方的な戦いだつた。

盗賊達は抵抗するどころか、自分がどの様に攻撃されたかすら認識できず、

最初の一瞬で一人、その後彼女に剣を振りかぶつて向かつていった三人が
次々に砂地に沈んでいった。

すごいなこりや・・・

目の前で起こった出来事に驚嘆した。

何故、一瞬にして五人の盗賊が地に伏す事になつたのか。
その過程については理解できた。

【縮地】　直線移動に限り、だがまるで瞬間移動したかのように
移動する歩法。

最初の二人を仕留めた時、彼女はこれを用いた。

初動で直線状の一人を見据え、左右に短剣を構えた。

丁度二人のそれぞれの首の高さに調整して。

そしてただ彼らの後ろに向かつて縮地を使い二人の間を、「移動」

しただけ。

その結果彼ら二人は首から鮮血を噴出し、倒れた。

彼女の移動先の近くに居た三人は目の前に唐突に現れた女に半ば自棄になつて曲刀を振り下ろした。

それを計算していたかのようにすぐに次の動作へと移る。

左手の短剣で一人を曲刀が彼女を捉える前に短剣を額に突き刺し、

右手の短剣で前から襲つてくる曲刀を受け流し、

右側から攻撃しようとしていた盗賊の脳天に向けさせた。

仲間を切つてしまい、啞然としていた盗賊の首筋を左手の短剣で切り裂いた。

その間、わずか十五秒。

これほどの使い手にはそういう出来るものでは無い。
まして・・・。

目の前の女性はどう見ても二十歳前後。

そんな年齢で【縮地】を使いこなしている事だけでも驚くべき事なのだ。

【縮地】を習得する事は非常に困難であり、
才能のある者でもその訓練に十年はかかると言われている。
ましてそれを「実戦で」使おうというのならばその難度は倍加する。

短剣の扱い、体捌きにも無駄、躊躇、淀み等が全く無く、徹底的に洗練されていた。今まで多くの経験を積んできたのだろう。

明らかに目の前の存在は矛盾している。
あれだけの実力、どんな才能を持つてしてもあの若さで身に付けられるとは思えない。

数百年に一度の天才なのかそれとも実年齢は三十過ぎで若く見えるだけなのか。
だが、いずれにしてもしつくじと来ない。

・・・ふと一つの可能性を思い付いてハッとした。
【自分と同じ存在なのではないか】という可能性。
いや・・・まさか、な・・・
頭を振り、目の前の状況に意識を戻す。

既に残りの盗賊は恐怖にかられ、必死の形相で逃げ出していた。
だがどうも彼女は逃がす気など無いらしい。

逃げた盗賊達に向け、低い姿勢で短剣を構えている。

【縮地】で距離を縮めるつもりだろう。

やべつ

『待つた!!』

とつたに叫ぶ。とにかく彼女を止めなくてはいけない。

声をかけられた本人は意外な方向から意外な声が耳に入り、怪訝な表情で振り返った。

「何だ?」

『そこら辺でやめといたら?』

彼は努めて明るく言い放った。

「・・・？ 何故だ？」

逃げる盗賊を見据えながら、彼女は疑問を口にした。

『や、あいつらもつ戦意無いし。それ以上は無駄な争いだろ？』
そう。必要の無い【争い】は止めなくてはならない。

それが自分の存在意義であるから。

というより気に食わない。

目の前の女は表情一つ変えずに盗賊を殺していた。

何というか・・・曲がりなりにも女が、いくら腐った連中相手とはいえ、

その手を汚しているのは忍びなく思つ。

しかしそんな事を彼女は知る由もない。

チツと舌打ちをし、不愉快そうな顔になる。

「無駄だと？ お前はあの連中がどうこう連中なのかわかつているんだろう？

生かしておけばまた下らん要求の犠牲者が増えるだけだぞ。

・・・先程のお前のようにな

少し見下すように睨まれた。

表情を僅かに締める。

『・・・確かにそうかもしだれないのでな。

だが今回の事で懲りて盗賊から足を洗うかもしだれないのでな。

これから改心して真面目に働いて生きていくかもしだれないのでな。

ってな可能性を持つ奴らを戦意も無いのに殺すのはどうかと思つ

んだよ』

と、諭そつとした。

・・・我ながらちと無茶苦茶だな。

対面の女性は一瞬目を見開き、もう既に姿が見えない逃げた盗賊の方向を向くと、

はあ、とため息をもらした。

「・・・もういい、わかつた」

両手の短剣を腰のベルトに刺した。

「お前・・・長生きしないと思つぞ」

呆れたように言われる。

その台詞に虚をつかれ一瞬呆然とした後、

ぶつと噴出す。

『あつはつはつはつはつ！』

いきなりこちらが笑い出したものだから当然彼女は怪訝な顔をする。

「・・・な、何だ？」

長生きしない・・・か。

『ははは・・・いや悪い。そうだな。その点には自信がある』

- - Side Aura - -

突然笑い出され戸惑つてしまつた。

どうにもこの男と喋つていると調子が崩れる。

「ははは・・・いや悪い。そうだな。その点には自信がある」

否定とも肯定とも取れる返事。

一瞬・・・だけだが何か寂しそうな目をしていたような気がする。

『・・・？ どうか』

こちらの曖昧な返事を「ああ」と返されると少し間が空いた。

やんやんやんやんの聞きたい事を聞いつか。

「『『ヒロ』で・・・』」

「一つの声が重なる。

『・・・』

「・・・」

『まざまざと目を逸らす。

「ホン、と咳払いをしてとりあえず向こうの事件を促すように手を差し出す。

「んじゃあ。色々と聞きたい事はあるんだが・・・。

とりあえず名前だな。俺の名はホルス。あんたは?」

ホルス?

当然、フルネームでは無いだろう。

もしかしたら本名ですら無いかも知れない。

要は自分という固体を認識する名称があればそれで良いという事だらうつか。

まあ、そういう考え方嫌いではない。

『アウラだ』

こちらもそれに合わせる。

一応、【アウラ・レクイユル】という姓名はあるが、
私を認識する名称というのであればアウラだけでいい。

対面の男 ホルスは意味深にニヤツとする。

「んじゃアウラ、アンタは何故・・・」

男の顔の前に静止を求める手の平を示した。

『次は私が質問をする番だ』

ホルスは少し目を丸くした後

「質問つておい・・・」

とぼやいたが、諦めたような表情でため息を付き、ビーズ、と手を差し出した。

『すまないな。 ではホルス。 何故砂海のど真ん中を
その様な砂海の旅に不相応な格好で歩いていた?
それも・・・たつたそれだけの荷物で』

相手の左手に目を移す。

改めて近くで見ても明らかに旅をする者の荷物ではない。
水や食料にしては少なすぎる。

男はそれを聞くとまた、はあ、とため息をついた。

「いやな・・・。あいつ等の前にも一度盗賊に遭つたんだよ。

そん時に・・・他の荷物は全て取られた。まあ命と、この小荷物
は助かつたんだけどな」

違和感。

また、嘘を吐いているな・・・

確信は持てないが、そんな気がした。

男の話は続く。

「で、俺はイルセア 知ってるよな?

西にある寂れた街だ。

そつから砂都に向かつていたわけだ。 それで途中で盗賊に荷物を
取られて、

戻ろうかどうか迷つたんだが・・・。まあそん時には既に砂海の
ど真ん中でな。

そのまま突つ切る事にした
しつとした態度でそう言い切った。

呆れた奴だ・・・

砂都ダシユタ。砂海の中では最も大きく、豊かな街だ。

そして年々、その人口は増えるばかりである。

それに反比例し、ダシユタ周辺の小さなオアシスに面する集落は、衰退の一途をたどっている。

小さい集落での生活に嫌気がさした若者は、故郷を捨て、豊かな生活を夢見ながら砂海を越えてダシユタへと向かうからだ。

最も・・・無事にダシユタでの生活を迎える者はその半数にも満たないのだが。

この男もそういう類であるうか。

しかし・・・。

ここからダシユタへはまだ一日はかかる。

途中に点在するほんの小さなオアシスを経由していけばあるいは辿り着けるかも知れないが・・・。

『この辺りの地理には詳しいのか?』

ホルスは首を振り、

「全然」

平然と言い放つ。

・・・・・

『無謀だ』

それが結論。

ホルスは軽く笑うと、

「そうかもな」

左手を腰に当て、軽そうに言つ。

「でもま・・・何とかなるだろ

頭痛がする。

本当に何とかなると思っているんだろうな・・・
こめかみに手やり考え込む。

「ん？ どうした？」

不思議そうにこめかみの様子を伺つ。

この男の話は恐らく断片的に嘘が混ざつている。

とはいえたゞ見ても目の前の状況、このまま放つておくのは見殺しに等しい。

そして未だ次に行くべき処は【視え】ない。

という事はこの男にはまだ助けが必要という事だらうか・・・？
ならば・・・やる事は一つ。

一際大きなため息をついた。

『ダシユタまで・・・私が送ろう』

- - Side Horus - -

意外な申し出だつた。

『いいのか？』

本心からそう思つ。

「ああ」

相手は恐らく自分が所々嘘を吐いている事に気付いている。
盗賊に前にも遭つたのは本當だが、全て自分で追い払つた。
荷物を奪われたのでは無く、

そもそも最初から荷物など、この小袋しか持つてはいない。

相手が嘘を吐いているのをわかつていて

それを特に追求する事も無く、まして共に行動しようなどと・・・

まあ・・・いいか

深く考えるのは止める事にした。

とにかくこの事はこちらにとつて都合が良い。

ダシユタへ向かう事も、この辺りの地理に疎い事も本当の事だ。

それに何より、彼女に對して少し興味が沸いていたのだ。

先程の小さな疑問が今は少しづつ大きくなっている。

もしも・・・自分と同じ時間を生きる人間なのであれば・・・

それ以上に嬉しい事はないんだがな

「・・・？」どうした？

目の前の女性が顔を覗き込む。

少し考えに浸りすぎていたらしい。

『あ、悪い。それじゃあ・・・よろしく頼む』
と、手を差し出す。

手を差し出された相手は怪訝な顔をした。

「・・・何だ？」

『ん、握手』

「・・・何故だ？」

『や、これから協力し合つて砂都に向かおうといつ事で』

それを聞いたアウラは一瞬呆然とすると、

すぐに呆れた顔になり、ため息をつきながらこめかみを抑える仕草

をする。

「・・・・・・協力し「合・ハ」ではなく、私がお前に協力「す・る」んだ阿呆が。

ぐだらない事を言つていないのでわざと行くぞ
そつ言つて歩き出しちまつた。

行き場の無くなつた右手を下げて腰に当てながら、
氣難しいこつた。

前に歩く女性を我慢な子供を見るような表情でため息をつき、
出来たばかりの足跡の方向へと歩き出した。

- -

「ホルス」

三刻程歩いた所でアウラが足を止め、振り返つた。

『ん、何だ?』

と、彼女の方に顔を向ける。

アウラは腰に下げた袋から何かを取り出そうとしていたが、
こちらの事を心配してくれているらしい。
少し頬が緩む。

「・・・平氣そうだな」

ん?

一瞬何の事かわからなかつたが、すぐに彼女の意図を理解する。

『ああ。暑さには強い方なんだよ俺は

や、まあ法衣の中身を軽く【冷却】しているのもあるがな。

彼女は少し訥然としない表情をしたが、

「そうか。・・・まあ良い。これをやる」

と何かをこちらに投げた。

それを右手で掴むと、そこから水分が籠つたような音がした。

『・・・水、か?』

渡されたのは両手に納まる程度の大きさの水袋であった。

「飲んでおけ」

と、踵を返し前へ歩き出した。

ほんの少し呆然とする。

どうしたもんかな・・・

確かに喉が渴いていないと言つわけでは無い。

実際イルセアで最後に食事を採つてから2日ほど

水分・・・というより何一つ口に含んではいないからだ。だが、自分にとつてはそんな事は大した問題ではない。

・・・と言つて過度な気遣いや遠慮は恐らく彼女の気に障るだろつ。これまでのやり取りで何となく彼女の性格を把握し始めていた。

『いいのか?』

とだけ聞き返した。

アウラは前へ歩を進めながら、

「ああ。私はお前に会う前に飲んでいるしな」

と、夕陽の朱に染まる彼女の背中は明らかに【嘘】を吐く。

これ以上は水、入らないぞ・・・この袋。

パンパンだった。

「それに・・・」

前を歩いていたアウラは足を止め、首だけ振り返りながら何かを言

いかけた。

『ん・・・・?』

「・・・いや。あと一刻程歩けば小さなオアシスに着く筈だ」

・・・・?

アウラが何かを言いかけた事に首を傾げるが、
『そうか。・・・悪いな。んじゃ頂くとする』

と水袋の蓋を開け、少量の水を口に含む。

それを見た彼女は表情をほんの少し緩ませながらフン、と鼻で笑つた後

ホルスの背後の夕陽に顔を向け、目を細める。

「そろそろ陽も沈む。今日はオアシスで夜を明かすとしようか」
了解、といつこちらの返事を確認すると、彼女は再び朱く染まつて
いく地平線へと歩き出した。

それに習いながら、前に歩く女性を見る。

やっぱ・・・妙なんだよな・・・

彼女には全く疲労の影が見えないし、何より汗一つかいていない。
それに・・・恐らく全く水分を口に含んでいない。

いくら環境に慣れきついていても、
どれだけ訓練を重ねても、

【人間】という生物である限り限度がある。

(・・・自分のような存在は別だが)

魔力で何かしらの外作用を起こしているのならば話はわかるが、そ
の様子も見られない。

盗賊を撃退した時の動きといい、少し人間離れしすぎているのでは
ないか。

あー・・・やべ

と、そこまで考えたところでハツとする
当然・・・アウラも同じ事考えるよな・・・

そう、ホルス自身もこの暑さの中平然としているし、汗一つかいて
いない。

ましてこの暑そうな黒の法衣を着て、だ。

彼女が自分に対し、同じ疑惑を抱く事は必定だらう。

さて・・・聞かれたらどう誤魔化すかな・・・

ため息をつく。

少し、気が重い。

- - Side Aura - -

やはり・・・妙だな・・・

後ろの男には全く疲労の影が見えないし、汗一つかいていない。

いくら暑さに強いなどといつても

【人間】という生物である限り限度がある。
(・・・自分のような存在は別だが)

全くもつて・・・後ろの男の正体が掴めない。

【ホルス】と名乗るあの男には余りにも多くの得体の知れないものが見え隠れする。

何故、自分はそのような者と行動を共にしようなどと思ったのか。
いくら【視えた】者はいえ少々怪しい部分がある。

そもそも、あの男が盜賊の類あるいは、自分に害を為す存在では無いといふ保証などどこにも無いのだ。

だが私は・・・

あの男の持つ【何か】に惹かれていた。
それに彼が自分に対し、害をもたらすという事は無いと思つてゐる。
根拠など何も無い。ただの・・・直感であつた。

- - -
それから特に会話を交わすことは無く、
二刻程、ただ黙々と歩を進めていた。

砂海の夜は唐突に訪れる。

朱の空と地平線がすれ違つた瞬間、一転して空は黒に包まれ、
星々が自己を主張し始めた。

風が吹く。

冷たい風。

昼間とはうつて変わって急激に寒くなる。

薄着の自分には少々堪えるが、

自身の体温が下がる事は決して無い為、さしたる問題はない。

「寒くないのか？」

後ろから声が掛かる。

まあ・・・自分の格好を見てみれば当然の事か。

『ああ』

と首を後ろに向け、少し口元を歪めながら、

『寒さには強い方なんだよ。私は』

先程のホルスの言葉を皮肉つた。

ホルスはその事にすぐ気づいたのか、一瞬目を丸くすると、
はは、と笑いを漏らし、

「そうかい」

と肩をすくめる。

ん・・・

前方に向き直ると平坦な地平線に変化が起つていて、事に気づく。
小さな突起物の集まりが見える。

後ろの男もそれに気づいた様子で、
「あそこか・・・? オアシスつて」
と問い合わせてきた。

ああ、と肯定し、

『もうすぐだ。急いで』

少し歩を早める。

- - S i d e H o r u s - -

視界に收まる程度の小さな泉。

それを囲むように群生するシダの木々が
冷たい風に葉を揺らし、穏やかな音を立てている。

前を歩いていたアウラは特に言葉を発する事なく、
手近なシダの木に身を寄せ、腰を下ろした。
ホルスもそれに倣い、隣の木の下に、
アウラと同じ方向を向いて座り込んだ。

彼女はそれを見て、

「済まないが・・・特に暖を取るような物は持っていない」
僅かに浮かない表情で言い放った後、

「眠れるか？」

と、問い合わせてきた。

『ああ。平氣だが・・・』
少し、戸惑つた。

一番最初に遭つた時より、彼女の口調は穏やかなものになっている。
更に、こういつたこちらを気遣うような発言が時々見られる。
自分は彼女にとつては少し・・・いや、かなり得体の知れない怪し
い存在の筈だ。

にも関わらず、こちらに對して余り警戒心を見せていない様子なのは
何故だろうか。

騙しているような・・・何か申し訳ない気がしてしまつ。

・・・う

意を決したよ、うに立ち上がる。

アウラの方に顔を向け、

『ちと・・・種明かしをしよう』

と、右手の人差し指を立てて悪戯っぽく笑つた。
そう言われた彼女は、何も言わずに首を傾げる。

立てられた指に自分の【魔力】を集中させると、
指先が七色に光り始める。

その光で地面に向かつて【8】の字を書き、交差点に横線を入れる。
すると、すぐ下の地面に描いた図形が淡く浮かび上がつた。

「な・・・」

それを見ていたアウラは目を見開く

「ホルス・・・お前は印術師・・・か?」

『ご名答』

ボツ

描かれた図形から火が上がった。

それを見ると、再び元居た木の下に腰をかけ、

『大体、7時間程度は持つ筈だ』

と、【炎上】の印にかけた力具合から適当な田算を挙げる。

アウラの方はしばし呆然と火を見つめると、
やがて溜め息を吐きながら、

「呆れた奴だ・・・」
と首を振りながら呟いた。

呆れた?

意外な反応。てっきり怒り出すか警戒されるかと思ったが。

『何がだ?』

「お前・・・盗賊の輩など自力で撃退出来たのだろう?」

と、呆れ顔のまま言われる。

あらま。痛いとこを突くね。

「そうかもな。ま、あん時は俺がどうこうする前にアウラがやっつ
まつたわけだが」

そう告げると、横に居る女性から一際大きな溜め息が聞こえた。

「・・・何故視えたんだろうか・・・お前の事が・・・」

こめかみに手を添えながら彼女は呟いた。

・・・?

「見えた？・・・って？」

何か今の咳きが聞き流してはならない様な気がして、
そう訪ねた。

彼女はこめかみに手を当てたままひりひりひりひりを見ると、
少し考えるようなそぞろじを見せ、
「まあ・・・良いか」
と咳きながら顔を上げて

「私は【助けるべき者】を【見る】事が出来る」
そう、言つた。

・・・・・!

目を見開く。

その一言で全てを理解した。

彼女は前に広がる泉に顔を向け、話を続ける。
「具体的には・・・そうだな。
誰かの助けを必要としている者の顔。
その者が居る場所はどこか。
どういった道を進んで行けばそこに辿り着けるのか。
それらの情報が頭の中で浮かんでくるのだ」
少し間を置いた。

「まあ・・・信じられないだろうがな」
と静かに微笑みながりつつむいて目を閉ざす。

居た。

やつと・・・見つけた。

【救済者】 自分と役割を連ねる者にして同じ時を過ぐす者。

『それで・・・俺が【視えた】のか?』
アウラが顔を上げてこちらを見る。

「・・・今の話を信じるのか?」

不思議そうな顔で尋ねてきた。

『ああ。嘘をついている眼はしていないな』

アウラの顔を覗き込みながらその疑問に答える。

そつ言われた彼女は「そつか」と返しながら穏やかな顔で前に向き直る。

「まあ・・・それで特に私の力を必要としないであろうこの男が
何故私に【視えた】のかが解らない。そう考えた」

『・・・なるほどな』

「今まで私に【視えた】者は紛れも無く【助け】を必要とする者だ
った。

・・・中には私の手に負えぬ状況も沢山あつた がな
と彼女は何かを思い出したように空を見上げる。

「その度に自分の無力を嘆いた。だから、死に物狂いに技を磨いた。
それでも・・・まだまだ人を助けていくには力が足りない。
・・・そつ、思つ」

『・・・』

しばし返すべき言葉を見失う。

まるで昔の自分の姿を見ているようだった。

ただただがむしゃらに【使命】を全うしようとする自分。

その為には余りにも無力な自分。

そういつたジレンマに苦しみ続けていた自分。

『アウラは・・・何故助ける』

だから かつて自分に問い合わせた疑問を投げかける。

『助けるべき者が見えるからといって、

それを助けに行かなければいけないってわけじゃないだろ？
なのに、何故そいやつて人を助けて生きているんだ？』

それを聞いたアウラは静かに微笑み、

「人を助けるのに・・・理由がいるか？」

そう ホルスの眼を見て答える。

その顔に迷いは無い。

紛れも無く、それが彼女の出した答えなのだろう。

「いや・・・参った。

散々自分の使命について考え続けていた自分が恥ずかしくなる。

『アウラ・・・アンタ意外と単純なんだな』

にやつきながらそう言い、自分の中の動搖を誤魔化す。

「なつ・・・！」

と、アウラは目を見開いた後、

「う、うるさい！ 話は終わりだ！ もう・・・寝るぞ」

ホルスとは逆側を向いて休むような体勢を取ってしまった。

了解、と笑つて答える。

意外と可愛い奴・・・

そんな事を思い、腕を組んで俯きながら目を瞑り、眠りを導いた。

しかし・・・

つま先を向けている方向から流れ出る淡い暖かさを感じながら考えに浸る。

印術師、か・・・

印術 魔力を用いて特定のパターンで【印】を描き、様々な効果を発生させる魔術。

通常、魔術とは生まれ持った魔力の属性に順ずる物しか扱う事はできない。

属性、即ち火・水・土・風・光・闇。

火の魔力を持つて生まれたのならば火を扱う魔術【火術】を、水の魔力を持つて生まれたのならば水を扱う魔術【水術】を。どんなに魔力を洗練させたとしてもその枠から出る事は通常、不可能なのだ。

だが印術はそれに縛られる事は無い。

ただ描いた【印】とそれにかけた魔力の強さにより、相応の効果が発生するだけ。

【印】には無数の種類があり、

先ほどホルスが用いたような火を発生させるものもあれば、その場に雷を落とすようなもの、人を眠らせるといった人間に對して直接干渉するものさえもあるらしい。

もし、数多くの【印】を扱う事ができるのならどんな魔術師よりも脅威となるだろう。

ただし印術には欠点がある。

まず、描くという行為が必要であり、通常の魔術よりも発動に時間

が掛かるといつ事。

そして何より問題なのは【印】を描く際、少しでも形や魔力に乱れが生じれば、

その効果が全く違つ物になつてしまつ、といつ事だ。
術者に害が及ぶ事もあれば意図しない周りの人間を巻き込む事もある。

今まで印術師を名乗る者が【印】を暴走させた事例は数多い。
本当に【印】を使いこなす事ができる印術師などこの世界にほんの僅かしか居ないといつ。

だが先ほどのホルスの【印】

その火力は暖を取るには丁度良い物に調節してあり、
あまつさえその発動時間すら意図して設定していた。
少なくとも彼はあの【炎上の印】に関しては自由に使いこなしてい
る。

そして武器を持つた複数の人間にも物怖じしないあの態度を見る限
り、

恐らく、その他にもまだ扱える【印】があるのだと思つ。
一体、彼は何者なのか。
その疑問がまた少し強くなる。

軽く溜め息を吐いた。

まあ・・・考えて分かる事でも無いか。

とりあえずホルスが何者であろうと無事にダシュタまで連れて行けばそれで良い。

そう自分に結論付ける。

他人を詮索しすぎるのには性に合わない。

- 「アウラ・・・アンタ意外と単純なんだな」

先程のホルスの言葉を反芻する。

・・・ そうかもしけないな。

口元を緩め、まどろみに身を預けた。

- -

ザツ

砂の音、シダの木の葉が擦れ合つ音以外の不自然な物音が耳に入り、
目を開く。

殺氣を感じる。それも 相当、数が多い。

『ホルス』

体勢を変えぬまま、後の男に声を掛ける。

「・・・ ああ

どうやらホルスもそれに気付いているらしい。

二人共同時に立ち上がる。

囮まれているな・・・

辺りを見回すと、小さなオアシスを囮うように黒い影が見え隠れする。

恐らく・・・二十人以上は居る。

先手を打つか

腰の短剣を取り出しながら、腰を落して【縮地】の体制に入る。

「あー・・・ ちょっと待つた」

と視界に静止の手が写る。

『・・・ 何だ』

と苛立たしげに返すと、ホルスはそれに答えず前に出た。

何をするつもりだ？

短剣を構えながら、ホルスの拳動を観察していると、

「おーい。お前ら何の用だ？」

ホルスは手を腰に当てながら緊張感の無い声で闇に語りかけた。

それを見て溜め息。

本当に呆れた奴だな・・・

どう考へても奴等の放つ氣配はこちらを殺そうとしているものだ。なのに・・・あの緊張感の無さ。

「これは失礼・・・」

その声に一つの影がこちらに進みながら答えた。

「いや何、そちらのお嬢さんに用がありましてねえ」

闇から姿を現し、不気味に笑いながらこちらに目を向けている。

赤い長髪に黒いマント。

聞いた事がある。

確か・・・シヴィラ・クルースニル。

ダシユタ区域の盜賊をまとめている男だ。

厄介だな・・・

この男は卓越した印術師と聞く。

何か印術を描く前に殺つてしまえば良いのだが、武器を構えているこちらを前にしてあの様子。

何らかの防御系の【印】を事前に描いていると見て良いだろ？。

「や、だから何の用？」

と、ホルスは相も変わらず緊張感が無い。

それを聞いたシヴィイラがククッと笑うと、前後左右から足音が迫る。姿を現した影達は曲刀を構えながらこちらに殺氣を放っていた。その内の一人、見覚えがある。

成る程な。

大方、昼間逃げた二人がこの男と仲間を引き連れ、復讐に来たといった所か。

あの様子だとホルス共々闇に葬るつもりだらう。

『やれやれ・・・』

と首を振る。

『ホルス、あの二人を逃がした結果がこれだ。どうするのだ?』

ホルスは嫌そうに溜め息を吐くと、

「仕方ない・・・。アウラは手を出すな。

アンタには人を【助ける】事以外に手を血に染めて欲しくない。

『ういう無駄な争いを何とかする事は・・・俺の分野だ』

いつになく真剣な表情でこちらに言い放つ。

この期に及んで・・・この男は何を言つてゐる。

『だが・・・! いくらお前が』

「とにかく。アンタは手を出さないでいい。ま・・・見てな」と、こちらの言い分を聞く事無くホルスは前を向き直つた。

赤髪の男は相変わらず不気味な笑いを浮かべながら、

「戯言は終わりましたか? では・・・死んで頂きましょ!」

そう言つと、親指と中指を弾いて音を鳴らした。

周りの男達が一斉に襲い掛かる。

ちつ!

手を出すなと言わてもこちらにも襲い掛かる者が居るのだ。

そう言うわけにもいかない。

短剣で一番近い位置に居る男へ向けて攻撃態勢に入った刹那

周りに居る全ての盗賊たちの顔前に光の図形が浮かび上がる。

次の瞬間、

「ぐあああ！」

ホルス、シヴィラを覗く全ての男たちが吹き飛び、倒れた。

な・・・何が起こつたんだ？

今起こつた事が理解できず、呆然と周りを見回す。先程までこちらに襲い掛かるとしていた男たちは顔を抑えながらうめいている。

『ホルス・・・今のは、お前がやつたのか・・・？』

ホルスは振り返ると、

「まあな・・・ま、ただ吹き飛ばしただけだが」

しつとしした態度でそう言つた。

何て奴だ・・・

今のは印術なのだろうか？

あんな一瞬で・・・しかも、二十以上の数を・・・？

「な・・・！」

うろたえていたのは前に立つてあるシヴィラも同様なようだ。

「念映・・・だと・・・！？」それも複数・・・そんな馬鹿な・・・

と、目を見開き、唖然としていた。

それを聞いたホルスが前へ向き直る。

「ん・・・？ ああ、アンタも印術師なんだな。

【障壁】の印を張つてあるのか」

人差し指で頭をかきながら、面倒くさそうに言つと、

「で？ 勝負すんの？」

そう言いながらシヴィラを睨みつけた。

- - Side Horus - -

赤髪の男は後ずさりながら、

「く！ ・・・おのれえ！！」

指先に魔力を集め、【印】を描きだした。

「ホルス！ 来るぞ！」

後から声が掛かる。

『わーつてる』と、前を向いたまま手を振つて答えた。

前で描かれている印に目を向ける。

【光弾】だな。ま・・・あの程度の魔力じゃ無駄だが。

次の瞬間、

前方の男の前に描かれた【印】から、

四つの光の弾がこちらに向かつて放たれた。微動だにせずにそれを待ち構える。

パン！

光の弾がホルスに辿り着こうとした瞬間、こちらの【障壁】に阻まれ、一斉に弾けた。

と、眼前的の男を見下したように眺める。

『ム・ダ』

「あ・・・あ・・・」

対する赤髪の男は自分の印術が通用しないのを見ると、
「お、お前達！ とつとと起き上がりてこの男を殺れ！…」
と、うめいている部下（？）を叱咤している。

この情けない男でもそれなりに統率が取れているのか、
それを聞いたほとんどの盗賊は
顔を抑えながら曲刀を手に取り、立ち上がった。

溜め息。

齎し足りないかね。

どうしたものかと考えた後、一つ大事な事を思い出した。

『あー・・・そうだ』

昼間に見た盗賊二人に目を向ける。

一回目の無駄な【争い】を起こした奴等だ。

・・・容赦は、しない。

さよーなら。

一人の顔の前に【爆破】の印を思い描き、強めの魔力を送る。

目の前に再び【印】が現れた二人は、
「ひつ」と怯えながら顔を抑える。
直後、彼らの眼前の空間が輝きだす。

鈍い爆発音。

二人共首から上を失い、血を噴出しながら砂地に沈んだ。

『仮の顔も一度まで・・・つてな』

冷ややかにその光景を見つめながら言ご放つた。

「・・・ 気の短い仏だな」「
後から突っ込みが入る。

『ほつとけ』

と、言つた後『あつ』と今の自分の発言に気が付き、振り返つた。
『今、ダジャレじゃないからな?』

釘を刺す。

アウラは呆れたように溜め息を吐くと、

「わかつたわかつた・・・」

手を振り払う仕草をしながら言つた。

周りに居る盜賊達はしばし唾然としながらその光景を見つめていた。
そして・・・ その事態を認識すると、
叫び声を上げながら我先にと逃げ出し始めた。

やれやれ・・・。もう来んなよ。

それを見送つた後、一人残つた前の男に目を移す。

『で? どうすんだ?』

そう言いながら威圧的に睨みつける。

「・・・くつ・・・」

赤髪の男は屈辱を浮かべた表情をすると、
黒いマントを翻し、夜の砂海へと逃げ去つていった。

それを見ながら、肩をすくめる。

さて・・・と。問題はここからなんだよな・・・。
これだけ自分の力を見せてしまつたのだ。

後にはいる女性はさや、自分といつ存在を怪しんでいるだろ？

かといつて今はまだ、自分の正体を明かす訳にはいかない。

『どう言い訳したもんかな・・・。』

『えーと・・・。あー、なんだ』

『気まずい思いをしながら、後を振り返る。

『あれ？』

だがアウラは既に元居た木の下に歩を進め、座り込もうとしていた。
「とんだ邪魔が入つたものだな・・・。明日は陽が登る前に出発する。

そんな所に突つ立つていないでとつとと休め

そう言いながら地面に身を預け、先程と同じように眠る体勢に入つてしまつた。

拍子抜けした。

てつくり質問攻め合つものだと構えていたのだが。

『えー・・・と・・・。いいのか？』

と、思わず聞いてしまひ。

彼女は溜め息を返すと、

「・・・今更お前の事に関してどうこう詮索するつもりは無い。

私はお前をダシュタまで送り届ければそれで良いだろ？

顔をこちらに向ける事無くそう言つた。

『・・・そか』

自分としてはありがたい事だが、

身構えていた分、何か釈然としない気持ちで元居た木の下に身を下ろす。

『んじゅ、おやすみ、ヒ

「ああ

そつ挨拶を交わし、再び眼を閉じて眠りこついた。

「ホルス」

横から聞こえる自分の名に反応し、うつむいた眼を窓けた。
明るみが射し始めた空が狭い視界に映る。

聞も無く陽が昇り、砂海は再びその顔を変えようとしていた。

横に屈むアウラは既に立ち上がり、体に付いた砂を振り落としている。

『ん・・・行くか

よいしょ、と立ち上がり、砂を払い落とした。

『そんじゅ、今日も、よひしくお願ひします』

と下腹部に手を当て、礼をしてみせる。

対するアウラは軽く溜め息の後、

「さつまと行くぞ」

と、歩きだす。

その後姿を見ながら

予想通りの反応だねえ・・・

と肩をすくめながら再び彼女の足跡を辿り、歩き出した。

ん・・・?

前方の朝陽が昇るつとじていろた。
その色に少し違和感を感じた。

足を止めて良く空を凝らす。

「・・・? どうした?」

後ろからホルスの声。

光を増す空の色。

だが遠くの朱色の空にほんの少しこつもとは違う、茶褐色が混ざつ
ていた。

『・・・まあいな』

「ん、何が?」

あの空の色は・・・

『砂嵐が来る』

と、振り返る。

少しの間。

するとホルスはしれつとした顔で

「あ、そう」と
と言い放つた。

『なつ・・・』

途端に顔の温度が上昇する。

『「あ、そう」とは何だ「あ、やう」とはー、お前は砂嵐の恐ろし
さを』

と、そこまで言いかけてハッと気づく。

『・・・印術か』

「そういうこつた」

ホルスはぴつと人差し指を立て、七色の光を見せた。

- -

オアシスを発つてより約三刻、

太陽は既に上天に昇り始め、容赦ない灼熱の光を地上に照らしている。

そして前方の茶褐色の陰りは距離をつめ、
間も無くこちらに到達しようとしていた。

『で』

後ろを振り返る。

『そろそろ来るが・・・。どうするのだ？ 昨夜にシヴィイラの攻撃を防いだ印を使うのか？』

ホルスは首を傾げ、

「シヴィイラ？」

と、聞き返してきた。

『・・・ああ、すまない。シヴィイラというのは昨夜盗賊を率いていた赤い髪の印術師の事だ。

あれでもこの付近の盗賊を統べる男でな・・・。名は知られている』

「へえ。・・・まあそれはいいか。あん時のつていうと・・・【障壁】か。

あれでも防げ無くは無いんだろうが、一方向にしか効果無いからな・・・

そう言いながらホルスは上に向かつて虹色に光る指を動かした。

「これなら平氣だろ

すると、上方に二メートル程度の光の図形が描かれ始める。

『・・・これは、何の印だ?』

描かれる図形を見上げながら訪ねる。

「【結界】つてやつだ。この印の下に居れば大体のものは防げる。砂嵐くらいなら何の問題もない。・・・うし、出来たつと」

描かれた光の図形がその輝きを増した。

『となると・・・。砂嵐が止むまではここを動く事ができない、か』
といふ弦きにホルスがこちらに顔を向け、

「ああ、その辺は心配いらない」

と言いながら、にやつとする。

首を傾げるこちらに説明を続けた。

「印術を描く対象には二通りあってな。

その空間そのものに印を描く【空間描画】と、

対象とする人物に対して印を描く【対象描画】つてのがある。

そんで

「

『今のは私がホルスを対象とした対象描画で描いたわけか』
説明を続けようとしているホルスに割つて入る。

「ん・・・そういうこつた。俺自身の頭から二メートル上に対して
描いた。

だから歩こうが走ろうがこの印がある内は俺の周囲は砂嵐の影響
は受けない。

ほれ

ホルスが前に移動して見せると、上にある印も同様に移動する。

『・・・そつか』

成る程な・・・・・・ん?

ふと一つの疑問が沸き上がり、それを口に出す。

『 そ う い え ば ・・ 昨 夜 の 連 中 に 対 し て 使 つ た あ れ は ・・ ？ 』
あ れ が 対 象 描 画 と や ら で 描 か れ て い た と す る と 恐 ろ し い 。

今 の 説 明 か ら 察 す る に そ れ は 如 何 な る 回 避 も 不 可 能 と い う 事 。

「 ん ・・ ？ あ あ 。 あ れ も 対 象 描 画 だ 。 ま 一 描 か れ た ら 避 け る の
は 無 理 つ て こ つ た 」
と 軽 々 し い 口 調 で 返 し て き た 。

深 く 溜 め 息 を 吐 く 。

『 ・・ お 前 だ け は 、 敵 に 回 し た く な い な 』

そ う ホ ル ス に 向 け て 投 げ や り に 言 い 放 つ 。

ホ ル ス は し ば し 田 を 丸 く す る と 、

「 ・・ あ つ は つ は つ は つ ！ 」

突 然 笑 い 出 し た 。

『 ・・ な 、 な ん だ ？ 』

ホ ル ス は ひ と し き り 笑 う と 、 訝 し げ に そ れ を 眺 め る こ そ に 対 し 、
「 い や ・・ 悪 い 。 ま 、 そ れ は 無 い と 思 う ぞ 」

意 味 深 に に や つ き な が ら そ う 言 つ た 。

本 当 に 良 く 分 か ら ン 奴 だ な ・・

首 を 傾 げ な が ら 、 だ と い い が な 、 と 返 す 。

と 、 途 端 に 風 の 音 が 変 わ り 視 界 が 狹 く な つ た 。

激 し い 風 が 砂 を 舞 い 上 げ 、 上 天 に 位 置 す る 太 太 の 姿 す ら お ぼ つか な
く な る 。

大 き 田 の 砂 嵐 だ 。

だ が ・・ こ そ に は 何 の 影 韻 も な い 。

ホ ル ス の 【 結 界 】 の 印 と や ら が 効 い て い る ら し い 。

「・・・來たようだな」

周りを見回しながらホルスが呟く。

『ああ・・・。だが、これならば特に足を止められる事も無いな』
上の印を見つめながら、大した物だ、と感心した。

「・・・あーそうだ。ついでに。『ほれ』

とホルスがこちらに視線を送った瞬間、
目の前に光の図形が輝きだす。

『！』

咄嗟に後ろへ飛ぶ。

だが・・・印はそんな事では避けられないのはわかっている。
一体、何の印を・・・！？

途端、体が冷やりとする。

上から来る熱を中和してくれるような、心地よい感覚。
な・・・何だ・・・？

「・・・おーい・・・」

雜音にまぎれたホルスの声。

結界から出た為、周りは砂が暴れ狂っている。
「別にそれ、涼しくなるだけで害はないぞー」

・・・・・やられた。

無言でホルスの元に戻る。

結界の中に入り、まとわり付いた砂を払い落としながら、
『・・・せめて一言断つてからやつてもらいたかったものだな
じろーっとホルスを睨む。

対するホルスは

「い、いやー・・・。もつ少し俺を信用してくれる助かるんだが・
・」

と半笑いで人差し指でこめかみをかいている。

「・・・無理か」

『無理だな』

ムスツとした口調でそう返した。

が、冷静に考へると少し自分も動搖しそぎたかもしねれない。
先ほど描かれた印から心地よい涼しさを感じながらそう思い、
『まあ・・・なんだ。だがこの印は快適だな。・・・感謝する』
と付け加えながら前に向き直った。

『行こうか』

「あ、ああ・・・ふつ」

後ろから不自然な返事が返つてくる。

『・・・何が可笑しい!』

- - Side S i v i l l a - -

仄暗い自室には焦げた臭いを放つ死体が三つ。
あの時逃げていった部下の成れの果てだ。
あれ程の屈辱を受けたのは初めてであった。

おのれ・・・

役立たずの癖に、のこのこと戻ってきた塵を
半ばハツ当たりで始末したものの、気分は全く晴れない。

あの男・・・ホルスとか言いましたか。

聞いた事の無い名前である。

だが・・・彼の者の力は常軌を逸していた。

まともにやり合っては、恐らく自分の力では全く敵わないだらう。

しかし自分とてプライドというものがある。

このまま泣き寝入りをするつもりは毛頭ない。

少し頭を冷やし、奴に復讐する為の策を模索する。

あの印術師と一緒に居た女・・・。

前に何度か部下から報告を受けた事がある。

どこからとも無く現れ、ことごとくこちらの邪魔をしているらしい。短剣の達人で尋常ではないスピードで動くとか・・・。

何者かはわからないが、一つ確かな事がある。

それはあの印術師と同様、自分にとつて邪魔者であるといつ事、何より奴と何かしらの関係を持つ者という事。

・・・利用しない手は無い。

ドアが開く音。

『来ましたか・・・』

背中に巨大な剣を背負つた男が、正面のドアから入つてきた。

「・・・相変わらず辺鄙な所に住んでやがんなあ。シヴィラ」入ってきた男は部屋を見回しながらそう言つた。

『無用な客は避けたいからですよ』

「へつ、そうかい」

この男の下品な態度は昔から余り好きではなかつたが、

腕だけは確かなもので、重要な局面ではいつも仕事を依頼している。

「で?」

男がこちらに眼を向ける。

「今回は何をすりやいいんだ?」

【砂海の台所】

俗にそう称される砂都ダシュタ入り口付近の市場。既に陽が沈み始めているにも関わらずまだ多くの人間が往来している。

『存外・・・早く着いたな』

まさか誰か人を伴いながらあの場所から2日足らずで着くとは思わなかつた。

まあそれはあくまで相伴する者を一般人に当てはめて予想していたからだが。

「だな。俺一人だつたら何日掛かつた事か・・・」

とホルスがこちらの呟きに応じる。

『そうか？ お前ならば私が居なくとも問題なく辿り着いた気もしているんだが・・・』

と首を傾げた。

それを聞いたホルスはこちらを向き、

「あれだ。・・・方向音痴なんだよ、俺は」

と溜め息を吐く。

一瞬の間。

『・・・まあ、 そう言つ事にしておこうか』

ホルスに顔を向けずにそう答える。

この男の嘘にはあまり意味がない。

大抵は答えたくないものをばぐらかす為のものだ。

「そういうこつた」

そして嘘とばれている事も恐らく分かっているのだろう。
どこかそれを楽しんでいる風にも見える。

同時にどこかそのやり取りを楽しんでいる自分がいた。

『で？ これからどうするのだ？』

遠まわしに【ホルスの目的】を探る質問だ。
別に答えは無くとも良いが、ホルスがどうばぐらかすかに興味がある。

ホルスはそれを聞くと、少し表情を締め、

「争いを止める」

ただ一言、前に顔を向けながらそうつ囁つた。

・・・？ 争い？

どうやらばぐらかしているわけではなさそうだが・・・。

そう言えば最近、ダシコタは各地から兵を募つていろいろといつ話を聞いた。

真偽は分からぬがその兵士で他国に侵出するといつ噂もある。

まさかそれを？

『戦争をか？』

「・・・ああ」

『・・・そつか』

確かにこの男の実力ならば、それを成す事も可能かもしれない。
だが・・・

『敵にならなければ・・・良いな』

と、小声を漏らす。

前にも思つたがこの男は色々な意味で敵に回したくはない。

だが【視えた】者がホルスの目的の延長線上にあるならば・・・

戦うしかない。

ホルスはにやつと口を緩めた。

「前にも言つたが、それは無い。
もしそんな事態になるんなら俺の方が退くしな」

『・・・何故だ?』

と首を傾げながら問う。

私が現れただけで退く、だと?

勝てないからとかそう言つた理由ではないだろう。
まともに戦えば、どう考へてもこちらの分が悪い。
・・・こちらが死ぬ事は無いという点を差し引いても、だ。
ならば何故?

「んー・・・俺には【導き】が無いから、だな」
ホルスは顎に手をやり、上を向きながら漠然とそう答えた。

『導き・・・?』

一瞬何の事か分からなかつたが、

一つ思い当たるものがあり、はつとする。

『私の助けるべき者を【視る】能力の事か?』

「そ」

・・・この男・・・私の能力について何か知つているのか?
自分自身は何故このような能力が備わつたかなど知る由もない。
だがこの能力を【導き】と呼んだ今の口ぶり、

何となくホルスはこの能力に関して既に知識を持っている気がする。

『ホルス・・・お前は』

何を知つている? そう問おうとした瞬間、視界が暗転した。
いつもの感覚。

辿り着くべき場所へのルート、そしてその対象が一瞬にして記憶に

刻まれる。

近いな・・・ダシユタの中か。
どうやら新しく助けが必要な者が現れたらしい。

「どうした?」

ホルスがこちらを不思議そうに窺う。

『仕事だ。次のは』

溜め息混じりにそう言つた。

ホルスにはもう少し聞きたい事があつたが・・・。

【視えた】ものは何を置いても優先しなければならない。

「ん、そか。・・・一人で平氣か?」

社交辞令のつもりなのだろうが言つ相手が悪い。

『誰に向かつて言つている?』

ホルスはハハツと笑いを漏らすと、

「またな」

と一言、こちらに向けて言つた。

『出来れば、もうお前のような怪しい奴と関わるのは御免だ』

冗談混じりに実際の考えとは逆の言葉を返した後、

『では、達者でな』

そう言い残し、目的地に向かつて駆け出した。

- - Side Horus - -

「出来れば、もうお前のような怪しい奴と関わるのは御免だ」・・・
・か。

先程の言葉を反芻し、苦笑する。

『残念ながら、嫌でも関わる事になる・・・』

駆け出した【妹】の後ろ姿に向けて呟いた。

『・・・必ずな』

さて・・・陽が沈む前に、と。

周囲を見回し、対象とする人物を探した。

『・・・あいつがいいか』

市場で店じまいをしていた小柄で恰幅良い商人が目に留まる。

『ちょっとといいか?』

商人の肩を掴み、声をかける。

男はいきなり肩を掴まれ、顔をしかめながらこちらを向くが、手に握られた物を見るとたちまち愛想よく対応してきた。

「はい、なんでしょうか?」

ちょろいな・・・

この手の人間はこの銀貨を見ると態度を豹変させる。

長年養つた勘である程度情報を握つている人間、

尚且つ金品による懐柔が容易な人間は見抜く事ができた。

自分の【力】で必要な情報を得る為には
その人間に触りながら話を聞かなければならない。

そして今、まず知りたい情報は・・・

『ダシユタが戦争やらかすってのは・・・本当か?』

男はそれを聞くと少し頬がぴくつとしたが、笑顔のまま、

「……どこでそれをお聞きになつたんで？」
と尋ねてきた。

『本当にようだな』

質問には答えずにそう返す。

「……仰る通りで」

と、男は声を低くしてそう答えた。

やれやれ……だな。

そうなると聞きたい質問は一つ増える。

寧ろ……それが本題だ。

『……主軸は誰だ?』

肩に手を当てたまま尋ねた。

それを聞いた男は目を見開くと、

「何故……そのような事を?」

そう少し低い声で言つた。

ビンゴ……つと。

武装した男が頭の中に浮かぶ。

年齢は四十台前半程度で引き締まつた顔をしている。
明らかに軍部の者だらつ。

と、なると……

ダシュタ政府の意向では無い可能性がある。

『いや、ちょっと気になつただけだ』

商人にはそう取り繕つた。

それを見た商人は、

「左様ですか……それでは私は」

とそそくさとこちらに背を向け店じまいの作業に戻つた。

『ああ、悪いな』

・・・さて

あの態度を見ると、どうやら相当な情報規制がされているのだろう。
銀貨一枚では【戦争が行われようとしている】という情報しか提示
しないといった所か。

もう一、三枚渡せばその主軸の人物についての情報も得られそうだ
が、
その必要はなかつた。

得るべき情報は得る事が出来たからだ。

今【視えた】奴の元に、今晚にでもお邪魔するでしょうかね
そう思いながら、踵を返した。

- - Side Aurora - -

頭に思い浮かぶ道筋をひたすら突き進む。

市場からは大分遠ざかり、人影もまばらになつていいく。
恐らくは居住区だろう。

一見すると自分の助けを必要とする者が居るとは
思えないような平和な場所に思えるのだが・・・。

視えた対象の周りには、

この辺りに構える住居と似た構造をした家があつた。
目的の対象はこの近くの筈だ。

入り組んだ路地を突き進み、少し開けた場所に出る。
その途端、頭の中に浮かんでいたイメージが消えた。

・・・この辺りか。

辺りを見回す。

今回の対象は4、5歳程度の男の子だった。視えた場所から移動していないのであれば、どこかの家の近くの路地に居る筈だが・・・。

と、広い街道をはさんだ向かいの路地に、背中を丸め、座り込んだ子供が見えた。

・・・・！ まさか・・・既に・・・・！？

【縮地】に近い速度で子供の元へ一瞬で駆け寄る。子供の横に辿り着き、近くでその姿を確認した途端、どつと肩の力が抜けた。

・・・地面に・・・絵を描いていたのか。

安堵のあまりため息を吐いた。。

・・・が、すぐにその油断を振り払い、気を引き締め直す。この子供が【助けを必要とする者】という事を忘れてはならない。

とにかく・・・。

そろそろ陽が暮れる頃だ。

このような小さい子供が一人で外に居るのは危険だろう。これからこの子を護るにしても家の中に居てくれた方が何かと助かるのだが・・・。さて、どうしたものか。

『何を、描いているのだ？』

いきなり【家の中に入れ】と不躾に言うのも何だったの、腰を落とし、できるだけ穏やかな声で子供にそう問いかけた。

子供は一いちらを見上げると、笑顔を見せ、

「ラクダだよつ」
と元気良く答えた。

どう反応されるか内心少し不安であつたが、
幸い、明るく素直な子供なようだ。

こちらに対しても警戒心を持たれる事はなかつた。

どれ・・・としゃがみ込み、

子供と並ぶようにして地面に描かれた絵を覗き込む。

『上手く描けているな』

月並みなお世辞を言つと、

「へへー」

と、得意気な表情をする。

「僕ね、大人になつたらラクダに乗つて世界中旅をするんだ」

『ほつ・・・それでラクダを描いているのか』

「うん。でね、でね、色々な街で物を売つたり買つたりしてー、
いつか世界一の大商人になるんだ」

嬉々として夢を語る子供を見て穏やかな気持ちになる。

砂海の子供としての狭い定義の中での最大限の夢なのだろう。

『それは・・・立派な夢だな。

何故、そんな大商人になりたいのだ?』

「それはね、一杯稼げば、母ちゃんも父ちゃんも楽できると思つんだ」

『そうか。えらいなお前は』

そつ言いながら子供の頭を撫でる。

こんな時間に一人で居ると言つ事は両親共に遅くまで働いているの
だろう。

察するに両親共に遅くまで働いている寂しさの裏返しなのだろうか。
しかし、自分が働く事で両親に樂をさせようこう考へは、

「」の幼少で中々思って立つ事ではない。

良い子供だな・・・

そんな考えがよぎると同時に、

絶対に「」の子を助けなければならぬこと、使命感が強まる。

が、

「といひで・・・おばなちゃん誰?」

「」の不意の一言で脳天に凄まじい衝撃が走った。

『な・・・お・・・おば・・・おばなちゃん・・・おばなちゃん

!?』

「? どうしたの?」

『い、いや確かに私は実際年齢的にはやのお・・・おば・・・ちゃんと言えなくもないが、あ、いや、しかしだな、私の見かけは20歳の頃から変わつていない筈であつて決してその・・・お・・・おばちゃん

・・・等とこいつのからは程遠い者だと自負して居るのだが・・・

はつ・・・もしかしたら実は少しづつ老けていたのか? 子供の頃には

私はわいわいの、お、おばなちゃん・・・? に見えるのか・・・?

い、いや

そんな筈は・・・し、しかしもしかしたら・・・』

と、ふと自分が意味の分からぬい独り言を齒じて居る事に気づいた、はつとする。

三十数年生きてきた中で「おばなちゃん」などと言われた事は初めてだった。

余りのショックにすっかり取り乱してしまったが、

「」は上手く取り繕わなければ・・・。

『い、いや…すまない。私は通りすがりの者だが…』

近頃この周囲に不審な人物がいると聞いていたのでな。

お前のような子供が一人で遊んでいるのを見て心配に思つて声をかけたのだ』

「ふーん」

それを聞いた子供は特に関心が無むさうに地面への絵描きを再開する。

咄嗟に考えた言い訳だが…

特に不審に思われている様子は無い。

『さて… そろそろ陽も沈む。そろそろ家の中に入つてはまびつだ?』
なるべく穏やかに言つたつもりだったが、
どうも少し言い方がきつくなつてしまつ。

こつこつのは… 正直苦手だ。

子供は少し首を傾げた後、

「うーん、わかつた」

と、意外にも素直に立ち上がり家の入り口の方向へ歩き出した。
その姿を見て小さく安堵の溜め息を吐いていると、
子供がこちらに振り返り

「じゃーねー！ おばちゃん！」

と手を振つて来た。

「うぐ…・・・ま、まだ言うか。

『あ、ああ。またな』

と引き攣つた笑顔で手を振り返す。

家の扉が閉まるのを確認した後、
再度周囲の気配を探る。

・・・やはり、特に不審な気配は無い。

今回のように【視え】てからある程度時間に余裕があるケースはさほど珍しくは無い。その場合はほぼ確実に【場所】に対する危険の察知、つまりはその【場所】にいる全員が助けを必要とする者と言つ事が・・・。

この周囲にはもう人の姿は見えない。

当然、家の中には多くの気配があるが・・・。

今回【視え】たのは外にいたあの子供一人だった事から家の中に居ればとりあえずは安全な可能性が高いだろう。

そう思いながらも周囲の警戒を続けていると、一人の男がこちらの方に近づいて来るのが目に付いた。特に今の所殺気は放っていないが・・・。

・・・？ 笑っている・・・？

近づいてくる男は何故かこちらを見てニヤついている。

大剣を持った大男・・・。

明らかにこの住居区には相応しくない者だ。

『そここの男・・・私に何か用か？』

腰の短剣に手を当てながら男に向けてそう言つた。

「ククク・・・」

男はそれに答えずただニヤニヤしながら下卑た笑いを浮かべていた。

短剣を抜く。

『何が可笑しい・・・』

男はこちらが武器を抜いたのを確認すると、少し表情を変え、

「いやいや……手間が省けて助かるぜえ……」と呟いた。

『……？ 何を言つている』

「クク……あの男はどうした？」

その言葉を聞いてハツとする。

あの男……というとホルスの事を言つてゐるのだろうか。自分とホルスが共に居た事を知つてゐる者は限られてゐる。となれば……

『……シヴィラの手の者か？』

「ハハツ！ 正解だ。

全く……適当にこの辺の住人をかつさらつてお前一人だけ呼び寄せようとしてたのによ。まさかこんな所で単独行動しているとはな。

……笑つちまうぜ』

と、男が大剣の柄に手を当てた。

……あの子供が見えたのは、そういう事が一つの懸念が消える。

助けるべき者は助けた。

後は……降りかかる火の粉を振り払うのみ。

『……フン』

お互に武器を構え、睨み合う。

大剣使い……となれば懐に入り込めばこちらが有利となる。

……？ 妙だな……。

奴の武器は接近を許せば不利になるのは明白だ。
にもかかわらず奴は隙だらけなのだ。

あれでは容易に懷に入り込む事ができる。

発する気配からしてそれなりの手練に思えたのだが……。
勘違いなのだろうか？

それとも、こちらを誘っているのだろうか……？

・・・まあ良い

【縮地】の体制に入る。

奴が何をしようとあの武器で私を殺す事はできない。
ただ、全力で仕留めるのみ。

風を切り、瞬時に男との間合いを詰める。

やはり、何をされる訳でもなく容易に接近する事が出来た。
大剣の男は驚きに目を見開く

『疾つ！』

右手の短剣を振りかぶり、体の中央を狙う。

手こたえはあった。

「くつ・・・・！ つてえな・・・・」

だが狙つた急所からは外れ、短剣は肩口に食い込んでいた。
相手がそれなりにこちらの攻撃に反応して来たという事。

ならば、反撃を許す前に・・・！

続けざまに左手の短剣で首筋を狙う。

短剣が男の首に達しようとしていたその刹那、
男の口元が歪むのが目に映つた。

『・・・！ な・・・に・・・？』

左手が動かない。

いや・・・左手だけではない。

全身が動かないのだ。

「つたく・・・危ねえ危ねえ・・・」

男は大剣を背中に着用したまま、こちらを見下しながらそういう言い放つた。

どうやらすぐにはこちらを殺そうといつゝ気は無いらしい。

だが状況が思わしくないのは変わらない。

奴は一体・・・

『何を・・・した』

「ククク・・・。 閻術の一種だ。

【ブラッヂバインド】、自分の血に触れた者を拘束する・・・つてな

そういう事か・・・

右手に浴びた奴の返り血に目を移す。

しかし詠唱する素振りも見せずそれだけの上位魔術を発動出来ると
は・・・

『お前は・・・剣士ではないな』

「ハハッ！ 察しが良いな。

その通り。俺は闇術師だ。実際、剣なんかほとんど扱えねえよ。
術師と思って戦われると色々と面倒になる術しか使えないんでな。
こういう大振りな武器を持っていれば、まさか術師とは思わない。
つてな寸法だ。効果あつたろ？ ククク・・・』

・・・確かに奴の見た目で剣士と判断し、
術への警戒などしていなかつた。

闇術の発動媒体は多くが【血】と【影】だ。

そしてその多くが相手と接近せねば効果を発しない。
警戒を怠らなければさほど怖い類の物ではないのだ。

私の経験不足・・・か

口惜しさに歯を噛む。

『で・・・? 私をどうするつもりだ?』

挑発的な口調で言い放つた。

捕らえられているという状況は自分に取つて一番好ましくない。
こちらを殺そうとしてくれれば状況を開拓できるチャンスはあるの
だが・・・。

「クク・・・。 気丈な事で・・・。
ま、それはあいつにでも聞いてくれ」

あいつ?

奴の発言に疑問を持つた瞬間、後ろに近づいてくる気配を感じた。

「お疲れ様です。ゼクセル。

いつもながら見事なお手並みですね」

この声・・・シヴィイラか。

しかし・・・ゼクセル?

それなりに名のある雇われ術師だ。

まさかこんな外見で、ましてシヴィイラと繋がりがあるとは
思いもしていなかつたが・・・。

「ハツ! 難儀な仕事押し付けやがつてよお・・・。
この姉ちゃん動き早すぎて影が利用できやしねえ。
お陰でこの様だよ・・・つたく。報酬は弾んでもらひやせ?」

と、大きさに肩の傷を見せびらかせている。

「ええ、わかつてますよ。それにほら」

シヴィイラはゼクセルの横に立ち、指を七色に光らせた。

「ああ、頼むわ」

ゼクセルの肩に印が描かれる。

印からシヴィイラの指が離れた瞬間、

七色の光が急激に増し、一点に収束する。

光が消えた頃には奴の肩の傷はすっかり癒えていた。

「さんきゅ」

と、癒えた左肩を回している。

「・・・さて」

シヴィイラがこちらに視線を向ける。

「あなたには、少々協力して頂きましようか」

そういう事か。

あの時の復讐に私を利用しようとでもしているのだろうか。

・・・くだらない男だ。

『馬鹿か。私が素直に応じるとでも思つのか?』

シヴィイラはククッと笑い、

「ええ、思いますよ・・・」

ゆっくりと七色に光る指を目の前に突きつけしてきた。

<接觸>（後書き）

駄文を読みきつて頂いてありがとうございます。

仕事中暇だった時に書いていたものです。

文章に関しては小説のセオリー無視で

読みやすさ重視の改行しまくりな感じで書いてみました。

月虹

運命交叉

in 6283 month

chapter 2 > 暗雲 <

- - Side Horus - -

旅宿屋の一室のベッドで寝転びながら、一人考えに耽る。

【触れている対象の思い浮かべているものを見る事が出来る】

それが自分に与えられた能力。

便利な事は便利だが、アウラの能力のように直接自分の取るべき行動を

指し示す指標にはならない。

自分の取る行動はあくまで自分の判断で決めねばならないからだ。

> もしかしたら自分のしている事は間違っているのではないだろうか

そんな考えに苛まれ続けながら、今まで自分の使命を果たす努力をしてきたが、

少なくともこれからは争いを止める為に

本来【助けるべき者】を敵とする事は無くなつた。

この街には今、アウラが居る。

もし自分が間違った行動を取れば、彼女がそれを止めてくれる事だらう。

・・・そろそろか。

窓の外を見ると、既に月が昇り、
街の灯もまばらになり始めていた。

意を決し、立ち上がる。

先ほどの商人から得た男のイメージを頭の中で反芻し、
指先に魔力を集中させ、【転移】の印を紡いだ。

イメージする人間の元に一瞬で移動する事ができるという、
この【転移】の印は本来、相当な危険を伴う。

対象とするイメージに搖らぎがあれば、

それは転移効果に影響を及ぼし、全く見当違いの場所に飛ばされる。
何度も失敗（海に落ちたり、上空に転移して酷い目にあつたことも
あつた）

しながら人をイメージする術を磨き、
何とか失敗する事は少なくなつたが、
それでもこの術を使う時は慎重になる。

印を書き終えた後、もう一度集中した。
頭の中のイメージをより確実なものとし、
完成した印に手のひらを当てた。

視界が暗転し、回りの景色が急激に変わつた。

どこかの屋敷、か？

周りを見回すと、ベッドに寝ている男が目についた。
中年の口元に鬚を生やした男。

格好は違うが夕刻に商人から得たイメージの男で間違いないようだ。

しばし安堵する。

成功したようだな。

・・・さて。

問題はここからだ。

寝ていてくれたのは幸いだが・・・。

こいつに事実を追求しなくてはならない。

場合によっては・・・争いの元として殺す。

「・・・何者だ」

突如、ベッドから声がした。

気付かれたか

どっちにしても寝ていた事自体想定範囲外であつたので仕方が無い事だが・・・。

『えーと何だ。怪しい者じやない・・・ってのはダメ・・・だよな

と、溜め息。

「・・・何者かは知らんが、この様な時間に私の部屋に忍び込んだ以上、ただではおかんと、男は枕元に飾つてある槍をつかんだ。

『ん・・・衛兵とか呼ばないのか?』

正直意外な反応だった。

これだけの屋敷だ。護衛兵も雇つている事だろつ。叫ぶことで衛兵を招集されるかと思ったが・・・。

「必要無い」

次の瞬間、こちらに向かつて襲い掛かつて來た。

早い。それなりの手練なようだ。

・・・ま、自分の力を過信しそぎちまつ程度のレベル、か。

瞬時に目の前に印を思い浮かべる。

激しい金属音。

槍が【障壁】の印に阻まれ、こちらに通用していないのを見て、男は目を見開く。

そして、一瞬の隙ができる。

こちらはその隙を見逃さず、相手の両手両足に【束縛】の印を念印する。

印が輝きだと同時に男はつめき声を上げる。

「く・・・くや！ 何をした！」

意外と・・・すんなり捕まってくれたな
ほっと溜め息を吐いた。

念印は便利だが、普通に指で印を描くより遙かに疲れる事と、複雑な印は紡ぐ事が出来ない事、

それに何より素早く動いている相手には念印できないといった欠点が多く存在する。

一定以上の使い手に使用するには、

今のようにこじぞと言う時にのみ使用しなれば、
印は不発に終わり、無駄な疲労に襲われるだけである。
万能と言つ訳ではないのだ。

おつと・・・

部屋の外を確認する。

先ほどの槍の衝突音で誰かやつて来なければ良いが・・・。
特に誰かが来る気配は無い。

ほつとして男の方に振り返る。

『さて・・・俺はあんたに聞きたい事があるだけなんだが・・・。
と、男をなだめる様に言つ。

男はこちらには目もくれず、部屋の外に目を向けていた。

・・・兵士を呼ぶつもりだらうか。

『ああ。衛兵を呼んでもいいが、その時は命の保証はしない』
そう釘を刺して置く。

なるべく余計な争いはしたくない。

「くつ・・・・」

男は口惜しそうにこちらを睨み付ける。

『ま、とりあえず話を聞いてくれないか』

「・・・何だ」

と、不快そうにこちらに聞き返す。

何とか話を聞いてくれる状態にはなつたようだ。

「えーと・・・まず・・・アンタは誰?』

『そう、実際この男が誰だかはわからない』

ダシュタの御偉方とまでは解るのだが・・・。

「な・・・・！」

男は目を見開いた。

「お前は私が誰かも分からずにこんな仕打ちをしているのか」

怒りを抑えるような口調でそう言つてきた。

まあ・・・当然の反応か。

『いやまあ、アンタが戦争発起の主犯って事はわかってるけどな』

正確にはその確証など全く無いが、カマをかけてみる。

それを聞いた男の驚きの表情を見ると・・・ほほ間違いない様だが。

「貴様・・・マラノの者か・・・！」

「マラノ?」

確かに・・・砂海の西地域を治めている小国だ。

『・・・・・・そうか。マラノに戦争仕掛ける気だつたのか』

「とほけるな！ 他に誰が私をこのような・・・むぐぐ・・・・」

ひとつに男の口を塞ぐ。

『「つさい。衛兵が来るだろ？」「』

しかし一つの都市が小国とは言え一国に対しても戦争を仕掛けようとするとは……
如何に最近のダシュタの発展が目覚ましいものとは言え、少し無謀が過ぎるのではないか。

『ん……？』

そんな考えにふけっていると、一つ妙な事に気がつく。
今、自分はこの男に触れている。
にも関わらず男のイメージしているものが【視え】ないのだ。
これは普通ならば有り得ない。
仮に本人が「何も考えていない」と言っている状態であっても、人間である限り脳の中で何もイメージしない、などと言つのは不可能なのだ。

考えられる原因はただ一つ。

この男は何者かに精神を支配されている。
ホルスの能力はあくまでその【対象】の考えているイメージを読み取るものであり、何かしら外的要因で体の支配権が別にある場合、もしくは精神を操られている場合は何も【見る】事はできない。
この男の現状で判断すれば、後者であろう。
前者の場合は正気ではない事が多い。

「むぐ・・・む・む・・！」

男が呻いている。考え事をしている間、口を押さえっぱなしにしてしまっていた。

『「つと失敬、とりあえずお前は……』

「ふはあつ！ · · · 衛兵つ！ 衛兵つ！

ここへ参れ！ 不審者が私を殺そうとつ！ · ·

誰かに操られているな。解放してやる。と言おうとしたが、耳をつんざくその叫びに遮られてしまった。

つたく · · ·

舌打ちをしながら指先に魔力を込める。

こうなれば、衛兵が来る前にこの男の支配を解放せねば。七色の光で印を描き始めると、男の顔色が変わる。

「貴様 · · · 印術師かつ！」

男の言葉を無視し、【解呪】の印を紡ぐ。

【解呪】の印はあらゆる呪いや魔術による支配を解放するが、複雑な印な為、念映による即時発動は出来ない。

『 · · · つし』

後ろから慌ただしい足音が聞こえていたが、
気にせず男の頭上に描かれた印に手を触れ、発動を促した。
「やめろおおおおー！」

バタンッ

印を発動し終えた途端、背後の入り口から大量の衛兵がなだれこむ。

「ヨキ様から離れる！ · · ·

なだれこんだ衛兵達はこちらに槍の先を向け、こちらを威嚇している。

· · · ここには大人しくしつくか

『はいはい、と』

余計な争いはなるべく避けたい。

両手を上げ、男から離れる。

ついでに男に掛けられた4箇所の【束縛】の印を解除した。
拘束の解かれた男が倒れる所を、衛兵の一人が支えた。
精神支配から解かれた際に気を失っていたらしい。

衛兵達がこちらに駆け寄り、後ろ手に縄で縛られる。

『つてえな・・・。んな強く縛んなくとも逃げねえっての』

ま、少なくともこのおっさんが目覚めて話を聞くまではな

「ええい！ セットと歩け！」

ズシンッと背中を押される。

『はーいはーい・・・』

こちらを囲む衛兵達は自分をどこかへ連れて行くつもりのようだ。
牢屋へぶちこまれるか・・・はたまた拷問でもするつもりか。

さて・・・どうなる事やら

- Side Civilia -

!?

『つー』

突然、頭に大きな痛みが走る。

この痛みは・・・

「どうした？」

隣に居たゼクセルがこちらを覗き込む。

『・・・【傀儡】が何者かに解かれました』

「あー？」

と、ゼクセルは後ろに居る者の姿を確認する。

「・・・そうは見えねえが」

『いえ、彼女の事ではありませんよ』

「・・・ああ、例の戦争起こそようとしてた方が」

『そうです』

戦争が起こる事は【盗賊】にどつては都合が良い。

戦地への物資を運搬途中に強奪する機会が増えるし、逃走兵、敗残兵をこちらに引き込み、勢力を拡大する事もできる。あのダシュタの防衛総長に印を施す機会があったのは紛れも無い幸運だったのだが・・・

「お前の印を解くつてのは・・・只もんじやないな」

『ええ・・・私もそこが気になつていい所です』

かの者に掛けたあの【傀儡】の印にはかなりの魔力を籠めた。相当の光術の使い手が自分以上の印術師による解呪でも無ければ決して解ける事は無い筈。

そこまで考えてハツとする。

印術師・・・?

まさか・・・

『アウフ』

【傀儡】とした後ろの女に声を掛ける。

「なんだ」

【傀儡】と言つても単なる操り人形とする訳ではない。こちらの命令、言葉には忠実に従つうが、

本人の性格、外見等はあくまでそのままだ。

その為、一般人には操られている事を見破る事は難しい。自分の扱える印術の中では最高位のもので、魔力の消費は激しいが相応の効果をもたらす。

『あの印術師とはダシュタで別れたと言つていましたね』

「ああ」

『・・・では、あの男がダシュタに何を目的として来たか聞いていますか?』

女は少し考えるそぶりを見せた後、

「確かに……【争いを止める】と言っていた」と答える。

『……やはり、そうですか』

あの男……

『どこまで私の邪魔をすれば気が済むのだ……』

あれだけの侮辱を貰えただけでは飽き足らず、こちらの計画まで邪魔をしてくれるとは……

「まあ落ち着け。元々そいつを殺す予定だつたんだろう?

なら、殺す楽しみが倍増しただけじゃねーか

と、横からゼクセルがなだめるような言い方でそう言って来た。まあ、確かに一理ある。

『ええ……。そうですね』

絶対に……殺す。

「しかし……。まずくねえか?』

『……何がですか?』

「その姉ちゃんにそいつを殺してもうつ予定だつたんだよな?操つてる事に気づかれば術を解かれちまうんじゃねえか?それを聞いて口元を歪める。

『それについては問題有りませんよ』

【念映】さえ使いこなす印術師だ。

奴が自分の術を解呪できる事自体は想定の範囲内。

【念映】を使えない状況にし、

尚且つ普通の印を使わせる前に仕留める。

これが最善の策。

「……何か策でもあるのか?』

『ええ、勿論です・・・』

- - Side Horus - -

まだか・・・

ここに閉じ込められてからかれこれ3刻、

今の所なんの音沙汰もない。

先ほどの男が目覚めれば何かしらアクションはあると想つのだが・・・

石畳に鉄格子、明かりは入り口近くにあるカントリのみ。
まあ・・・どう見ても牢屋だ。

決して居心地の良い物ではない。

【転移】の印を使えばいつでも出る事は可能だが、
あの男から話を聞くにはここで待つてするのが一番の近道だと考え
た。

目覚めればこちらの処分はどうあれ、

向こうの方から直接話を聞きたくなるのは必定。

・・・だと思ったのだが、

『遅い・・・』

つい、ぼやいてしまう。

精神支配から解かれたショックにしても
気絶の時間が少々長すぎるのではないか。
そのまま寝てしまつたのだろうか・・・

可能性はあるな・・・

溜め息を吐き、石畳に寝転がる。
なら、寝て待つ事とするか

遠くから扉の開く音がした。

お出ましかね

足音が複数聞こえ、こちらに近づいてきた所で足音が止まる。

「お前達は外に居てくれ。あの者と一人で話がしたい」

・・・あの男の声だ。

「え・・・そんな！ 危険です！」

あやつは貴方を殺そうとしていた者ですよー？」

「頼む」

少しの間。

「・・・わかりました。我々は入り口で待機しております。

何かありましたら叫んで下さい。すぐに駆けつけますので」

「すまんな」

好都合だな・・・

相手は1対1で話をするつもりらしい。

足音が一つになり、こちらに近づいてきた。

「この様な所に閉じ込めて申し訳ない。

本当は目覚めた後すぐにでも血室にお招きしようとしたのですが・

・・・

牢の前で男がこちらに頭を下げてきた。

『かまわない。話すなら、ここのが都合がいいわな。

・・・見たとこ俺以外に人は居ないようだし』

姿勢は変えないまま答える。

「はい」

『それに・・・ああなった結果はどうあれ俺はアンタの寝室に忍び込んだ。

ま、牢に入れるのは自然なんじやないか』

「それです」

男がこちらの目を見る。

『貴方は何故あるような時間に私の部屋へ来たのですか?

暗殺目的であれば私は既にこの世に居ません。

それどころか私に掛かっていた呪縛を解き放つて下さった。

私としてはそれが不可解で仕方がありません』

ま、予想通りの質問だわな

起き上がり、座り込んだ体制を取る。

『その質問に答えるには……。一つ、聞かなきやならん事がある
「・・・なんでしょう?』

男の顔に田を向ける。

答えによつては・・・殺さねばならない。

『マラノと戦争をしようつていう件、

・・・あれば、【アンタ自身】の意思か?』

「違います

と、即答。

「私の使命はこのダシュタの街、そして何よりダシュタの民を守る
事。

その民を危険に晒す行為など言語道断です」

淀みが全く無い口調。

嘘はついていないだろ?』

『つてことは・・・アンタを操った奴に、そう命令されたわけか』

「はい。操られた後にただ一言、くマラノと戦争をするよう仕向け
ろ』

そう言わただけで私は何故かマラノを攻め取る事ばかり考える
よになつたのです。

それ以来、もう一つの私の意識が勝手に体を動かし始め、

私自体は何故かそれを客観的に眺めながらも決してそれを止める
ことは出来ませんでした』

男はそう言つて俯いた。

『命令を忠実に行う精神分離体を作り出したつてとこか・・・
かなり高等な術だな・・・それは・・・。

んで? 今は、もうそんな考えは無いな?』

「はい、部下にも即刻戦争準備の中止を命じました」

溜め息。

とりあえずは無駄な争いは避けられた、か。

『それならば、俺からアンタにする事は何も無い。
俺の目的は戦争を止める事。それだけだからな』

こちらの答えに、男はどこか釈然としない表情で、

「・・・もし私が、【私自身の意思で戦争を推進した】

そう答えていたら貴方はどうなるおつもりだったのですか?』
と質問してきた。

『んー・・・まずは、説得。

んでどうしても融通が利かないようであれば・・・

・・・まあ、嘘をついてもしようがないか

『殺す、予定だつた』

そう言い放つた。

男は特に驚いた表情もせず、

「・・・左様ですか」

とだけ返してきた。

力チツ

乾いた音がする。

男が手に持つた鍵で牢の扉を開放したらしい。

『おいおい・・・。いいのか?』

場合によつちや、俺はアンタを殺そうとしてたんだぞ?』

「【闇伝】」云々 いはく、ドンガル。

先程にも言いましたが、私は戦争などする気はありません。
むしろ言語道断だと考えています。

そしてそれはこれからも変わらない。

そう言いながら笑みを浮かべた。

「ハハハッ、なるほどな『思つづ笑一』が二ぼへる。

随分と聰明な男だ。 今日までダシュタが自治を保ちながら

出来でい^二た理由^一 何となく分か^二た氣がする^一

「それに・・・鍵を開けずとも、貴方はいつでも出る事ができるの

・・・バ
レ
て
た
か

まあ・・・操られていた時の記憶もあるだろうしな。

印術を用いればいくらでも勝算ある事くらい予測できても不思議ではない。

すつと立ち上がる。

— すぐには発見ですか？

夜も更けていますし……寝室を用意をせる事も出来ますか……

『ああ、ちいと用事があるんでな・・・』

「そう、この件が片付いたらすぐにでも確認したい事がある。」
「と忘れる所だつた

『最後にちと質問いいか?』

『アンタを操つていた奴の姿は
・・・見たか?』

とつあえずは戦争を回避できたものの、

そいつを見つけ出さない限りは根本的な解決にはならない。

・・・まあ、あれだけ高度な精神支配を施せる者だ。

恐らく顔を見られるようなマヌケな真似はしていないだろ？が。

「確か・・・全身を赤いローブで包んだ男です。

残念ながら相手は深くフードをかぶっていたもので、

顔までは見えませんでしたが・・・」

言葉の通り残念そうな顔でそう答えてきた。

この男としても自分を操っていた男の正体は突き止めたいのだろ？が。

『一応・・・見せてもらつてもいいか？』

と、男の肩に手を触れる。

「・・・は？」

『そいつの姿を思い浮かべてくれ』

「は、はあ」

男は戸惑いがちに目を閉じた。

まあ別にそんなに本気で思い浮かべてもらわなくても
そいつの事を少し意識してもらうだけでいいんだけどな

【見え】た。

暗い赤色のローブで全身を包んでいる。

背格好から察するに男なのだろうが、

男の言ひようにフードを深くかぶつているせいか、
顔はほとんど確認できない。

・・・何となく、既視感はあるのだが・・・。
思い出せない。

『悪い、もういいぞ』

男の肩から手を離した。

「・・・今日は？」

わけが分からぬといつた表情でこちらを伺つ。

『んー・・・・、俺は人の考へてるものを覗ける能力がある
・・・・・つたら信じるか？』

男が目を見開く。

「・・・貴方は、一体・・・」

と、何か聞いたそうな表情をするが、

思い直したように頭を振る。

「・・・・いえ、私を支配から解放して頂いた恩人に
野暮な詮索は止めておきますか。

それでは、出口まで案内しましょう」

『あー・いや、その必要は無い。』つから直接行くわ
え？ と小さな驚きを見せる男をよそに、

指先に魔力を籠め、前方に【転移】の印を描く。
「なるほど・・・・。私の部屋へ入つた時も、その印術を使用したの
ですか？』

描かれた印を見ながら興味深そうに聞いてきた。

『ご名答』

そう言いながら、転移する【対象】の顔を思い浮かべる。
・・・決して忘れる事の出来ない【親】の顔を。

『じゃあな』

印に手を当てようとする。

「お待ち下さい」

呼び止めの声に反応し、振り返る。

「貴方の名前をお聞きしたい」

と、真剣な眼でこちらを見ている。

つたはー・・・・。参つたな。

今までのお堅い態度を見る限り、

アウラの時みたいにはぐらかせる相手じゃなさそうだし・・・。

『・・・アンタは?』

とうあえず聞き返してみる。

男はその言葉にハツとしたような表情をし、

「こちらから名乗るのが筋ですね。失礼しました。

私はダシユタ防衛総長のヨキ・グルヴェインと申します

・・・そんなにクソ真面目に答えられると困るんだが。
しばし悩む。

ヨキはこちらを見たまま次の言葉を待っているようだ。

仕方ない・・・ダシユタの幹部であれば、いずれ何か縁があるかもしれないしな。

『・・・ホルステッド・テイルフェルム、だ』

その言葉に、ヨキが大きく目を見開き、呆然としている。

あの反応を見ると、やはりこちらの事は知っている様子だ。
無用な詮索を受ける前に・・・

退散。

『んじゃやうつけ』

と、それくまと転移の印に手を当てた。

- - Side Yoki - -

「ホルステッド・テイルフェルム、だ」

目の前の男はそう言った。

余りの衝撃にしばし呆然としてしまつ。

何故、このような所に？

そう聞こつとした時には、既に彼の姿は無かつた。

ホルステッド・ティルフェルム・・・
東の山岳地方に栄えるティルフェルム教国において
【生ける守り神】として崇拜されている者の名前だ。
文字通り実在し、200年もの間あの国の実質的な王を勤めている
らしい。

不老不死とか、あらゆる術を使いこなすとか、
夜空に星々を操る力があるとか神がかりな噂は絶えない。
中にはそれらはティルフェルムが他国牽制の為に用いているテーマで、
本当は似た者を代わる代わる王位に乗せているのではないか、
などと言つ噂もあるが、真相は定かではない。

そんな立場の者がこの様な所に何故・・・?
彼が偽りを言つている可能性もあるが、
あの場でそんな嘘をつく意義は感じられない。
というより・・・あの若い見掛けに反する独特の威圧感、
昨日見せたあの卓越した印術。
そして眞実は定かではないが、
「相手の考えているものが見える」

そんなことも言つていた。

いずれにしても彼が只者ではない事は明白。

・・・だが。

『いかんな・・・』

そう咳き、軽く溜め息を吐く。

考へても判る事ではない。

彼が自分を救つてくれた事は純然たる事実。

それで良いのではないか。

そんな考えに至る。

それよりも、自分には山ほどやる事があるのだ。
操られている間に自分がしてしまった事の
後始末をしなければならない。

軍備の停止に、領主との会談、

緊張状態にあるマラノにも自ら弁明に赴く必要があるだろ？。

忙しくなりそうだな・・・

だが苦では無い。

自分の意思で行動する事。

たつたそれだけの事が何と晴れ晴れしい事か。

そんな事を思いながら、外の方へと足を踏み出した。

- - Side Horus - -

【転移】の印が消え、巨大な樹の前に降り立つ。
左を見ても、右を見ても深い、深い森が目に入る。
だが、この大樹の周囲三十メートル程度には木々はあるが、
草の一本さえ生えていない。
まるで、植物達がこの大樹に畏怖するかのように。
400年前、自分が初めてこの地に来た時から
・・・いや、恐らくこの樹がこの地に在ったその時から、
ここは何も変わらない。

大樹の【種】を宿した者にしか見ることすら適わぬ
結界を、【こいつ】が張っているからだ。

『ひとつ』

目の前の【樹】に声をかける。

すると、樹の根本から丸く淡い緑の光が沸き、
目の高さまでゆっくりと上昇する。

その光は眩く輝きながら人型へと姿を変え、
次の瞬間、光が收まり、その姿がはっきりと現れる。
男とも女とも取れる中性的な顔立ちと、
鮮やかに光る緑の長い髪。

この大樹ユグドラシルの精神体である【白夜】もまた、
初めて見た時と何一つ変わらない。

「お帰りなさい」

頭の中に透き通った声が響くと同時に、
目の前の【モノ】が目を開き、
全て見透かすような真紅の瞳でこちらを見る。
前に見た時は、思わず目を逸らしてしまったものだが、
今回も同じなのは癪なので見つめ返し、
『アンタは……変わらねえな』

そう言い放つ。

「貴方は 大分、成長しましたね」
そう言いながら穏やかに目を細める。
『ハハッ、皮肉にしか聞こえね』

「そもそも、来る頃だと思っていましたくく
こちらの嫌味を無視し、本題に入つてくる。

『ま、そうだろうな。

・・・アウラを俺に会つ様、仕向けたのはアンタだりうへ。』

「そうですくく
やつぱりか

『つてことは・・・【解禁】つて事か?』

・・・以前この白夜と会つた時、

万が一自分と同じ【種】を体内に宿した者を見つけても、
決して名乗つてはいけない。
そう、釘をさされていた。

「はい。彼女は既に答えを見つけ、

一人で自分の使命を果たす術も身に付けました。

もうあなたに会わせても良いと判断し、

彼女の能力に【干渉】する事で貴方と会う様、導きました。」

『答えを見つけた……か』

【何故人を助ける】といった問いに、

【人を助けるのに理由などいるのか】

そう言い放つた彼女の口に確かに迷いは無かった。

しかし……

『前の”月虹”は確か20年前くらいだったよな?』

「……そうです。あの時に彼女を【再生】させました。

その、強い想いに答えて……』

『そうかい……』

複雑な思いで生返事をする。

あの見た目で判断する限り、ユグドラシルの【種】を
宿し、【再生】したのは20歳前後……。

彼女はたった40年での境地に至ったのか。

自分が使命に対し迷いが無くなったのは、
100歳を過ぎてからだった気がする。

と、こちらの様子を見てか【白夜】が微笑みを浮かべる
「あなたと彼女ではその【役割】も【意味】も違います。
代々 【調停者】の方は答えを見つけるのに時間がかかります。
何も、気に病む事はありませんくく

『はいはいわーつたよ・・・』

この”樹”はちょくちょく人の心を覗くから困る

【白夜】はこちらの反応を見据えた後、表情を無に戻し、
「では 【調停者】と【救済者】
対なるあなた達は、共に歩み、各自の使命を果たして下さーくく
と言い放ち、その姿を消していった。

『・・・つたく。相変わらず言いたい事を言つて消えやがる』
樹に向かつて文句を言つ。

『ま・・・』

右手の指先に魔力を込める。

『そうするさ。言われなくてもな』

そう囁きながら、【転送】の印を紡いだ。

自分の中に一つの感覚が共有している。
目を開いている時と閉じている時。
それぞれで居る場所が全く異なる。

目を開けば、ただひたすら広いどこまでも続く暗闇。
本当に目を開けているのか分からぬ位、何も見えない。

- - S i d e A u r a - -

いくら歩こうとも、いくら叫ぼうとも
自分が進んでいる事もわからない、
自分が何を叫んだかすら聞こえないそんな世界に身を置いている。

そして目を閉じると、

元々私が居た世界、広大な砂漠が見える。
砂が擦れ合う音も聞こえるし、
自分が何をしているかも思い出す事が出来る。
まるで元の世界に戻ったかのようだが、
たつた一つ違うのは、私の意志では体を動かす事が出来ない。
ただ【もう一人の私】がしている行動を見ているだけ。

「 良いですね？ アウラ」

聞き覚えのある声が私の名前を呼ぶ。

『・・・分かった』
・・・私の声。

目の前の男に只忠実に従つ、もう一人の私が発した言葉。

何をさせるつもりだ・・・

もう一人の自分と共有した記憶を反芻する。

♪ ホルスという男を見つけ次第、正面から【縮地】で背後に回つて
下さい

恐らく奴はあなたが【縮地】を使用した瞬間、正面に【障壁】を
張るでしょう

背後は一時的に無警戒になる筈です。その隙に 刺し殺しなさい
いく

薄笑みを浮かべながらそつ私に命令する男 印術師シヴィラの姿が
浮かぶ。

なつ・・・

確かあの時に「協力して欲しい」

あの男はそんな事をほざいていた。

先日自らが苦渋を舐めさせられた同じ印術師、ホルスへの復讐に、だ。

私が正氣であればどんな事をされても協力するつもりは無い。だが・・・私の体の支配権が別にあるのならば話は違つてくる。この男は私に直接手を掛けさせるつもりだ・・・。

『 何故【障壁】を張ると言い切れる？

奴は確かに、【結界】という全方位防衛の印術を使用していた。あれを張られては私の攻撃は通用しないのではないか？』『記憶の中のもう一人の自分がそう言った。

ホルスが【結界】を使用していたのを見たのは紛れも無い、私自身。もう一人の私も、私の記憶を継承しているという事か・・・。

シヴィラはそれを聞き、頭を振る。

「 いえ、その心配には及びません。

【結界】はかなりの高等印術、如何な卓越した印術師といえど念映など不可能です。

従つて貴女の【縮地】を確認してからの発動はできませんよ。

咄嗟の危険には【障壁】を張るしか術が無い筈です。

危険を察知した方向に向けて、ねくと、嘲る様な笑いを顔に浮かべている。

同じ印術師という事でその特徴も弱点も心得てているという所だらうか。

そうなるとホルスが自分を返り討ちにする事に【期待】は出来ないかもしだれない。

＞万が一に備え、少し奴の念映を【使いにくい状況】にします。

貴女はただ、奴を確実に仕留める事を考えて下さい。 良いで

すね？アウラく

『わかつた』

無感情な声でそう答えた後、私は歩を進める。

向かう先は、砂都ダシユタ。

何とか【私自身】を止めようと足を動かす事を必死に拒否しようと
するが、

どうにもならない。完全に体の支配権はもう一人の自分にある。

例え【不死】であろうとこんな事になつては何の意味も無い。
あのような男に操られてしまう事態を招いた自分への憤りと
自分の意志とは無関係に動くこの体に絶望感を抱きながら、
只ひたすらにもう一人の私に抗おうと足搔いていた。

- - Side Horus - -

再び砂の都へと視界が移り変わり、
自分の体が急激に下降する感覚に襲われる。

すぐに足元に【浮遊】の印を念映し、自分自身の体を空中に留めた。
地平線からは太陽が顔を覗かせていた。

転移先は【アウラの100メートル上空】とした。

相手がどこにいるかわからない状況で

【転移】を用いる際は対象の上空としている。

移転先が建物の壁で一時的に動けなくなつてしまふ、

といった事を避ける為である。

すでに上空へ転移すると判つていれば、転移後の危険は上空の方が少ない。

・・・最も、この方法は度重なる転移の失敗で、意図せず上空に転移してしまった経験から得た物もあるが・・・。

先のヨキの下へ行く時は、対象が軍部の建物と予想されたので、上空に出れば見つかる危険性があつた為、半ば博打気味で本人の間近に転移をしたのだ。

今回はそのような事をする必要は無い。

さて・・・

転移の結果は全く問題が無いのだが、別の問題が発生した。

『どうこうした・・・これは・・・』

眼下の砂都は異様な事態となつてゐる。

街全体に何かが覆つついて、アウラの姿を確認する事はおろか、建物の高い部分程度しか見る事ができない。

『霧・・・か・・・?』

砂都ダシユタは文字通り砂漠の中の街である。砂漠において霧が発生するなど、極々稀で、まして都合よくダシユタ全体を覆うなどといつ事はまず有り得ない。恐らくは、人為的なものだらう。

とりあえず・・・アウラを探すか

【浮遊】の印の力を弱め、ゆっくりと高度を下げる。

地面に降り立つてみるとますますその視界の悪さが際立つ。

夜も明けているというのに、5メートル先すら見る事はできない。

おいおい・・・

いくら近くに居るとわかつてているとは言え、これでは案外探すのは骨かもしね。

いつそ再度【転移】でアウラのすぐ傍へ転移してしまおうかと考えた矢先

「 ホルス・・・か?」

前方の霧の中から聞き覚えのある声が響く。

『ん、ああ。アウラだな?』

「 そつだが・・・私に何か用か?」

霧の中から淡白な声で答えが返つてくる。

相変わらず・・・愛想わりーな・・・
思わず苦笑してしまう。

『ああ。とりあえずどこか入らないか?
この状況じゃあ・・・まともに話す事もできん。
しかし良くな俺の姿が見えるなお前は・・・』
こちらからではわずかにシルエットが見える程度。
とてもじゃないが声を聞かなければアウラとはわからなかつた。

「 田は良い方なのでな・・・。今、そちらへ行く
と、急激に肌がざわついた。

長きに渡る生の中で身についた勘が危険信号を知らせている。
咄嗟に前方に【障壁】の印を念映する。

前方のアウラのシルエットが消えた。

直後、横に風が流れる。

縮地か・・・！

そう思つた時には既に後ろから鋭い痛みが走つていた。

- Side Aura -

声にならない叫びを上げる。

自分の中の時が急激にゆっくりとなり、

たつた今感じたその感触が重く強く、のしかかる。

この感触自体は慣れたものだつた。

私は必要があれば・・・いや、刺されても致し方ない連中に対しても、

この手で短剣を振るつていた。

最初の頃は、例え相手がどんな者にしろ、

”人”を殺した事に対する罪の意識に苛まれた。

だがいつしかこの砂海に巢食うそういつた連中をどこか

”人”とは思わず、無機物として扱い、

それを壊しているような感覚に変わってきた。

だが今私は・・・

初めて”人”を刺した。

そんな気がする。

もう一人の私が突き出した短剣は、

目の前の男 ホルスの首筋を突き刺していた。

確実な急所・・・彼が助かる事は決して無いだろう。

短剣を抜き取ると、

黒衣の印術師は鮮血を後ろに噴出しながら地面へと体を埋めた。
もう一人の私はいつものように短剣に付いた液体をヒュッと払い飛ばした後、

倒れた体の状態を確認しようと手を伸ばす。

だが、私は腰を屈めた体制のまま動きを止めた。

そして何故か、もう一人の私の動搖が感じ取れる。

「つづく・・・いつてえ・・・」

『え？』

意識だけの私ともう一人の私の言葉が初めて一致した。

有り得ない光景だった。

死んだ筈の男が苦い顔をしながらゆっくりと立ち上がり、
傷がある筈の場所を手でさすっている。

『馬鹿な・・・何故・・・』

出血が止まっている。

何かの術、か・・・？

彼を刺した幻術でも見せられたのだろうか。

・・・否。

目の前の彼は確かに自身の血で汚れていた。
そしてあの苦痛を浮かべた表情。

確かに彼は一度致命傷を負っている筈。

となると・・・傷を瞬時に治癒した、という事だろうか。

この男の底知れない実力を考えれば有り得ない事ではないが・・・。

ホルスは首をさすっていた手を外し、私の方へ顔を向け、

『まさかお前も・・・か？』

そのため息混じりに言いながら、ひりを諦めた様な表情で一瞥する。

『つく・・・・！』

再度ホルスに攻撃を仕掛けようとするが、何故か途中で手が止まる。もう一人の私の動搖がさらに広がつて行くのが手に取るように感じ取れる。

視線の先にある自らの手が七色の光に包まれている。どうやら、ホルスに何かしらの術を掛けられ、体の動きを封じられたらしい。

「ま、ちっとじつとしててくれ

恐らく・・・勝負は決した。

先日の闇術使いに引き続き、

またもや捕らえられての敗北に複雑な思いはよぎるが、

この結果自体にはひとまず安堵する。

後は・・・

ホルスが私をどうするか、だが・・・

自分が操られている状態にある事をホルスが気づき、術を解除してくれる、という期待が無いと言えば嘘になる。

しかし自分の命を狙つた者に対し、真つ先に”操られている”などという考えに至る者はそうは居ない。

ましてホルスとは一日程度行動を共にしただけで

さして長い付き合いというわけでもない。

むしろ”裏切られた”、”最初から自分の命を狙う為に近づいた”などと叫つ、負の考えに傾くのが普通だらつ。

ホルスは正面に立ち、

「ちと、調べさせてもらひぞ」

といひひひ手を額にあててくる。

『何を・・・』

抗議しようとする私を無視し、
「やつぱりか・・・」

僅かに表情を曇らせながら呟き、額に当てていた手を下げる。

「解放してやる」

ホルスは指を立て、七色の光をその先から発した。

もう一人の私はそれを見て目を見開く

『や・・・やめろ！！』

動搖を大きくし、必死に束縛から逃れようと四肢を動かそうとする
が、

ホルスの仕掛けた印は全くそれに動じる気配は無い。

解放・・・

その言葉の意味する事がシヴィイラによつて
自らに仕掛けられた術に対するものだと
認識するまでしばしの時間を要した。

『気づいてくれたのか・・・？』

安堵と同時に自己嫌悪に襲われる。

操られていたとはいえホルスをこの手で刺したといつ事は紛う事な
き事実。

それが彼を死に至らしめたのはあくまで結果論だ。
一步間違えば彼を殺していた。

正直、解放されたといひでどの面を下げる接すれば良いのかわから
ない。

ホルスが目の前に印を描き始める

が、途中で何故か手を止め、眉を一瞬びくっと吊り上げた。

「 そうか・・・”奴ら”が私の解放を大人しく見てるわけは無い、
か

辺りの様子が急激に変わっていた。
ダシュタ全体を覆っていた霧

私を印術で操ったあの男、シヴィラの【水術】によつて
呼び出された霧が焼き消えていった。

そして・・・

「・・・誰だ？」

霧が晴れた後、ホルスの後方に闇術師ゼクセルの姿があつた。

- - Side S i v i l l a - -

よし！

指先に最大限の魔力を集め、印を紡ぐ。

突然上空から奴が現れたのも然る事ながら、
傀儡としたあの女、アウラが致命傷を与えたにも関わらず、
あの男が立ち上がった時には冷や汗を覚えた。
傷を負つた瞬間に【治癒】の印を念印でもしたのだろうか・・・。

だが結果的にゼクセルがあの男の”影”を捕らえた。
奴の影を出す為に霧を晴らした結果、
奴の念印による危険性を高めたが、
朝陽の方向と高さが幸いしてか、
奴の背後、それも10数メートル程離れた所で

ゼクセルが奴に術をかける事ができた。

対象の影の上に立ち、数秒間足元に置いた相手の影に魔力を送る事で、相手の動きを封じる。

【シャドウホールド】は闇術の基本ながら、その汎用性は高い。

ゼクセルと組んで暗殺を行う時はこの術でゼクセルが動きを止め、自らが印術により対象を仕留める、という事が多い。

奴が動けない事とこちらが奴の死角に位置する事。

この二つの条件から奴から念映による印の攻撃を受ける事はない。念映はあくまで姿を確認したものに仕掛けるもので、こちらの姿が確認できない限りそれを行う事はできない。

後は自らが扱える中で最も強力な印【獄炎】を使い・・・確実に息の根を止める。

例え【障壁】を念映をしたところで、

この印の威力であれば防がれる事は無い。

そして直撃すれば【治癒】の印などで延命等は出来ない。

完成した【獄炎】の印は強烈な赤い光と共に、自らの体の倍程もある巨大な炎の弾を生成し、影を捕らえられて動けないあの男の元へと飛んで行った。

正面の朝陽の姿を見て舌打ちする。

- - Side Horus - -

シャドウホールドか・・・

いくら霧が掛かっていたとはいっても、

自分の影を背後に置いてしまったのは迂闊だった。

とはいっても、自らの生まれ持つての魔力属性は”光”である。

そして印術だけではなくその生まれ持つたものを生かした光術の方も何年も前に大抵の術を習熟している。

頭上に光を発生させ、一時的に影を消し、拘束を解くことは造作もない。

だが・・・間髪入れずに後方から強い魔力を感じる。

目の前のアウラが目を見開く。

恐らく【障壁】では防げない威力の魔法がこちらに向け放たれたのだろう。

拘束を解いて避ける事は容易いが、その場合アウラが魔法をまともに受けてしまう。

周到な事で・・・

最も まともに喰らった所で一人が死ぬという事は無いが・・・死なないにしてもそれなりの”苦痛”はある。

『仕方ない・・・』

軽く溜め息を吐きながら背後に魔力を集中させた。

攻撃が”魔法”と分かっているのならば対処方法は他にもある。

それなりに魔力を消耗するので余り使用したくはないのが本音だが・・・

魔法がこちらに達しようとする所で、
後ろに光の幕を張る。

【ディスペルフィールド】

光術の最上位魔法の一つで、光の幕を作り出し、
その場所を通過した全ての魔法を無効化する防御魔法。

後ろから放たれた魔法は炎系列の魔法だったのか、
少し熱を感じたが、すぐにそれも収まった。

魔法の無効化に成功したようだ。

「な・・・・・！」

背後から声が上がる。

「ん・・・？」

聞き覚えある声なような・・・

そういうえばアウラの攻撃方法にしる、どうにもこちらが印術師で
り、

”念映”を使用する事と、その対処法に沿つた奇襲を連発してくる。

・・・まあ・・・心当たりが有り過ぎて誰が誰だかわからないが。
今まで自分に襲い掛かった者、争いを持ち込んだ者で
印術で脅して逃がした人間は数知れない。

『んじや・・・こちらから行こうかね』

一度目というのならば容赦はしない。

最も・・・アウラを操り利用した、という点で
例え一度目で無くても万死に値するが。

先ずは【シャドウホールド】の解除。

頭上に光を発生させるべく魔力を集中する。

相手の目を眩ます光術の基本【フラッシュ】は
闇術による影を利用した大半の術を一時的に無効化する。

頭上から眩い光が発生したが、

何故かその前には既に動けるようになっていた。

不思議に思いながら背後を見て、舌打ちする。

既に人影が無い。

『逃げられたか・・・』

追えば間に合うかもしだれないが、

とりあえずアウラをこのままにしておくのは忍びない。

ま、いいか

既に奴らの顔はアウラが見ているだろう。

アウラの意識が戻ればアウラから奴らのイメージを引き出し、

【転移】の印でどこに居ようが追える。

「く・・・離せ！！」

一通り事態が飲み込めたのか、再び拘束から逃れようと抵抗する。

『あーわーつたわーつた。【解放】するからちょっと待ってね』
アウラを解放すべく印を紡ぐ。

『ま・・・今のお前にとつては【消滅】だろうがな』
完成した【解呪】の印に手を触れ発動させた。

「や・・・止め・・・！」

術によつて形成された支配が解放されていく。
こちらを睨んでいたアウラの目付きが変わった。

解呪は問題無く成功したようだ。

それを確認すると同時にアウラの手足に仕掛けた【呪縛】の印を解く。

『・・・つと』

アウラが膝を地に落とし、倒れようとする所を支える。

「すま・・・ない・・・」
こちらに向けてそう一言だけ言つと、がくつと支えた手にもたれ掛つた。

術が解かれた瞬間に気絶・・・先のヨキと同じ症状だ。

目を据わらせる。

『どうやら・・・同じ奴と思つて間違い無さそうだな・・・』

ダシュタの防衛総長を操り戦争を助長しようとしたこと。

そして今回の件・・・。

もはや放置して良い対象ではない。

気絶したアウラに目をやる。

とりあえずは・・・宿に戻るか。

「さんー早くー!」

と、なにやら通りの奥の方からやかましい声が聞こえてきた。
声のする方に顔を向けると、

頭に三角巾を巻いた中年の婦人が

ダシュタを見回っている衛兵の手を引っ張り、なにやら騒いでいる。

「あの男です! 嫌がるあの女の子に無理やり怪しげな術を掛けてたんですよ!」

・・・婦人の指は、こちらを指していた。

『・・・・・は?』

ダシュタの北門近辺の一角。

この辺りは倉庫が多い為、この時間帯は大抵市場への道を荷車が絶えず行き交っているが、今日は見事なまでにその姿が無い。

砂漠の民はこと天候に関しての変化に敏感だ。それは何よりも砂嵐を恐れての事。

砂嵐の日は必ず西の空が淀むという予兆がある。そんな日は暗黙の了解で全ての商店は店を開く事無く、皆それぞれの家で静かに砂嵐が過ぎ去るのを待つ。

今日は特に砂嵐の兆候も見えなかつたが、シヴィラが水術で呼び出したダシュタを囲う霧は、ダシュタの民の警鐘を鳴らしたのか、砂嵐の日の如く商売をしている者の姿など無い。まあそれも計算の内ではあつた。

その全く人影の無い倉庫の壁にもたれながら切れた息を落ち着かせた。
ここまで全力で走つたのはいつ以来だろうか。
横に居るシヴィラもめずらしく息を荒げている。

「んじゃ・・・こちらから行こうかね」

あの黒衣の印術師がその言葉を口にした瞬間、本能が自らに死刑宣告を与えた。

光魔法を扱えるというのであればあの程度の拘束は意味がない。迷う事無く逃げに入つたが、正直逃げ切れるとも思つていなかつた。

だが・・・

『追つて来て・・・ないのか?』

倉庫の壁の物陰から覗いているシヴィラに問いかける。

「ああ・・・」

奴も同じように感じたのだね。

その口調からは普段の余裕が微塵も感じられない。

何故か後ろから追つてくる気配は無かった。

かわりにいつ奴の魔法が飛んでくるかと生きた心地もしなかつたが、その様子も無く、ここまで逃げてくる事が出来た。

どうやら”見逃された”らしい。

・・・「冗談じゃねえ

『なあ・・・シヴィラよ・・・』

「なんだ」

シヴィラは横で何か思いつめたような顔をしながら生返事をする。

奴には悪いが・・・

この仕事は降りる事に決めた。

当然、契約の不履行になる訳だから金は貰えず、

今までの労力も無駄となるが・・・。

正直一度と奴と関わりたくない気持ちの方が強かつた。

『悪いが』

それを切り出そうとした瞬間、シヴィラの表情が一変する。

「降りる、というのですか?」

氷のような無表情でこちらに顔を向け、問いかけてきた。

・・・まずいな

キレた時の表情だ・・・。

『・・・と言つたらどうなるんだ?
背中を一本の汗が伝づ。

シヴィラはそれに答えず、

スッといちらに手の平を向けてきた。

『オイ・・・正氣か?』

シヴィラの手の平に魔力が集中する。
魔法で闘り合うといふのであれば、
奴に手の内は全て知られている以上、こちらに勝機は薄い。

『待て・・・わかつたよ』

両手を上げながら、はあ、と大げさに溜め息を吐く。

その様子を見て、シヴィラは手を下げるが、
表情は依然として変わらず、無表情のままだ。

『だがよ・・・正直勝ち目があるとは思えないぜ?
奴の使う光魔法は俺と相性が悪いし、
何より奴の魔力量はケタが違う。
・・・おまけにあの女の術も解かれたんだろう?』

ただその現実を告げる。

先ほどシヴィラが強い頭痛を感じていた事から、
あのアウラとかいう女にシヴィラが掛けた術も解かれたと考えて良
い。

印術師一人でも勝ち目が薄いのに、

あの女まで加われば余計にこちらの旗色は悪くなる。

だがシヴィラはその忠告も聞かず

ただ前方の地面を無表情に見つめ、何かを考えている。

『まだ何か・・・策があるのか?』

そう聞きながらも余り期待はしていない。

奴に対抗し得る手段など有るとはどうしても思えない。

だが・・・

「奥の手を・・・使つ」

策でも何でもない、ただの”無茶”をシヴィラは口に出した。

『おいおいおいおい! まさかアレを使つ氣か! ?』

「・・・ああ」

シヴィラは淡々と答える。

”アレ”を使う意味はこの男にもわかっている筈。

確かにあの男も倒せるかもしれないが・・・

制御仕切れなければ自分達の命も危うい。

そして恐らく・・・この辺りは焦土と化す。

『・・・いいのか?』

ダシュタはこの男にとつてもそれなりに思い入れのある場所の筈。いはずれは彼の地の支配権を得ようと画策しているようにも見えたが・・・。

「ああ。あの男を始末しなければどの道、私に未来はない」
あつむりとそう答える。

確かに・・・あの女から自分達の情報は奴に届くだろう。

そうなれば、これから奴に命を狙われ続ける危険性は高い。ならば確かに、どのような手段を用いても奴を殺すべきだ。

『判つた。んなら一旦アジトへ戻るんだね？』

それには口では答えず、シヴィラは前を歩き出した。

じゅりもそれに無言で後ろに続く。

”アレ”はダシュタ近郊のアジトの地下室に隠してあるらしい。入手する際の仕事には携わったが・・・。

まさか自分がその使用にまで関わるとは夢にも思わなかつた。

鬼気迫るシヴィラの背中を見ながら、ふと溜め息が漏れる。

俺の人生もここまで

か？

と、独り天を仰ぎながら苦笑した。

- - Side Horus - -

「ですからー！ そこの人気が若い女の子がやめてえーーーって嫌がつているのを

この男が女の子の頭を無理やりこつ

「

婦人は片手を前に出してなにやら怪しげ手つきを表現しながら、一心不乱に”事情”を説明する。

・・・・・ 何か 発言」と微妙に脚色されていくんだが・・・
眉間にしわを寄せ、両こめかみを片手で抑えた。

対面にはつい昨日に会つたばかりのダシュタ防衛総長ヨキと、自分をここまで連行してきた衛兵が困つたような顔で婦人の”証言”を聞いている。

ダシュタ防衛部隊詰め所の一室。
いわゆる取調室といった場所だろうか。

思わぬ濡れ衣を着せられ、こんな所に連行されてしまった。

迂闊だつたな・・・

溜め息が漏れる。

あのような異常な霧が発生していて人通りは無いだろうと油断していたが、

考えてみれば霧が晴れたら外の様子を覗く住人が居るのは当たり前だ。

にもかかわらずあんな道端で騒ぐアウラに術を掛けていれば、周りの目からは奇異の目で見られるのは至極当然といえば当然だろう。

連行される前に【転移】なりなんなりで逃げる事も可能だったが、アウラを休ませる場所の確保もしたかたし、

ダシュタ防衛部隊にはヨキという”ツテ”もあった。ついでに彼に今朝の霧の事を説明する必要もあるだろうと、黙つて連行されてきたものの・・・。

「しまいには怪しい術にかかつて氣絶した彼女に抱きついて」

『いやまたそれはいくらなんでも違うだろーー』

話がさらにあらぬ方向へ飛んだので思わず早口で突っ込みを入れる。

婦人はひつと驚くと、立っている衛兵の後ろに隠れ、

「脅しても無駄よ！ 私はそんなものには屈しないんだからー！」

と、衛兵の体から顔を半分出してこすりを睨み付けて来る。

・・・このババ・・・

殴りたい心情を押さえ、ただ大げさに溜め息を吐き、元の姿勢へと戻る。

「まあまあ・・・事情はわかりました。

後は我々の方で処遇を決定致しますので、ご婦人はお帰り頂いて結構ですよ」

ヨキがたしなめるように言ひ。

婦人は一瞬むつとした顔をした後、

「もつと厳重に見回りお願ひしますよー!?

こんな男がうろついていたら安心して外を出歩けないじゃない!」

と、ヨキに突つかかっていた。

「申し訳ありません。警備の方は一層強化して参りますので。

おい、すまないがこのご婦人を家までお送りして差し上げてくれ」
彼はそれをさらりと流すと、立会いをしていた衛兵にそう声を掛けた。

衛兵は少し戸惑つた顔をする。

「しかし、この者と貴方一人になつてしまいますが」

ヨキは無言で衛兵を見つめる。

衛兵はそれをみてハツと何か気づいたような顔をする。

「いえ、要らぬ心配を致しました。ではご婦人、こちらへ。」
と、衛兵はまだ喋り足り無そうな風情の彼女を連れ、退出していく
た。

・・・しばしの無言。

なにやら少々気まずい雰囲気が漂つ。

「まさか、こんな形で貴方にまたお会いする事になるとは思いませんでしたよ」

と、半ば笑いながらヨキがこちらに顔を向ける。

『俺もだよ』

片手でこめかみを抑えたまま小さく首を振り、大げさに溜め息を吐

く。

ヨキはハハッと小さな笑いをこぼした後、
「さて……説明をして頂けますか」
と、少し表情を改める。

『ああ。……だがその前に』
もちろん説明は元々するつもりだったが、一つだけ気に掛かっている事がある。

「彼女なら、客室にて休ませてあります。ご心配なく」と、聞く前にヨキはそう答える。

『ん・・・そうか』
なら安心だな。

『ま・・・单刀直入に言つとだな』
と、少し間を置いた。

ヨキは答えを促すように、こぢらに視線を送っている。

『アウラは　ああ、今その客室に居る奴の事な。
あいつはお前と同じで精神を操られていた。
んで恐らくは　操つた人間も同じだ』

そう言うとヨキは大きく目を開ける。

「それで、彼女は術師の顔見たのでしょうか？」
『恐らくな。少なくともその仲間の顔は見ている筈だ』

全員フードなどで顔を隠している可能性も否定できないが、
最後のあの魔法、あれは顔を隠したままなどで放てる魔法ではない。
操られていたとはいえ、外の景色は見えていた筈。
あの位置関係からしてアウラがその者の顔を見た事は間違いないだ
ろ。つ。

『ついでに今朝の霧も恐らく奴らの仕業だ。

目的は 多分俺の命を狙う為、だな』

「え・・・」

ヨキが不思議そうな顔をする。

”霧”を出すといつ事とこの身を狙うといつ事が結びつかないのだ
るづ。

『まあ、簡潔に言うとああいつ状態だと俺の力は半減される
そういう状態で、わざわざアウラを操って襲わせた事から、
目的が俺の命にあるといつ事は明白だな』

なるほど、とヨキは深刻な顔で頷く。

『とにかく、野放しにして良い奴らじやない。

アウラが田覚め次第記憶を引き出し、そいつをどこへ行つて来る

「では兵を数名、急いで手配します。どうかお連れ下さい」
首を横に振る。

『いや、いい。奴らのアジトかもしけない場所へ直行するんだ。
万が一にも無駄な犠牲は出さたくない』

それに正直いくら日頃鍛錬をした衛兵であろうと

魔法での戦いになれば、足手まといにしかならない。

「ならば私が・・・」

『おいおい・・・ダシユタの防衛総長がここを離れてどうする』

「そう ですね・・・」

残念そうな面持ちのヨキ。

まあ、敵は先日まで自分を操つていた相手だ。

少しでも何かをしたいという気持ちはわからないでもないが・・・
悪いがこの件で彼らが力になれることは何もない。

『まあ奴らの事については任せてくれ。

とりあえず アウラの居る部屋まで案内してくれるか?』

「わかりました。こちらへ」

そのヨキの促しで立ち上がると、
入り口の扉がガチャリと音を立てた。

- - Side Aura - -

うつ

急な光に目が眩み、右手を畳の上に添えた。
その添えた右手を見てはつとする。

戻つた・・・のか?

視線の先の手を握つたり開いたりしてみる。
それは紛れも無く、自らの意思で動かしていた。
安堵に息を吐きながら、手から視線を外して周りを見回した。

『……は・・・・・?』

体を起こす。

部屋の造りからしてどこかの屋敷の寝室……だろつか?

何故、私はこんな所で眠つている……?

改めて自分の置かれた状況を考える。

あの時ホルスが自分に向けて印を描いた後、
自分を縛つっていた何かが壊れたのを感じた。

「解放してやる」

彼は確かに意識の奥に封じられた自分に向けてそう言つた。
ホルスが紡いだあの印は、恐らく私に掛けられた術を解呪するもの
だつたのだろう。

だがそのまますぐ後からの記憶が無い。

術が解放された反動か何かで気を失つてしまつたのだろうか。

寝ていたベッドから離れ、立ち上がる。

こんな所で寝ている場合ではない。

まずはホルスに会わなければ。

あの男には・・・大きな借りが出来た。

彼が何かを為そうとしているのであれば

それを手助けする事で今回の恩に報いたい。

ある種決意にも似た感情で前を見据えながら扉に手をかける。

部屋を出ると、横に向けて広い廊下が伸びていた。

これだけの広さ、個人の所有する建物ではないだろう。

かといって宿屋という雰囲気ではない。

壁に装飾用の武器が立てかけてあつたり、

天井際には青い旗が垂れ下がつていたりする。

人の気配は今の所しないのだが、

何か建物全体に熱が籠つたような霸氣を感じる。

雰囲気としては”砦”という言葉が相応しいだろうか。

何故こんな所に連れて行かれたのだろうか・・・?

首を傾げる。

罪人として預けられたのであれば、

そもそもあるののような客室に寝かされているのはおかしい。

まあ、考えた所で分かる訳も無いか

とにかく、人を探そう。

廊下を歩きながら人の気配を探る。

と、一つ奥の部屋の方から僅かに人の話し声が聞こえた。
話し声が聞こえた部屋に歩み寄り、
扉に耳を当てる。

念の為、気配は殺した。

› ですね・・・<

壮年の男の声が何かを呟くように言っているのが聞こえた。
現状の情報が何かしら得られるかもしねりないな。
このまま話を聞いてみる事にした。

だが

› まあ奴らの事については任せてくれ。
とりあえず アウラの居る部屋まで案内してくれるか?<
・・・!

聞き覚えのある声。

紛れも無くホルスの声だろう。
会話の内容を理解するよりも先に手が動いていた。
› わかりました。こちらへ<

ガチャ

目の前の扉を開ける。

ノックもせずに突然部屋の扉を開けてしまった事にはっとし、
『失礼する』
と、咄嗟に声を付け加える。

扉を開きると、少々呆然とした顔をした一人の男が
こちらに視線を向けているのが見えた。

ヨキが扉を開く前に何故か扉は自然に開いた。

「失礼する」

と、透き通った声と共に入ってきたのは

これから様子を見に行こうとしていたアウラだった。

『よう、起きたのか』

向こうから来てくれたのは幸いだつたか。

とりあえず手を上げて挨拶をする。

「ホルス・・・」

と、アウラはそれに答えず、何か神妙な顔でこちらに顔を向ける。

『もう、体の方は平気なのか?』

人を操る系統の術は身体への負担が大きい。

場合によつてはしばらく体が不自由になる場合もある。

最も、ある程度鍛えている者であれば、

大抵は数時間の眠りで問題なく元に戻る可能性が高いが。

「ああ」

静かに返事をしながらこちらへ近づいてきた。

ん・・・?

そのまま手が届くくらいの距離まで近づくと、アウラはスッとこちらに頭を下してきた。

『お、おい・・・』

いきなりの事で戸惑う。

「すまなかつた」

続いて真剣な口調での謝罪。

こちらとしてはもう既に忘れかけていた出来事だったが、それは恐らく自分に短剣を突き立てた事に対するものなのだろう。実際にそれは彼女であつて彼女ではなかつたもので、仕方の無い事だ。

しかしそんな操られていた事実を言い訳ともせず、何よりも先ずその事に対し謝罪を優先させる姿勢は、目の前の女性の誠実さを示している。

「では私は勤めがあります故、失礼させて頂きます。・・・』武運を』

横からヨキがそう言いながら礼をし、そそくさと部屋を出て行つた。彼なりに氣を使つてくれたのだろう。

アウラは先ほどの姿勢のまま頭をずっと下げている。その真摯な態度には微笑ましいものすら感じるが、いつまでもそのままにさせておくのは忍びない。

『とにかく・・・アウラ、頭を上げてくれるか?』
たしなめる様に言つたが・・・

反応なし。
んにゃ わい・・・

『お~い・・・』のままじや話もでき

『手伝わせてくれないか』

こちらが言葉を言い終わる前に頭を上げた後、こちらの手を見据え、有無を言わぬといった口調でアウラがそう言った。

『・・・は?』

手伝う?

「ホルス、確かお前は目的があつてこの街に来たと言つていたな。

【争いを止める】、と。それを、私の持てる力の限りをもつて手

伝わせてもらひ

いきなりの事で思わず頬をぱりぱりと指でかく。
手伝わせてもらひう・・・って決定事項かよ
その強引さに苦笑してしまう。

とはいえ元よりそのつもりだ。

今回の事だけではなく、これからもずっと、
アウラには同行して貰わなければならぬ。

『ああ、んじゃあよろしく頼む・・・

が、その前にアウラには一つ言つておく事がある』

「・・・なんだ?」

と、少し首を傾げながらそう聞き返してくれる。

言つておく事。

即ち 自分の正体。

とは言え先ほど首を刺された際、その傷の治りを見ていた筈。
もしかしたら既に勘付いているかもしれないが・・・。

『ちと短剣を一本貸してくれるか?』

と、アウラに手を差し出しながら言つ。
アウラは不思議そうな顔を一瞬するが、

腰にかかっている一本の短剣を鞘ごとその手に乗せてくれた。

短剣を鞘から取る。

ギラリと輝く刀身。刃にほれ一つ無い。

それが相当な業物だと言つ事は容易に想像できる。

その短剣を右手で持ち、鞘を持つ左手の甲に対し刃を立てて近づけ

た。

- - Side Aurora - -

『な・・・何を』

止める間も無くプスッと彼は刀身を自らの左手の甲に深めに埋めた。赤い血が滲み出る。

「ま、見てろ」

とホルスは刀身を離す。

すると 滲み出でていた血がすぐに止まった。

『む・・・』

これは、あの時 私がホルスの首筋を刺した時と同じだ。

『それは・・・魔法なのか?』

とは言うものの印や光術の発動は見当たらなかつた。

今更ながらに不可解だ。

ホルスはそう言う私に向かって露骨にため息を吐きながら、短剣を鞘にしまってこちらの手に返す。

「おいおい・・・まだ気付かないのか。

これは魔法でもなんでもない。俺の【体質】だ。

その意味、お前ならわかるだろ?』

その言葉に一瞬我を失う。

え・・・・・?

ホルスは【体質】と言つた。

どんな傷も瞬時に直し、決して死ぬ事は無い。

私は、そんな【体質】を持つ人間を知つてゐる。

それは 私自身。

『そんな・・・私と・・・同じ?』

辛うじて声を紡ぎだす。

「そうだ。俺はお前と同じ つてのはちと違うな。
アウラ、お前が俺と同じ、【コグドラシルの種を体内に宿す者】
つて奴だ」

ホルスは諭すようにそう言つた。

コグドラシルの種・・・?

『どういう事だ・・・? お前はこの【体質】の根源を知つている
のか?』

・・・少なくとも私は知らない。

私はあの時、ただ必死に生きたいと願つただけ・・・。

「まあ、その事についてはおいおい説明するが、
とりあえず俺達をこういう体質にした【根源】はしつかり居るつ
てことだ

最も、今この世に”種”を埋め込んだ人間は3人だけだが 」

『 ホルス』

私がこういつた運命を辿る事になつたことに
何かしら外部の力があつた事はわかつていた。
だが別にそれが何か、などという事には余り興味はなかつた。
それよりも・・・
「ん・・・、何だ?」

ただ一つだけ聞きたい事は・・・

『お前は、私と同じ時を生きる者・・・なのかな?』
そつ、ホルスの眼を見据えながら問つ。

ホルスはその目を丸くするが、
すぐに何処か全てを理解したような表情で頷き、
「ああ、そうだ」
と答えた。

『そうか・・・』

それを聞いた途端、何か自分の中にある闇が晴れたような気分になつた。

『私はずっと、独りだと思つていた。

私と同じ存在が居たという事は、正直嬉しく思つ』

ホルスが肩をすくめる。

「俺もだよ。嬉しい以上に驚いたがな」

それを聞き、一つ疑問が沸いた。

『そう言えば・・・お前はいつ、その事に気が付いた?』

「ん?・・・ああ、そりやアウラの能力を教えてもらつた時だが」と、さも当然のように言つ。

む、と眉を寄せる。

『何故、その時点できわなかつた

と聞くと、ホルスは少し困ったような顔になる。

「んー・・・いや、ちょっと釘を刺されててな。お前と会つても自分の正体を明かすな、と

そう言いながらホルスはぽりぽりと眉間にかく。

『・・・誰にだ?』

・・・聞かなくても大体の想像はつくが。
「まあ・・・俺とお前の、親つてとこだ」
やはりか

『・・・要は、私達にこの能力を与えた者が』
「ああ」

ホルスはそう返事をした後、少し考えるような仕草をした。

『どうした?』

と聞くと顔を再度こちらへ向ける。

「いや・・・。一度会つか? そいつに」

と、複雑な表情でそう言つて来た。

私は首を横に振る。

『いや・・・必要無い』

嫌悪感というもののまでは至らないが・・・。
何故か進んで会いたいとは思わない。

ホルスはハハツと笑いながら

「だよな」

と頷き、同意の意を示す。

彼も同じような気持ちなのだろうか。

まあ、その事はもう良い。

『さて・・・これからどうするのだ。』
私は何をすれば良い?』

彼の目的の達成を助ける事、
今はそれを一刻も早く行いたい。

と聞くとホルスは少し表情を締めた。

「ああ、じゃあちつとじつとしててくれ

『・・・？ ああ

ホルスは目を瞑り、こちらの肩に手を触ってきた。

- - Side Horus - -

『お前を捕らえた奴らの顔を見たか？』
アウラの肩に触れながら質問をする。

と、見覚えのある顔とそうでない顔が浮かぶと共に、
「・・・こないだオアシスで襲ってきた奴だぞ。
」の近辺の盗賊を仕切っている印術師シヴィラだ。
もしかして・・・気づいてなかつたのか？』

アウラが怪訝そうに訪ねてきた。

あ。

『あー・・・あいつか・・・。どおりで聞いた事のある声だと思つ
た・・・』

とようやく記憶を掘り出した自分に

アウラは少し呆れたようなため息を吐く。

「もう一人は奴の仲間らしい。一見戦士のような風貌をしているが
その実、奴は闇術を使う。拘束系の術に長けているようだな」

そうアウラが敵に対する特徴を言つてゐる間、
彼女からの記憶も同時に探る。

大男を切りつけた後、受けた返り血から魔力が広がり、
拘束されていく姿が浮かび上がった。

『ブランドバインドか・・・。それなりに発動も早いな』

と言いながら田を開く。

田の前のアウラは田を大きく開いている。

「どういうことだ・・・？」

確かに私は奴にその魔法で捕らえられたが・・・

その反応に何となく満足し、少しにやけてしまう。

『アウラ。お前は不死という他にももう一つ能力があつただろう?』

助けるべき者を【見る】能力。

彼女にそういう能力があるのならば、

自ずとこちらにも同じか能力もじくは何か別の能力があると予想できるだろ?。

案の定アウラは「あつ」、と声を漏らしながら何か気づいたような顔をし、

「そうか・・・。それがお前の能力なのか。

触った対象の記憶を探る・・・と言つた所か?」

触れた肩に田を移しながらそう答える。

『ご名答』

肩から手を離す。

とにかく、どちらにしても奴らの顔はわかつた。ならばすべき事は一つ。

『さて・・・準備は良いか?』

そう聞くと、

アウラは少し首を横に傾け、

「構わないが・・・どこへ行くのだ?」

と、問いかけてきた。

『ん・・・? 奴らのアジトだが』

「・・・奴らのアジトの場所を知つていいのか?」

少し怪訝な顔で聞いてくる。

アウラの前では【転移】の印を使った事はない。
確かに先ほどまで記憶にすらなかつた連中のアジトを
知つてゐるとなれば不思議に思つのも無理はない。

『ああ、【転移】の印を使う。

対象の顔さえ認識していれば一瞬でそいつの元へと飛べる』
アウラはそれを聞き、ほう・・・と感心した後、
「成る程・・・それであの時私の前に突然現れたのか」
と納得したように呟く。

あの時というのは彼女が操られた時の事を示しているのだろう。

『そういひこつた。 んじゃ、つかまつてくれ』

といつと、アウラは手を掴もうと言う所でそれを止め、首を傾げる。
「待て、何故奴らの所へ行く？

確かに許しがたい奴等だが、まずはお前の目的を優先させるべき
ではないのか？』

ああ・・・そうか。奴等がやつた事については知らないんだっけ
か。

俺の説明不足も多いが、意外と細かい事を気にする奴だな・・・。
一番奴等に怒りを覚えているのはこいつな筈なのにな。
と、そんな事を考えつつ事情を説明する事とした。

『んーと、だな。このダシュタが戦争を仕掛けようとしていたのは
ダシュタの防衛隊長 ああ、さつきここに居た奴な。
そいつが何者かに精神支配を受けててたせいであつて、
それ自体は支配を俺が解呪した時点でほぼ解決したんだが・・・。
そこまで言つと、アウラも事情を察したようだ。

『精神支配・・・成る程・・・。諸悪の根源は奴等なのか』
そう言いながらあつさり納得するアウラ。

諸悪の根源て・・・やつぱちょっと微妙に単純だなこいつって・・・

思わず笑みがこぼれそうになる。

『んじゃ、わかったならつかまつてくれと、再び手を差し出す。

「ああ」

差し出した左手をアウラが掴んだのを確認し、右手で印術を描きだす。

大体、上空五十メートル・・・ってどこかあの男の顔を思い浮かべ、相応の魔力加減をしながら印術を完成させた。

『じゃあ・・・行くぞ?』

左に顔を向ける。

アウラが無言で頷くのを見届け、【転移】の印に右手を当てた。

＆一七・暗黙＆四七・（後書き）

いいままで読んで頂いて本当にあつがといわざれこまや・・・

月虹

運命交叉

in 6283 month

chapter 3 > 契約 <

- Side Civilia -

アジトの自室。

薄暗いその部屋には多くの書棚が並んでいる。

その7割が魔術書、残りは世界各地の逸話を記したもの。当然、いずれも盗品だ。

大抵は読み尽くし、既に無用の長物と化しているが、捨てる事はない。

書棚で出来た通路の奥、そこに一冊だけタイトルの無い黒い本が立てかけてある。

所詮、周りの本はこれを隠す為のカモフラージュにすぎない。

「本当に・・・使うのか？」

横の男が低い声で問いかけてくる。
それに答えず、その本を手に取った。

おのれ・・・

顎がきりきりと鳴るまで歯を噛み締める。

体の中に燐る炎はいつまでも消えてはくれない。

恐らく・・・あの男を殺すまで続くだろう。

今まで、こと魔法において自分は他者の下に立つた事がない。
それはそもそも”印術師”というものの自体の
絶対数が至極少ないという事もある。

例え相手がどのような卓越した魔術師でも
それは違う土俵の相手。

そして戦えば相手は”印術”に対する認識が薄い場合が多く、
そこを巧く突く事で勝利を収めてきた。

一度だけ自分と同じ印術師と対峙した事があるが、
それも取るに足らない相手であった。

心のどこかで自分は魔術師の中で最強、
などという驕りを持つていたのかもしれない。
それを・・・。

その自信をあの男が完膚無きまでに叩きのめした。
自分と同じ”印術”において圧倒的なまでの力の差を見せ付けてき
た。

あの男と自分。

何故同じ時代に生まれてきたのかと運命を呪う。

あの男がこの世に居る限り、自分は前に進む事は出来ない。

だから殺す。

例えどのような手段を用いても・・・。
手に取った書物を睨む。

この本を手に入れたのは3年前にとある集落を略奪した時である。

集落の奥に仰々しく祭つてあり、

その時は何か金になるものと思い、

本を護つていた集落の民を一掃し、持ち帰つた。

が、その本の発する只ならぬ気配が気になり、

書物を漁つて色々と調べた結果、

それは想像もしていなかつたものだつた。

その名を【封龍の書】。

常軌を逸した力を持つ”靈獸”を封じた物らしい。

そしてこの本に一定量の魔力を送り込む事で

”靈獸”の封印を解く事が出来るらしいが、

今までに試した事は一度も無い。

未知のものは危険が高いからだ。

”靈獸”はある条件を満たせば従える事が出来るらしいが、
その肝心の条件は結局未だにわからない。

”靈獸”の方からその条件を提示されるらしいが、それも定かではない。

だが、もはや今はそのような事で躊躇をしている時ではない。

と、なにやら部屋の入り口の方から大きな音がした。
音がした方を睨む。

そこには扉のノブを持ち、なにやら血相を変えた部下が居た。

「あ、あの印術師が・・・そ、空から突然現れました！」

『く・・・』

舌打ちをする。

あの女の術が解けた以上、

ある程度こここの場所が知れる事は覚悟していたが、
思いの他早く来てしまった。

それにも・・・
空からだと・・・?

そう言えば奴は先程も空から突然現れた。
もしや、【転移】の印でも使っているのだろうか。
失敗の際に様々な危険が付きまとつあの印は
自分にはとても出来ない。

それがあつさりと使用して見せるあたり、
改めて奴との力の差を覚える。

屈辱に唇を噛み締めながら考える。

とにかく・・・今は”靈獸”を呼び出す時間が欲しい。

『ゼクセル・・・』

隣の男に顔を向ける。

「・・・わーつたよ。時間を稼げばいいんだな。

まあ、雑魚共も居る事だし10分程度なら稼いでやる」
こちらの意を察したのか早口でそう答えてきた。

『頼みます。私は集会場にて”靈獸”を呼び出しますので
そこに到達できないようにしてもらえば結構』

大きな仕事を行う際に部下達を集める集会場。
そこがこのアジトにおいて最も広い場所だ。

”靈獸”的大きさが判らない以上、あそこで行うのが無難だろう。
「了解。・・・でかい援軍を期待してるぜ」

といいながらゼクセルは入り口ロビーに向かう通路へ駆け出した。

それを見送りつつ、自らも黒い本を抱え、
集会場奥への直通通路に足を向けた。

視界が一瞬暗転した後、突如開けた場所に景色が移り変わる。

つて・・・・

急激な下降感と共に下を見る。
かなりの高さから落下していた。

この高さからの着地はさすがに足への苦痛が伴うだろう。
・・・いや、寧ろ一度折れる。

『ホルス、これはどういう

とホルスに問い合わせようとした所で落下が止まる。
足元に印が浮かび上がっていた。

「ん？ なんだ？ 場所間違えたか？」
さも何も無かつたかのように言つ。

下を見ると確かに見覚えのある場所、
操られていた時に一度来た場所で、
恐らく奴のアジトと見ていいだろう。

『いや・・・恐らくここで問題はない。

だが、何故このような高い場所に移動したのだ？』

「ん？ ああ・・・【転移】の印つつーのは移動先を
対象からの座標 ・・・んーつまり、例えばアウラから後方上1
0メートル、

とかしか指定できないんだが・・・。

該当する場所に何があるか【文字通り】【転移】しちまつわ
けで…。

何か物があるとハマつて動けなくなったりするわけだ。

つつー事でよっぽど対象の場所が特定できていかない限り

何か物がある可能性が一番少ない上空に移動するのが妥当なわけ

だ

と、ホルスはなにやら得意げに説明してきた。

それなら…。

『そういう事は先に言つてもらいたいものだな』

むすつとそう答える。

ホルスは一瞬目を大きく開けると、

あー…と呟いた後、

「ひょっとして…びびったのか？」

と悪戯っぽく笑いを含みながら問いかけてくる。

む…

『別に

と、田をあわざずに答えた。

正直、驚いた事は確かだ。

「ほーう…

何やら口元を上げ、意味深な田でこちらを見てくる。

何も言わずホルスを細い田で睨みつける。

くつ…この男は…

そんな感じでも良いやり取りをしている最中、

一瞬横で何かが風を切る音がした。

ヒュンッ

『「ん？」』

ホルスと同時に疑問の声を発しながら下を見ると、下にはシヴィラの一昧と思われる者が数人、こちらに向けて『』を構えていた。

忌々しげに舌を打つ。

『・・・ホルス、少し高度を下げてくれ』

短剣の鞘に手を当てる。

もう少し地面に近づけば、即座にこの浮遊している印から飛び降り、奴らに切りかかる事が出来る。

だがホルス下を見たままは制止の手をこちらに差し出した。

「いや、いい。これで十分だろ」と言いながらスッと目を細めた。

・・・印の念映という奴か

突如下に居る者達の前に光が現れ、全員が吹っ飛ばされるのが見えた。

『反則だな・・・あれば』

苦笑しながら呟く。

「いや、まあ・・・そうでもない。

」ひやつて相手の姿が見えていないと使えないしな」と言いながらホルスは一瞬下に目を向ける。

途端、足元の印の光が弱まり、高度が少しづつ下がつていった。

『成る程・・・それであの時、奴らは霧を出して姿を隠したのか』

同じ印術師故、念映は使えどもその弱点は理解していたわけか。

「多分な・・・」

地面に降り立つ。

先程弓を構えていた奴らは、倒れたまま動かない。

恐らく氣絶しているのだろうか。

「少し強めに発動させたからしばらく氣を失っているだろう。

命には別状は無い筈だ」

こちらの視線の先を感じてか、ホルスがわざわざ説明をしてきた。

『・・・そうか』

無感情に返事をする。

我ならば盜賊などに容赦はしない。

そもそも”人”として見ていないからだ。

私がやつていたら恐らく奴らを皆殺しにしていただろう。

そういう面ではホルスは奴らの命を救つた事になる。

「さて・・・入るとしますか」

といいながらホルスは奴らのアジトの入り口 地下へ続く洞窟のような穴へと歩を進める。

・・・ん？

入り口の奥で一瞬、何かが動くのが一瞬見えた。

『待て』

前を歩く背中に制止の声をかける。

「・・・ああ、見張りがもう一人居たっぽいな。

奥へ逃げたようだが・・・」

『どうする？ 奴等に私達が来たという事を知られたも同義だが』
自分達が来たと知れば、奴らはそれなりの対策をしてくるだろう。
無闇に突入するのは危険性が高い。

ホルスは歩を止めて一瞬考えるそぶりを見せる。

「んー・・・。かといつてここで時間を『えれば余計状況は悪くなるぞ？』

こちらに顔だけを向け、そう答えてきた。

確かに、今の見張りがシヴィラ達に知らせてから時間が経てば経つほど、

何かしらの備えをさせる余裕を奴等に与える事となる。

『・・・そうか。それもそうだな。

よし、行こう。奴の部屋まで案内をする』

タツと入り口へ向かつて駆け出す。

「了解、 気をつけろよ」

と、後からホルスが続く。

『わかつていい』

雑魚が何人居ようがさほど問題はないが、

あちらには卓越した闇術師がいる。

特に自分の影の位置には注意を払わなければならない。

下り坂の薄暗い通路を突き進む。

途中、いくつか脇道があつたが、

操られていた時の記憶によると奴の部屋へはこの先を真っ直ぐ突き進み、

広めのロビーに一度出なければならない筈。

あの場所に、ある程度の敵が待ち構えている可能性が高いか・・・

待ち構えて敵を迎え撃つには最適な場所であった記憶がある。

入ってくる者は何の障害物もない広い場所に出るしかなく、

待ち構えている方は柱やロビーにある階段から登れる

2階通路からも身を隠しながら侵入者を狙い打つ事も出来るだろう。ある程度の人数に死角から一斉に弓を射掛けられれば、

避け切れない可能性もある。

『ホルス』

足を止め、後ろに居るホルスに声をかけた。

余計な傷は成るべく避けたい。

もし奴等も同じ場所に居た場合、それが決定的隙になる可能性が高
いからだ。

ホルスが突然止まつた私にぶつかりそうになるが、

「なんだ？」

同様に足を止め、こちらに耳を向ける。

この男ならばあらかじめ知らせておけば
何かしらの対策を成してくれるような気がする。

『もうすぐ開けた場所に出る。

待ち伏せされるとしたらあそこの可能性が高いのだが・・・。
多方向から来る飛来物を防ぐ手段といつのはあるか？』

「ん、ああ。矢とかか？」

そう聞いてくるホルスに首を縦に振つて答える。

「そうだな・・・【結界】の印を強めに張れば何とかなるだろ。『
最も、一定以上の強さの直接攻撃を防ぐ事はきびしいけどな』
そう言いながらも既にホルスは頭上に印を描き始めた。

あれは・・・前に砂嵐を防いだ印か

『頼む。直接の攻撃があれば私が何とかしよう』

「了解。 ほいよ」

と、頭上に描かれた印にホルスが手をかざすと、
印が光りだし、甲高い音と共に周囲に微かな光の膜のようなものが
形成された。

「大体俺の周囲2メートルが範囲だな。

そこから出れば無防備だ。注意してくれ」

『わかった。 では行こうか』

改めて氣を引き締める。

「ああ」

通路の先、わずかに見える明かりに向かい、駆け出した。

- - Side Zexel - -

眼下の入り口を慎重に見据える。
奴らが外に現れたのであれば、
シヴィラの部屋に行くにしても、
今シヴィラが居るであろう集会場へ向かうにしても
必ずこのエントランスを通らなくてはならない。

そしてこのエントランスはこういった
外敵が侵入した際に備えて作られた場所らしく、
対象が必ず通らなければならない入り口から出る広間は
前後左右に一階層の通路があり、
身を隠しながら相手を狙い撃ちする事が出来る。
当然の事ながら今も召集できるだけのシヴィラの部下を2階通路に
待機させてある。

明かりは主に1階の広間を照らしており、
今自分とシヴィラの部下を配備している2階通路は、
下に居る者からは姿を確認し辛い筈。

まだ自分は目にしてないのだが、
あの印術師は姿を視認した者に対し、
いつでも瞬時に印術を用いる事が出来るといつ。
例え奴がこちらを視認する為に光術で照らしたとしても、
柱に身を隠す事ができる。

奴の対策には打つてつけの場所だが……。

不安は全く拭い切れない。

奴の力は計り知れないものがある。

加えて短剣使いのあの女……。

前回は上手く捉えたものの、縮地すら使いこなす達人だ。

こちらが既に闇術師と知られているからには

前回の様に簡単には倒せないだろう。

それに、例え闇術で捕らえたとて印術師の方に解かれるのがオチだ。

”勝つ”事は不可能に近い。

ならばとにかく今はシヴィラが靈獣を呼び出すまでの時間を稼げばいい。

と、入り口の方から物音が聞こえてきた。
来たか・・・

これだけ待ち伏せに適した場所、

少しは警戒をしてくると思ったが、

奴らは堂々と広場まで歩を進めてきた。

その瞬間シヴィラの部下に射掛けさせる事も考えたが、寧ろそれは奴らを刺激するだけと思つた。

深く息を吸い、心を落ち着ける。

先ずは・・・。

『よう

姿は隠しつつ、奴らの所まで聞こえるくらいの声を放つた。
途端、広場にいる二人は足を止め、周囲を見回す。

「その声・・・ゼクセルとやらか」

女のほうが短剣の柄に手を当てながら低い声で答えた。

『お前ら、何の用でこんなとこまで来たんだ?』

目的は自分達の命な事は判りきっていた。

だがこうこうぐだらない問答でも時間を稼ぐ事は出来る。

「知れた事を・・・」

と、女が短剣を抜いた。

そしてその横で今まで無言だった男が口を開く。

「で? いつまで隠れてるつもりだ?」

そう、『こちら』を向いて言った。

それに反応し、

「・・・そこか」

と、の方もこちらへ視線を向けてくる。

途端、背中を一筋の汗がつた。

この場所は音の反射でどこから喋っていたかなど特定は難しい筈。

だがあの視線・・・。

明らかに奴はこちらの位置を把握している。

「ホルス 奴は私に任せてくれないか
こちらが次の行動を迷つてこちらに、
下から静かな声が聞こえてきた。

何?

任してくれという事は手を出すなという事だらうか。

「ん? でもお前あいつに いや、わかつた。

んじや俺は雑魚の相手でもしてるかね。

・・・そつちの邪魔にならんようにな

「なにうな

途端、待機させていたシヴィラの部下達から緊張感が走る。奴らはしつかりと他の連中の存在にも気づいていたらしい。

「・・・すまない」

と、女はこちらに体を向け、姿勢を低くした。

【縮地】で突っ込んでくるつもりか。

好都合だ。あの女一人であれば時間を稼ぐ事は容易い。いや、それどころか返り討ちにしてやる。

女の向く方向から予想される到達地点は、目の前の柱。ダッと一飛びに柱から身を離し、

同時に影の針を地面から生みだし、対象へと突き刺す

【シャドウーノードル】を発動すべく魔力を地面へと送った。

次の瞬間、予想通り女が柱に横向きとなつて現れた。そのままこちらへと飛ぼうとしているが、

そうはさせない。

『おらよー!』

地面に送った魔力を解放した。

直後、地面から数本の黒い針が女に向けて伸びる。

女はそれを見て、こちらにそのまま向かうのを諦め、こちらとは逆側に飛んだ。

柱に影の針が突き刺さり、先ほどまで女が居た場所を抉る。

その結果に、両者共忌々しげに舌を打つ。

仕方ねえな・・・。

まずは奥の通路に誘導するとしよう。

狭い場所であればあるほどこちらの魔法は捕らえ易く仕留め易い。

背後のシヴィラの部屋へと続く通路へと駆け出した。

アウラと闇術師の男が奥へ消えていくのを見て
軽く息を吐く。

大丈夫かね・・・
行かせてしまつたものの少々不安だ。

何せ相手はアウラを一度捕らえた相手。
だが逆に考えればアウラにとつては清算したい相手だ。
自分が倒す事は恐らく容易いが、
それではアウラの心にしごりを残す事となるだらう。

ま、こっちをなるべく手早く済ませようか。
手は出さないにしても個々に動くのはなるべく避けたかった。

『おいお前ら!』

片手を腰に手をあて、この広間にいる全員へと
聞こえるように大きな声で話し掛ける。

『俺は別にお前らを捕らえに来たわけでも、
殺しに来たわけでもない。
用があるのはさつきの男とお前達のリーダーだけだ。
黙つてここを去るならば別に見逃してやつても』

キンッ

と甲高い音が聞こえた。

先ほど仕掛けた【結界】に矢が当たったようだ。

ぱりぱりと頭をかき、深く息を吐いた。

『何であんな奴をそこまで守ろうとするかね……』

『気が重いが……まずはもう少し脅してやるしかないか。バツと上に片手を上げ、その手に魔力を集中させつつ、足元に【浮遊】の印を念映する。

『お前らとあの男を繋ぐ物は何なんだ?』

浮遊の印により、体が周囲の2階通路と同じ高さまで浮かぶ。その間、前後左右から何本もの矢が飛来し、甲高い音を奏でながら結界への攻撃を繰り返していた。

『忠誠か?』

右手の魔力を解放し、光術【フラッシュ】の応用魔法、発した魔力が持続する限り光を発し続ける【フラッシュライト】を頭上に仕掛ける。

『物欲か?』

仕掛けた頭上の光により、2階通路のほとんどが光に照らされる。結果、柱で身を隠しきれない者の姿がこちらから視認できた。

『それとも……』

目を細め、視認した者に片つ端からやや弱めの【衝撃】の印を念映する。

『恐怖か?』

パンツ!と弾ける音と共に、

【衝撃】を念映した者の体が吹き飛ぶ。

弱めに仕掛けた為、気絶はしない筈。

ただそれなりの痛みはあるだろ「。

対象の者は地面にうずくまり、

念映を仕掛けられた部分を押さえながら喘いでいる。

『・・・今のは弱めに撃つた。

その10倍程度まで強くする事も可能だぞ?』

ま、その際は仕掛けられた場所が吹つ飛ぶだろ「な』

周囲を見回しながらフレッシャーを掛ける。

「ひ・・・ひい」

横から声がしたのでそちらに顔を向ける。

今さっきまで死角に入っていたようだ

先ほど念映対象者では無い。

今のを見て腰を抜かしたのか、

地面に尻をつけながらじりじりと後ろに下がっていた。

その姿を見て溜め息を吐き、

『さて・・・』

視線を前方に戻して再び全員に問いかける。

『もし、奴とを繋ぐものが忠誠でないのならば

今すぐこの場を去れ』

先ほど【衝撃】を念映をしたのは半数程度だろ「が

残りの者からの矢はもう飛んでこない。

『お前らのリーダーは少しやりすぎた。』

だから 僕が確実に殺す』

発する声を少し低くする。

『だから奴について行き、甘い汁を吸う事ももう出来ないし、

奴の力に恐怖し、付き従う必要もなくなる『浮遊の印を調整して前方の通路に体を進めた。

『もし、奴に絶対の忠誠を誓つていると叫うのなら仕方が無い。奴と心中してもらつ事になる』浮遊の印を消し、2階の通路に降り立つた。

『その事を踏まえて』

そう勤めて穏やかに言いつつ背後を向き直る。

『もう一度、考え直してはくれないか?』

- - Side Aura - -

床や左右の壁を蹴りつつ、迫り来る黒い針の嵐を避け続ける。奴が放つ影の針は、決して速度は速くなく、動きも単調な為、至極避けやすくはある。

だが今問題なのは奴に近づく事ができない事。

先ほどの場所とは違い、この通路は余り避ける場所に余裕がない。奴の攻撃を避けるだけならば何とかなるが、奴との距離を一定以上縮めようとすると、相手は的確にそれを阻止するように攻撃をしてくる。

『くつ・・・・!』

もどかしさに元気りりと歯を噛み、

地面を蹴つて一端奴との距離を取つた。

前方に居る男も何やら口元を歪めながらも攻撃を止め、

地面に両手を構え影の針をいつでも出せるよつた状態で構えている。
しばしお互いに動かず睨み合つ。

「のままではらちが明かない。

姿勢を低くし、【縮地】の体勢を取る。

それを見た前方の男はまるで待っていたばかりに
さらに唇を吊り上げる。

笑つてゐる・・・?

それを見て引つかかっていた物が確信に変わる。

奴はどうも【縮地】の”前方直線にしか移動できない”
という特性を見抜いているように思える。

先の戦いの時、奴に致命傷を負わす事が出来なかつた事、
それに加え、先ほど奴はこちらの到達地点にすぐに攻撃を加えてき
た。

恐らく「」の構えを見て、到達地点を予測されてゐるのだろう。
そうなると先ほどまでの攻撃は、「」が痺れを切らして【縮地】
を使うのを
誘つていたよつとも思えてくる。

こちらの通過地点、到達地点を読まれてしまつのであれば、
この狭い通路で【縮地】を使えば、奴の魔法の直撃を受けてしまつ可
能性が高い。

但し・・・

普通に使えば、な

こちらとて前回の戦いで全て手の内を見せたわけではない。
狙つ”地面”を鋭く見据える。

今「」が体を向けている角度は奴のやや右。

返り血を浴びる事無く仕留めるには【縮地】で奴の後ろへ移動し、
その途中、左の短剣で奴の首筋を断つ事。
それが”奴”の予想しているこちりの思惑だろ。

すうと息を吸い、それを肺の中に留めながら田を開じる。

『【陽炎】』

静かにそれを呴きながら閉じた田を開いた直後、
強く、地面を蹴つた。

- - Side S i v i l l a - -

『・・・よし』

自らが送った魔力に満たされた【封龍の書】を地面に置く。

靈獸を従えるには3つの段階がいる。

一つ目は靈獸を封じた物 いわゆる”魔陣器”と呼ばれる物に
一定量の魔力送り込む事。

これはどのような靈獸であろうとも共通の作業である。
この時点でその魔力が靈獸へと流れ込み、

靈獸は自らの力で”魔陣器”から出る力を得る。

一つ目は”力の言葉”を発する事。

云わばその靈獸に対して呼びかけを行つもので、
形だけの儀式のようなものだ。

これにより、靈獸は現世に姿を現す。

そして三つ目は”契約”を行う事。

これに關しては何をして良いのかが一切わからぬ。

どのような書物にも記されてないのだ。

今まで封龍の書を持ちながら靈獸を召喚してみなかつたのもこの部分に一抹の不安を抱えていたからだ。

只一つ分かる事は契約条件は靈獸が提示する、という事。この事自体も今一つよくわからない。

提示するというのは靈獸が喋るとでも言つただらうか。

未知の危険は侵さないのが信条であったが、

そのような事を言つてゐる場合ではなくなつた。

とにかく・・・今は力が欲しい。

置いた本から距離を取り、封印に向き直る。

両手を広げ、封じられた龍への言葉 力の言葉を発した。

♪我 汝を縛りし古の楔を解き放たん

汝 永久たる常闇より出で、万物を平伏せしめる其の力、我が前に示せ！<<

その自らの声が周囲の壁から反響した瞬間、床に置いた【封龍の書】が、怪しく赤い光を放ち始めた。

『んー・・・』

- - Side Horus - -

現状を見てどうしたものかと頭をぽりぽりとかく。

道化を演じてまで脅した効果はしつかりと現れ、

大半の者が色めき立つて階段を駆け下り、出口へと群がつていつた。

元々狙いは奴ら一人。

今回に関してはここに居る人間からしてみれば
自らが”争い”を持ち込んでしまつたようなものだ。
それは更なる災いの種を摘み取る為に止むを得ない事とはい
ここで戦う事は正直自分自身の信条に反する。

だが・・・

えーと・・・3人か・・・

正直言つて、残つた時の事を考えていいなかつた。

あれだけ齎してもここに残るだけの者が、

盗賊に身を堕とした者達の中に居るとは思つていなかつた

『で・・・残つていいお前らは・・・

あいつに絶対の忠誠つてやつを誓つてるつてわけ?』
そう残る3人に聞こえるよう、溜め息混じりに問う。

返事は無い。

それぞれが何やら悲壯とも思える眼差しでこちらを見ていた。

こちらに『は効かないともはや判つていいのかそれぞれ剣を構えて
いる。

そして・・・皆何故か身を隠そつとさせず、じりじりとこちらに近
づいてくる。

それは戦おうとしているのではなく、まるで

「・・・してくれ

そのうちの一人が小さな、呟くような声でそう聞こえた。

『ん・・・? 何つた?』

「殺してくれ!」

聞き返した後、すぐに大きな声で返答が来た。

な・・・

突然の意外な言葉に、大きく目を剥く。

『は・・・？ お前ら全員・・・か？』

近くまで歩いて来た3人の顔を見回す。

三人全員、小さく頷いていた。

何れの眼も、死を覚悟した者の眼だ。

何が彼らをそこまでにさせるのかはわからない。

大方盗賊以外に自分の身を置く場所が無い、

とか今更ながら罪の意識に苛まれた、

とかそういう所なのだろうか。

『事情はよくわからんが 嫌だと言つたら？』

最初に殺してくれと言つて来た者の目を見てそう言った。

如何な者であろうと無抵抗の人間を殺す事はしたくは無い。

三人ともそれを聞いて少し押し黙つた後、

意を決したように持つていた剣を自らに向け始めた。

それを見て、言い知れない不快感が芽生える。

限りある生、それを吐き捨てたいというのならば

・・・好きにすればいい。

『 良いだろう』

静かにそう言いながら3人を睨み付ける。

3人は手を止め、再びこちらに目を向けていた。

この3人が死ぬべき人間かどうかは・・・

ふと 奥の通路に目を移す。

そう、自分では本当に正しい判断が出来ない。

少なくとも自分は、自らの命を粗末にする者には嫌悪感を覚える。

自ら命を断つ、といつのであればせめてもの情け、苦しまぬよう殺してやるだけだ。

『じゃあな・・・』

と、静かに言いながら

3人の前方の空間に魔力を送り始めた。

- - Side Nexcel - -

気が付けば、薄暗い通路の天井を見上げていた。右首から流れ出る生暖かい液体を枕にしながら。

何が・・・起きた・・・？

何故俺はこんなところで寝ているのか。

果然と、薄れ行く意識の中で考える。

未だに現在の自分の状態を理解できないでいる。

数秒前、俺は確かにあの女の通過地点を予測し、

そこにシャドウニーードルを放ち、奴の体を貫いた。

そう、確かに貫いた筈が・・・。

それが・・・何であんなところにいやがるんだ・・・？

それも、ほとんど無傷で。

視線を上 つまりは背後に向ける。

見ると、あの女に然したる傷はない。

確かに体の中央を魔法で貫いた筈が、

何故か右脇腹と、右腕に僅かにかすり傷がある程度だ。

それに女の居る位置も不自然だ。

奴は確かに”縮地”をこちらの左側に向けていた。

それは絶対に見間違えようはない。

そして、”縮地”中に方向を転換するなど、絶対に不可能な筈。

『何を・・・げほつ・・・・・しゃがつた・・・』

喉から血と声をしぼり出す。

徐々に視界が狭くなつていく中、

後ろに居る女が立ち上がる気配がした。

「・・・【陽炎】といつ。 ”縮地” を一回連續で行つ事で、
1回目の縮地到達地点に残像を作り出す。

お前が魔法で貫いたように見たのはそれだろう

抑揚の無い声で女が答えた。

見ると、先ほど女を貫いた筈の場所に未だ薄い残像が揺らめいている。

『んな・・・馬鹿な・・・』

女はどうみても20歳かそこら。

その歳で、縮地を使いこなすだけではなく、

そんな、こちらの知識にすら無い技まで使えるといつのか・・・。

「一度の勝利に慢心を招いたのがお前の敗因だな・・・。

盗賊などに加担する者には似合いの末路だ」

キン、と短剣を鞘にしまつ音が響く。

『ハツ ちげえねえ・・・。

あの魔術師がヤバすぎて・・・お前さんの方を侮っていたな。
・・・結局、どちらも・・・化けもんだったって事・・・か
とうとう徐々に視界が暗くなる。

似合いの末路、か。

その言葉が重く感じる。

自らのしてきた事を省みると、
確かに・・・その通りかもしけない。

だが、靈獸だの得体の知れねえ魔術師なんざに殺されるより・・・
綺麗な姉ちゃんに殺されただけマシ、だつだな。
と、そんな事を思いながら自嘲を籠めた笑みをこぼす。

そして
ぶつん、と・・・無が訪れた。

- - S i d e A u r a - -

既に事切れた男を一瞥する。

笑つてゐる・・・？

足元で血の海に沈んでいるこの男は、
何故かこの結末に満足とでも言いたげな顔だ。

それを見て、軽く不愉快に思いながら鼻を鳴らし、踵を返した。
先に行きたいのは山々だが、ホルスの様子も気になる。
あの男に限つて雑魚相手に万が一などという事も無いだろうが、

「のまま単独でシヴィラの元へ行くのも義理に欠ける気がした。

『つづ』

歩き出した瞬間、右足に鋭い痛みが走った。

やはり、まだ痛むか・・・

縮地を一連発する【陽炎】は言わば外法技である。

何故なら、通常の者が用いれば一度と歩けなくなるほどの足への負担をもたらすからだ。

しかし自分の場合はどんな傷もすぐに治るという体質を持っている。確かに一度目の縮地に用いた右足は一度著しく壊れたが、今はほぼ直っている。

とはいっても、未だに痛みだけは残っているようだ。僅かに顔をしかめ、右足を引きずり気味に歩きながら、元来た道へと足を進める。

が、途端

視界が突如急転する。

む・・・こんな時に・・・

自らの【助けるべき者を見る能力】が発動したようだ。ホルスを手伝うのは自らの意思。

そして、助けるべき者を助けるのは自らの生きる目的。天秤に掛ければ後者に傾く。

経験上さほど遠い場所に居る者を視た事は無い為、

助けに行つた後すぐに戻れるかもしれないが・・・。

災いの根源たるシヴィラを残したまま行く事は正直心残りだ。

しかし、それは杞憂に終わる事となつた。
眼に映つた光景はまさしく今向かう先、
ホルスの居るロビーであつた。

ん・・・まさかホルスに何か・・・?

だがその考えは一瞬にして消え、驚愕に姿を変える事となる。
『なつ・・・!』

今視界に映つているその姿に、思わず声を上げた。

助けるべき対象として映つたのは

そのホルスと対峙している3人の男達。

そしてその者達は勿論、自らが忌み嫌う盗賊だつた。

- - Side S i v i l l a - -

身に刻まれるのは歓喜と恐怖。

目の前に現れたそれは余りに非現実的なモノだつた。

”封龍の書”の【龍】という文字は単に、

封じられるものの力の象徴を示しているのだと思つていた。

だがそれは大きな間違いだつたのだ。

この眼に映るモノ

それは間違いなく【龍】であつた。

神話や伝承、おどぎ話でのみ姿が描かれる力の象徴。
まさか自らの眼でそれを見るとも、

そして、自らがそれを”従えられる”とも思つていなかつた。

『ふ・・・ふふ・・・』

なんと愉快な事か。

田の前の龍に向かい、両手を広げる。

『我が声に答えし靈獸よー、汝の名を問おうー。』

その声に反応したのか、

龍はこの集会場を埋め尽くさんばかりの巨体をじちらに向け、その真紅の眼を開いた

「永い・・・眠りだつたくく

その”声”は直接頭に響いてきた。

どこのまでも低く、そしてどこまでも鮮明だった。

「予の眠りを呼び覚ましたのは、お前か？」

龍はじちらの質問には答えず、逆にそう問いただしてきた。

『如何にも。今一度問う。汝の名は？』

靈獸との契約には先ずその名前を知る事が条件である。そして靈獸が提示する条件を満たせば、

契約し、使役する事が出来るらしいが・・・。

条件とこうのあればなにかを靈獸に差し出すとこうのが一番予想できる答えた。

あの龍を使役出来るのであれば、
例え寿命を差し出せと言われようが、
体の一部を差し出せと言われようが、
その条件を飲むつもりでいた。

いや、この龍があの男を飲み込む姿を見る事が出来るのなら・・・。
命を差し出せと言われようとも従うかもしない。

自分は既に眼前の龍に魅入られていた。

「名を問う……と言う事は予との契約を望むかくく
龍はそうこちらに問い合わせながら少しその大きな眼を細める

『その通りだ！ 汝が望む契約条件を提示するがいい！』

早く……
さあ早く……

と、心の中で繰り返しながら、龍に問う。

だが、龍の答えは予想外のものだつた。

「では……お前の”力”を示すが良いくく
と、静かな声が頭に響く。

何……？

一瞬、奴が何を言つているのかが理解できなくなり、体が硬直する。

次の瞬間、龍は大きく口を開け、
こちらに紅い炎を放つてきた。

体内から炎を発するというその行為、

まさしく神話や伝承の中の龍と同じであつた。

だがそんな事に感心している場合ではない。
大きな炎の奔流がこちらに襲い掛かる。

咄嗟に両手に魔力を集め、前方に水の壁を張つた。
幸いな事に自分は元来【水術】の使い手でもある。
攻撃が炎であれば突然の攻撃であると防げる。

しかし、襲い来る炎は余りに強い。

前方に張つた水の壁は、少しづつその炎が蒸気を上げながら削つて

いく。

それを精一杯の魔力放出し、食い止める。

『な、何を・・・!』

『予は弱き者には従わない。』

予を従えたくば・・・最低限、予に満足をさせる戦いをさせる事
だなく、

龍は炎を吐き続けながらも、ひきりの脳に直接声を掛けた。

『そんな・・・馬鹿な・・・』

苦しげに奥歯を噛みながらも龍の吐く炎に耐える。

だが、突如

自分の体が浮くのを感じた。

そして、しばし視界が暗転した。

『ぐ・・・ア・・・』

息が出来ない。

一体何が起こったのか。

薄く眼を開けると、自分は天井に顔を向けていた。

だが自分と龍の位置関係、

そして、腹部の方から感じる熱を見たとき、事態を把握した。

奴はこちらが炎を防ぐのに必死になつてゐる間、
あの大きな前足で、直接自分を吹き飛ばしたのだ。
そう、まるで子供が石を蹴り飛ばすかの如く・・・。

『ふ・・・はは・・は』

笑いがこみ上げる。

そうだった。 そうだったな・・・
自分は何故この龍を使役できるなどと思ったのか。
考えてみれば当たり前の事だ。

弱き者は強き者に従い、

そして強き者は弱き者を虜げる。
自ら実践してきた事ではないか。

『・・・フ・・・ハハ・・』

何故気づかなかつたのか。

自分がこの龍の力に魅入られた時点で、
こうなる事など判りきっていた筈なのに・・・。

『ハハ・・はハ・・・あはハはハははは!...』

自らの余りの滑稽さに笑いが止まらなくなる。

›› 狂つたか・・・。では 安らぎを与えてやるううう
脳に声が響くがもはやアイツが何を言つているのか良くわからない。
その事実すら滑稽に思え、余計に笑いを誘つた。

そして 灼熱が覆いかぶさる。

『ハハはヒヤハ・・・! ア、熱い・・・熱いじやないカハハはアハ
ハハ・・・は・・』

死を感じながらも笑いは止まらず、

そのまま ゆっくりと意識が消えていった。

「待て！」

ロビー一帯に響く声。

その声を聞いた時、心底安堵した。

咄嗟に目の前にいる3人の眼前に仕掛けた印を解除する。

『よ。アウラ。お疲れさん』

声のした方に顔を向け、片手を上げた。

アウラは腰に手を当て、露骨に呆れた様なそぶりを見せた後、タツと一飛びにこちらの前方、つまりはこちらを3人から遮るような場所に立つた。

「で・・・ホルス。この者達は何者だ？」

？ 質問の意図が良くわからない。

『ん？ 盗賊だろ？』

と、答える。

しばしの沈黙。

「・・・そうなのか。やはり」

と。アウラは目を瞑り、悩むような仕草を見せた。

アウラの背後に居る3人の盗賊達は、

先ほど印が間近に現れて以来、腰を抜かしているのか地面にへたつているが、

今の状況が良く掴めない様で、ぼーっとこちらを見ている。いや、正直俺も良くわからん

『えーと・・・アウラ。お前はこいつ等を【視た】んだろう？』

先ほどアウラの声を聞いて安堵したのは
アウラが無事に戻ってきた以上に、

自分がこいつ等を殺すのを止めてくれた事にあつたのだが。

「む・・・まあ・・・確かにそつなのだが・・・」
と、アウラは3人の方へ振り返る。

「お前達、本当は盗賊ではないのだろう?
例えば・・・そうだな・・・秘密裏にアジトにもぐりこんだ
ダシュタの兵士とかではないのか?」

と、真剣な顔で聞いていた。

3人は言われた事が良くわからず、目をぱちぱちさせている。
『んー・・・多分・・・それは違うと思つぞ、アウラ』
そう言つと、アウラは睨むようにこちらに向き直り、
「・・・それでも無ければ、私が【見る】筈が無いだろ?。
盗賊共を救えなどと・・・何かの間違いにしか思えない」
と、吐き捨てるように言つ。

前々から感じていた事だが、アウラはどうも盗賊を毛嫌いする傾向
にある。

盗賊を嫌うなどというのは至極当然のことだが、
それでもアウラの嫌い方は何か軽蔑と共に殺意すら付随している。

とりあえず・・・事情を説明するか

『こいつ等はな・・・【自分達を殺してくれ】とか言つてるんだよ』

その言葉に、ぴくりとアウラは反応する。

「なんだと?」

『大方盗賊としてしてきた事の罪悪感に今更かられたつて所だろ?』
が・・・』

と、そこまで言つと3人は俯いた。

その仕草は、今言つた事が凶星だつた事を示しているのだろう。

『どうもこうつ・・・それにイラッと来てな。

ついご期待に沿おうとしちまつたんだが・・・』

と、溜め息を吐いた後、

『殺さなくてもいい奴を殺してしまう所だつたな・・・。

アウラ、お前が着てくれて助かつた。

礼を言つ

アウラに眼を向け微笑みかける。

アウラは一瞬目を見開いた後、

「あ、ああ。私は、ただ自分の役目に従つただけなのだが・・・役に立てたのなら・・・それは良かつた」

戸惑つたようにそう答えた。

それに頷いた後、再び後ろの3人に目を向ける。

『さて、ちとお前らに質問なんだが・・・』

3人はその声に反応して俯いていた顔を上げた。

『何をそんなに悔いでいる?

いや・・・それ以前にそんなに悔いるくらいの神経を持ち合わせているのなら

なんで盗賊団なんつーもんに入つたんだ』

そう問うと、再び3人は俯き、しばし無言になる。

「故郷の村が、標的にされたんだ」

3人のうち一人がそう呟いた。

喋つた男に目を向けるが、黙つて続きを促す。

「シヴィイラが率いる盗賊達は、俺達の村で容赦なく略奪を繰り返していたんだ。

・・・略奪は約1ヶ月間毎日続き、村はもつ差し出す物すら無くなつていた』

俯きながら淡々と男は話す。

『お前ら3人共、その村出身なのか?』

そう聞くと、別の男が頷く。

『成る程な・・・。 で?』

「・・・何も無くなつた村に、奴が次に要求してきたものは・・・人だつた。

思えば奴は最初からそれが目的だつたのかもしれない。

そうして結局、40人もの男達が村の平穏と引き換えに盜賊団に身を寄せた』

「40人・・・か。 それだけ居たのなら、何故戦おうとしなかつたのだ?」

横からアウラが質問すると、男は首を縦に振った。

「一度だけ戦おうとはしたさ。だが・・・あの男の術は強大すぎる。先頭立つて戦つた者は皆、奴に殺されていつたんだ。

結局そのまま、奴に逆らう事はできず、

あの村の出身の者は尽く危険な仕事をやらされ・・・

今では、俺達3人だけになつてしまつた』

男は淡々と喋つた後、悔しげに涙を零した。

そこまで聞き、小さく舌を打つ。

アウラは、表情を変えてはいないが、今まで3人への敵意を薄めた様子だ。

『・・・まあ・・・同情するしムカつきもする。

お前らが何をやらされてたかなんていうのも分からんが・・・

それなら、これから奴が死んで自由になれるかもしねりいつつーのに

死のうだなんて言う考えがおかしいな』

そう言うと、別の男が口を挟む。

『俺達も・・・罪が無い人を殺してしまつたんだ。』

事情はどうあれ、今更もう村に戻る事など出来ない。

他に行く所など無いし・・・

だからせめて・・・死んで償おうと

『 んなもんで

「 死は、贖罪になどならない

へんなもんで罪なんか償えると思つて いるのか? <

と言おうとした所をアウラの静かで、そして強い声に遮られる。

「 罪を悔いて安易に死ぬというのは所詮逃げ道に過ぎない。

今までの行為を悔いるのであれば死のうとするのではなく、

これからは罪を償う為に生きれば良いだろ?」

アウラのその言葉に3人は考えるように黙り込んでしまう。

どうもアウラにおいしい所を持つていかれたような心境であつたが、自分と言いたい事が大体一致していたので何も言う事はない。

後は3人がどうこう答えを出すかだが・・・。

盗賊として生きていた者が全うな暮らしを始めようとするのは容易い事ではない。

まして罪を償う為に生きる、要は人の為になる事を行いをしていくとなると、

生きる為に精一杯な者が多いこの砂海では尚更その道は困難なものとなる。

と、ふと【人の為になる生き方】といつて心当たりを思いついた。

『 お前ら・・・衛兵として働いてみるってのはどうだ?』

と、俯いていた3人に提案した。

3人はそれを聞き、顔を上げるが、すぐに表情を曇らせる。

「 元盗賊なんていう素性の人間を、雇ってくれる所なんてあるわけ

が
』

『や、それについてはちとツテがある。後は、お前らのやる氣次第
だぞ?』

この言葉、実は半分嘘である。

ツテ、とはダシユタの防衛総長ヨキの事。

彼には貸しがあるが、かと言つてそれに見返りを求めた覚えも無い。
この男達を向かわせた所で雇つてくれるとは限らないだろ?。
だが、衛兵として働くという道を提案した時、
確かにあの3人から目の光を感じた。

彼ら自身が強い意志をもつて願う事、それとちょっとした”後押し
”があれば

ヨキも面倒を見てくれるのではないか。

自らの唯一の手荷物である腰掛袋から、
その”後押し”を3枚取り出す。

煌びやかな光を放つこの金貨は、
とある国の王族、貴族しか持つ事は出来ない。

ヨキがこれを見れば、こちらの差し金という事は分かる筈。

『いいか? これを持つてダシユタの防衛総長のヨキつて奴に掛け
合え。

それだけでお前達の素性をどうこう言つてくることは無いだろ?』
3人は顔を見合せた後、ゆっくりと差し出した金貨に手を伸ばし
た。

『ただし、雇つてくれるかどうかは・・・お前達のやる氣次第
と、人差し指を立てて説明をしていた所、

突如 ドクンと大きく自らの心臓が反応し、嫌な感覚に苛まれる。

この、感覚は・・・

奥に通じる通路、先ほどアウラが向かった通路とは逆方向に伸びている通路を凝視する。

禍々しく巨大な力の渦。それがあの通路から漏れ出ている。

「？ どうしたホルス」

アウラと前に居る3人がこちらを覗きこんでくる。

この感覚を過去、2回体験している。

間違いなく

『靈獸を呼びやがったな・・・』

背中を冷たい汗が伝う。

「れい・・・じゅう？」

アウラが首を傾げる。

知らないのも無理はない。

魔術を志し、極めし者、もしくは闇の世界に生きる者しか奴らの存在自体を知らない。

シヴィイラとかいう男・・・あの程度の男が、靈獸を呼ぶなどという事は想像もしていなかった。

あの男を一度も見逃した自らの迂闊さに憤慨し、歯を強く噛んだ。

- - Side Aura - -

「レイジュウを呼びやがったな・・・」

突如様子が変わったホルスが、搾り出すように発した言葉。

『れい・・・じゅう?』

聞きなれない単語だ。

しかし、ホルスと出会つてから今までの間、ここまで動搖しているのを見たのは初めてである。それが並々ならぬモノではないという事は確かだらう。

ホルスは呆然としている3人に目を向け、

「お前らは早くダシユタへ行け。

ここにいれば・・・巻き込まれるぞ」

と、真剣な口調で言つた。

巻き込まれる・・・？

そんなに大きな戦いにでもなるというのだろうか。

「あんた達は・・・？」

戸惑いながらそう聞いてきた。

「シヴィラの事もあるし・・・ちと残らなければ行けない事情ができた。

お前らは正直ここに居ても足手まといだ。

ほら、さつさと行つた行つた

と、ホルスは手を振り払つた。

3人は一瞬躊躇するが、すぐに表情を引き締め、お互に頷きあつた。

「この恩は、忘れません」

と言しながら、3人揃つてホルスと自分に礼をしてきた。

『早く行け』

何となくむず痒くなり、そつけなく対応する。

走り去つていく3人の背中を見ながら正直複雑な気持ちになつた。

礼をされる事をした覚えも無いし、

盗賊業をしてきたあの男達をまだ許しきつたわけでもない。

だが、今まで忌み嫌っていた盜賊の中にも、あのよつて境遇がそつさせてしまった者達も居るといつ事は、良く覚えておひづれ、と思つた。

「アウ！」

後ろからの声に、振り返る。

「靈獸つつーのは・・・まあ俺も詳しきは分からぬんだが、とんでもない力を持つた知性を持つ魔獸だ」

『ほう・・・』

そんなものの存在は信じがたい話ではあるが、この男が言つのであればそれは本当なのだろう。

「大昔に封じられたらしいんだが・・・。

どつかの馬鹿がそのうちの一匹復活させたらしいな。
・・・恐らく今からそいつと戦闘になるだろう」
と、そこまで言つた後、ホルスはこちらの眼を見据えた。
「 それでも、力を貸してくれるか？」

その真剣な眼に、一瞬だけ目を見開く。

何を今更・・・

すぐに表情を戻し、

『私は、お前の力になる為にここに来た』

はっきりとそれだけ答えた。

例えどのような敵が居ようともこの意志に変化はない。

ホルスはため息混じりにふつと微笑んだ。

「 そつかい」

と、言つた後再び表情を引き締める。

「んじ ゃ 行くとしようか！」

タツと先ほどゼクセルと対峙した通路とは逆方向の通路へ

ホルスが駆け出したのを確認すると、
こちらも黙つてそれに追従する。

先に何が待つていようと、
この男となれば、打倒出来そうな気がしていた。

- - S.i.d.e ? ? ? ? ? - -

ぐだらぬ・・・

炭くずとなつたモノを見据える。

呼び出された時から、この男の望みなどわかつっていた。

それは、血の歪んだ自尊心を埋める為。

そんな望みになど答える筈もない。

全くもつて下らぬ事で現世に呼び出されてしまつた。

すぐに眠りにつく事も出来るが・・・。

それでは余りに無意味が過ぎるではないか。

ならば。

どれ・・・。以前に呼び出されてより幾千年。

果たして現世がどのように変わつたのか・・・

見て回るといよが。

天井に首を向ける。

だが空は見えない。

これでは飛び立つ事ができない。

大儀な・・・

体内に魔力を集中させる。
天井が空への道を邪魔するのであれば、
その道を作つてしまえば良い。

ん?

だが天井に貯めた力を放出する前に、
何か懐かしいものが近づいて来るのを感じ、その方向に顔を向ける。

この感じは　主殿・・・か？

それは自らの主の波動である。

主が自らを迎えてきたのであればそれは何よりも僥倖な事。
この度の目覚めは無駄ではなかつたと言えよう。
存分に主の為に力を發揮するだけだ。

だがしかしそんな考えは次の瞬間打ち碎かれる事となる。
これ程の落胆が他にあらうか。

目の前に現れたのは主では無く・・・
二人のちっぽけな存在であつた。

- - Side Horus - -

オイオイ・・・

それはまるで冗談のような光景だつた。

人が100人は軽く集まれそうな空間。

元々は洞窟最深部の大きな空洞だったのだろうか。

そんなスペースを、たった一体の生物が半分近くを占拠している。

だがその巨体以上に驚くべき事は、

目の前に居るモノは魔法書や神話等の書物において
頻繁に偶像が用いられているモノ、

総称して”龍”と呼ばれるモノだった。

以前見た靈獸は、ただ一つ目なだけの巨人であった。
その巨体と力、何より再生力には驚かされたが、
この度はまずその神がかつた姿、そして存在感、
何より

「お前達は何者か？」
頭の中に直接低い声が響いてきた事に驚く。
隣に居るアウラにもその声が聞こえたのか、怪訝な顔で左右を見回
している。

頭の中に直接語りかけるそれはまるで、
”あいつ”のような会話の仕方だった。

『驚いたな・・・喋れるのか』
と、黒い龍に問いかけた。

龍は一瞬目を細める。

「言語を解すのが、ヒトだけだとでも思っているのか。傲慢な事
だな。」

して・・・再び問う。お前達は何者か？
頭の中に少し不機嫌そうな声で再び声が響く。

『何者つて言われてもな・・・しがない魔術師と短剣使いだが』

「 しがなくて悪かつたな』

横から余計な一言。

まあこの様子だと、どうやらあの姿を見てもさほど動搖はしていな
いらしい。

頼もしい事だ。

『・・・言葉のアヤだ。しがないのは俺の方だけって事で』
と言つと、溜め息で返事を返してきた。

「 まあ良い。・・・・・予の氣のせいであらへ。
して、お前達は何用でここへ参つたくく

意味深な言葉を残しつつ、龍は質問を変えてきた。

『んー・・・それはアンタ次第なんだが・・・。
先に2つ程質問しても良いか?』

「 申してみよくく

」

『先ず一つ目。赤い服を着た魔術師が居ただろ?。
恐らくアンタを呼び出した奴だが・・・そいつはどうした?』

この場に居ないといつ時点で大方の予想はつくが。

「 」

ただその一言だけが頭に響いた

「 」

「 ・・・呼び出した者に殺される、か。

奴には相応しいつまらん最後だな』

アウラがつぶやいた。

『・・・だな』

全くもつて同意。

奴が殺された理由はわからない。

大方靈獸との契約条件に何か不具合が生じたか・・・。
もしくは奴がよっぽど下らない命令をして靈獸の気に障つたか。
いずれにしてもやはやどうでも良い事。

これで当初の目的は図らずも達成したわけだが・・・。

『もう一つ。呼び出されたアンタはこれからどうするんだ?』

大人しく魔陣器の中に戻るのか?』

何よりこれからここに一つの動向が気になつた。

「それもつまらぬ。以前現世に出た時と今の現世。
その変化をこの眼で見て回るつもりだがくく
頭に響くその声の内容に辟易した。

アウラも表情を強張らせている。

世界を見て回る・・・つておい・・・
『えーとそれは・・・そのお姿でバサバサ世界中飛び回るつて事す
か』

「何が言いたいくく

今の一言が少し気に触つたのか、苛立つた声だった。

『そんな事になつたらパニックになるつての・・・

それどころかアンタを攻撃する輩も出てくるかもしれないぞ』

「・・・今の現世のヒトは予の姿を見て刃を向けると申すか
くく

龍はペクっとその赤い瞳を反応させた

「面白い……その様な輩は返り討ちにしてやるつづく

そう言いながら龍は眼を細める。

それは何処か笑っているようにも見えた。

「ホルス……私にはお前が話をややこしくしたようにも聞こえたのだが……」

と、言いながらアウラが横で額を押さえている。

『んー……まあ、間違った事は言つてないつもりだが……

実際、あいつが世間に姿を晒す事は良い方向に行くとは思えないだろ？』

そつ言つとアウラは「確かに」領く。

となると……一番良い解決方法は……

『では俺達目的は一つ。アンタと契約する事だ』

龍に向かってそう言い放つた。

契約条件はわからないが……。

力づくで大人しくさせるよりは楽 だと思つ。

「ほう……では お前達の”力”を示すが良い

途端に周囲の空気が変わる。

龍はその翼を開き、こちらに向けて口を開けた。

結局……そういうオチかい

うんざりしながら溜め息を吐いた後、
前方の”敵”に向けて身構えた。

「横に飛べ！ アウラ！」

自らの直感とその声が同時に自分の足を動かした。
一息にホルスとは逆方向へ跳躍する。

途端、前方の龍の口から炎の渦が吹き出され、
先ほどまで自分が居た場所に達する。

む・・・？

違和感を感じた。

炎が着弾した地面を見ると、何故か焦げ一つ無い。
あれだけの量の炎が着弾すれば普通、
落ちている石などは石炭化しているであらう。

かといつてあれは幻の類と言うわけでは無い筈。

炎と自分の距離はゆうに十数メートルあつたにも関わらず、
かなりの熱量を感じたのだ。

「”魂炎”か・・・。成る程。何もアンタは無差別破壊兵器つてわ
けでも無さそうだな」

横の方からホルスの声が響く。

”魂炎”・・・？

昔、何かの書物で見た事はある。

確かに、発する者の意思で燃やす対象を選択する事が出来る炎。
炎術の中の”ごく僅かな術のみがその特性を持つ”そだが・・・。
奴はどうやら体内でそれを生成できるらしい。

>>無礼な

<<

と、龍はホルスの居る方向へと向き直り、その巨大な腕を振りかざした。

しかしホルスは微動だにせず、龍の眼を見据えていた。

次の瞬間、鼓膜に直接響くような甲高い音と共に、龍の周りを囲むように無数の印が浮かび上がる。

「ほう・・・くく

その歓心したような声が頭に響いた直後、

仕掛けられた印が次々と連鎖するように爆発を起した。

『つく・・・』

爆発の激しさと飛んでくる土煙、石つぶてに片手で顔を覆う。

あれがホルスの全力か・・・

以前、オアシスで見たものより威力が数段上であつた。

しかも詠唱もせずに念じるだけであれだけの術を発動させるとは・・・。

この部屋が崩れ落ちるのではないかと危惧して上を見たが、特にヒビなどの危うい所は見あたらない。

ホルスの術にも対象以外への影響を減らす何かしらの手段が施されているのであろうか。

爆発の連鎖が終わる。

対象となつた龍は今、土煙に飲まれて姿が見えない。

よもや無傷とも思えないが、あれで死ぬという事も無いだろう。注意深く目を細める。

と、巨大な腕が上がるのが煙の隙間から見えた。

腕の先には鋭利な爪が剣のように伸びている。

腕は煙の中に向かつて凄まじい勢いで振りかぶつた。

あの位置は・・・

間違いない、先ほどホルスが居た位置に向かつて龍は攻撃を繰り出した。

厭な予感に苛まれる。

いくらあの男でもあの巨大な爪で裂かれれば・・・

『ホルス！』

「なんだ？」

と、背後から即答。

『・・・・・』

無言で後ろを振り返ると黒衣の男が平然と立っている。

『いや、いい。無事で何よりだ』

首を左右に振りながらそう言った。

ホルスは「おう」、と何やら一ヤ一ヤしながら返事をした。

大方【転移】の印でも張つてあつたのだろうか。

この男には心配するのも無駄な事なのかもしれない。

前方、煙の塊に目を移す。

『奴は・・・・?』

そう聞くと、ホルスは表情を締め再び身構えた。

「・・・効いてねえな。並の魔法じゃ傷一つつかねえだろう。

あれでも念映でできる中では最大の魔力で発動させたんだけどな・・・

・・・

どういう魔術耐性してんだか・・・つたく」と、うんざりしたように息を吐いていた。

「ヒトの身でそこまでの魔術を駆使するとは恐れ入った。
だが所詮・・・ヒトの放つ魔術など、予には効かぬく
土煙から姿を現した龍がこちらの脳に話しかけてきた。

「へえ。そうかい」

ホルスが龍の声を聞き流すように答える。

それと同時に、持っている短剣に少し違和感を感じて目を落とした。

「武器に【強化】の印を施しておいた。隙を見てそれで攻撃してくれ」

と、違和感の原因が囁いてきた。

短剣は薄い光の膜のようなものを帯び、確かに何か言い知れぬを感じた。

こちらが無言で頷いたのを合図に、3者とも動き出す。

龍は再び体内より生成した炎を放つてきた。

即座に横に飛び、回避する。

だがホルスは後ろに飛び正面からその炎と対峙した。

何を・・・！

という言葉を飲み込む。

奴が無策に炎を受けるとは思えない。

自らは龍に攻撃を仕掛けるべく壁際から回り込む。

案の定、ホルスは光の膜を両手で張り、炎を防いでいた。

あの様子ならば炎がホルスに達する事はなさそうだが、

龍があの上に直接攻撃を仕掛ければ無防備に攻撃を受けてしまう可能性がある。

その前に私が

龍はホルスの方を向いている。

回り込んだ自分は視界には入っていない筈。

ホルスは隙を見て攻撃しろと言った。

奴は炎を避けない事でその隙を作り出したのだろう。ならば自分はそれに答えなければ。

龍に体を向け、地面を強く蹴る。

縮地を用い、一飛びに奴の下へ行く事も出来るが・・・。

先ずは飛ばすに地面を滑走する。

何故なら恐りく・・・。

ブオーンと低い音と共に重い衝撃が迫った。

龍の尾がこちらに向け、凄まじい勢いで迫ってきた。

口元を上げる。

予想通り、奴は既にこちらの存在に気づいていた。
だがそれも想定内。

ここぞとばかりに強く地面を蹴り、身を浮かせて迫り来る尾を回避
し

狙うは奴の頭。

目標を定めて一直線に短剣を繰り出す。

だが短剣が奴の後頭部に到達しようとするその刹那、
『つく・・・・!』

凄まじい熱の風圧がこの身を焼きつつ押し返した。

何が起こったかはわからない。

炎の壁のようなものが奴への攻撃を阻んだ。

その壁に衝突した右半身からブスブスと煙があがっている。
傷自体は大したものではない。

この程度の火傷であればなんとかすぐに直るだらう。
とにかく体勢を立て直さなければ・・・

「アウラ！――！」

その声に反応し、前方を見てハツとする。

奴はホルスへの攻撃を止め、こちらに振り返りつつしていた。

『しま』

そして地面に着地する寸前、

鋭い痛みと共に、はじけるように身が飛んだ。

- - Side Horus - -

突如自分を狙う炎の渦が止まった。

訝しげに見上げると、龍の後ろから攻撃を仕掛けようとしていたアウラが、

炎の壁に身を弾かれていた。

驚きに眼を見開く。

あれは紛れも無く炎術の”ブレイズウォール”だ。

攻撃を防ぐ炎の壁。魔術には効果は薄いが、

直接攻撃を防ぐには相当な効果がある術である。

歯噛みをする。

桁外れの魔術耐性に炎術による防御、ねえ・・・

さすが靈獸。一筋縄ではいかねえな。

などと考えていた一瞬の内に、龍が次の行動を起こしていた。
身を翻しながらその巨大な腕を背後に向けて振り払った。
その先にあるのは、身を焼かれながら落下していく姿。

『アウラ！－！』

咄嗟に彼女の前に【障壁】の印を念印する。
だがその巨大な腕は易々とそれを突き破り、

その爪でアウラの身を裂きながら吹き飛ばし、壁に叩き付けた。

一瞬、背筋に寒いものを感じたが、すぐに龍を睨み付ける。

『・・・・つの・・野郎！』

怒りを覚えながら目を瞑り、片手を天井にかざした。

『ゝ無の狭間に燻る根源の光よ、此へ来たりて我が敵へと降り注げ！』

早口に詠唱を済ませ、即座に光の魔力を開放する。

かざした手からゆっくりと光の玉が現れ、

龍の頭上へと瞬時に移動する。

ゝゝむ ゝゝ

相手もすぐに気づき、浮かぶ光を見つめていた。

【セレスティアルレイ】

自らの操る中・・・といつよつ世に現存する光術の中で最上位の攻性光術だ。

『行け』

目を開き、声を発したと同時に頭上に放った光の玉が輝きを増した。

直後、そこから甲高い音と共に無数の光の線が発射され、

光の真下に居る龍の元へと降り注いだ

ゝゝぬ・・・ぬう ゝゝ

龍が怯むように首を下に向け、羽を自らに被せた。

発せられる光は大半が龍に直撃する寸前に何かしらの力で消失してしまつていたが、

それでもいくつかの光は龍に到達し、

皮膚を貫きはしないものの、確実にダメージは与えていた。

その様子を見て、少々安心した。

あれが全く効かないのであれば、本当に自分でまじりようもない。

少なくとも、まあ足止めにはなるな・・・

あの光は約1分程度発射し続ける。

その間、奴は動く事が出来ないだろ？

その様子を見て、即座にアウラの元へと足を向けた。
近くまで来ると、その状態に田を見開く。

龍の爪に裂かれたのであろう腹部、

そして叩き付けられたと思われる壁におびただしい量の血痕。

恐らく通常であれば死に至る傷だつたろう。

しかし、本人は気絶しているようだが既にあつた筈の傷は無くなり
かけている。

ふうっと安堵の息を吐く。

どうやら彼女も、やはり自分と大差無い回復力を持っているようだ。
とにかく、奴が再び攻撃を仕掛けてくる前に起こそなれば。

『アウラ』

肩を起こし、首を揺らしながら呼びかける。

と、アウラは「うつ・・・」といつもき声を上げた後、
薄く目を開いた。

『平氣か？』

と言つと彼女は、

「ホル・・・ス？」

寝ぼけたような声でそう言つた後、

急に目を見開き、即座に起き上がるとする。

「痛つ・・・！」

だが、すぐに腹部を押さえながらしゃがみこんでしまう。

『おいおい・・・いきなり動くな・・・』

傷はほぼ完治していても、まだそれを精神部分が受け入れていらない
のだろう。

ま・・・”この体”になつてから20年程度じゃ仕方ない・・・
か。

自らが不死という事を頭で認識するのは早いが、
奥深くの精神部分がそれを受け入れるのには時間が掛かる。
当分の間は、深い傷を負えれば例えすぐに体は完治をしたとしても、
その精神部分の枷が傷みだけを感じさせてしまうだろう。

『無理はするな。ゆつくりだ、立ち上がるか?』
と、手を差し伸べる。

「何を悠長な・・・! 奴が」

アウラはこちらに何やら文句を言つた後、前方を見つめて呆然とす
る。

その方向には、龍が光の雨に身を固めている姿があった。

「あの光は・・・? お前がやつたのか」と、こちらに顔を向ける。

『ああ。見ての通り奴は今動けない。
ついつても効果時間は限られていくけどな・・・』

「・・・あれ程の術は初めて見た」

そう言いながらアウラは【セレスティアルレイ】の光に
魅入られたように前方を見つめる。

『つと、そろそろアレの効果が切れる。立てるか?』
もう一度手を差し伸べる。

「あ、ああ」

アウラはこちらの手を取り、立ち上がると、
しばし首を下に向けて腹部を手でさすつてている。

「痛みが 消えた」

その呟きにそうか、と頷く。

どうやら彼女の精神部分がよつやく傷の完治に追いついたらしく。

「すまない。迷惑をかけた」

アウラが申し訳なさげに俯く。

『いや、俺の読みが甘かつた。

まさか魔術を使ってくるとは思わなかつたもんでな・・・』

奴が”魂炎”を用いている時点で気づくべきだつた。

対象を選定する炎など、魔術でのみ成せる事。

つまり奴が吐く炎も結局は魔術なのだろう。

それが他の炎術を駆使した所でなんの不条理もない。

『つと・・・』

前に向き直る。

そういうつしてこむつちに、光の放つ甲高い音が止んだのだ。

››驚いたな・・・

低い声が再び脳内に響く。

と、同時に二人とも身構える。

龍は体中からプスプスと煙を上げながらも、さほど堪えている様子はない。

寧ろ、今の事が無かつた事のよつこ、

››・・・その女くく

と、その赤い視線をアウラに向けた。

- - Side Aura - -

龍の赤い眼がこちらを見つめる。

『なんだ』

訝しげに聞き返す。

自分が注視された事がそもそも意外であつた。

どう考へても、あの規格外な術を放つたホルスに対して、興味を持つと思つたのだが・・・。

「何故生きている。ヒトの身としては、致命的な傷を負つた筈だが

成る程。そういう事か。
それを聞いて納得する。

要は、いくら靈獸とやらにしてもやはりこの身は不可解らしい。

『答へる義務はないな。ただそういう体質なだけだ』

そう投げやりに返す。

もつとも・・・【ただそういう体質】というのは本当に自らの知識の中でほとんどを占めるのだが。あとはあやふやな記憶と、ホルスから聞いたユグドラシル、とかなんとかの種を体内に持つといつ事程度。知識として呼ぶ事も怪しい。

しかし龍にはその言葉だけで充分であつたらしい。
なにやら真紅の瞳を眼を細めこちらを睨み付けている。

「成程。そういう事か。お前は現在の世における主殿の子なのだな」

？ 何を言つてゐる。

龍の言葉の意味を図りかねたが、

その声に、ぴくっと横にいるホルスが反応する。

「主殿？ まさか、ユグドラシルの事じやねえだろ？ な・・・？」

龍を睨みつけるようにホルスがそつと言つた。

「ユグドラシル・・・？ そ、うか。あの呪いは未だに・・・」

龍はこちらへの視線を外し、虚空を見つめた。

「んあ？ 何言つてんだ？ アンタ」

「いや、如何にもお前の言つコグドラシルは我が主だ。

それを知るお前もこの女と同様の存在かくく

「そうだが・・・。つて待て、つー事はあいつは前、アンタの主人
だつたのか？」

ホルスが少し動搖を見せながらそう尋ねる。

「主人か。そうだな。の方は我等靈獸全ての創造主だくく
龍のその言葉にホルスは舌打ちをしながら「そうかい」と呟いた。

「あの野郎・・・何考えてやがる」

「いやなに、もう数千年も過去の事だ。

我等が生み出された理由などお前達が知る必要も無い事くく

その言葉にホルスは舌打ちをしながら「そうかい」と呟いた。

「しかしヒトのような矮小な存在に種を託すとは・・・。

主殿の力は余程衰えていると見えるくく

正直ホルスと龍が言つてている事ははつきりとはわからない。

『で・・・それが何だ』と言うのだ

だがいい加減もどかしくなり、そう言つた。

不死という奇跡にしる、こんな化け物を生み出す奇跡にしる、
似たようなものだ。それがどんな経緯の差があるうとどうでもいい。

何より

『その矮小な存在の力がどのよつなものか・・・

思い知らせてやる』

勘に障つた。

いくら巨大な力を持つていようが思い上がりも甚だしい。

短剣を抜き、戦闘態勢へ戻る。

「 だな」

ホルスも何やら嬉しそうな顔で姿勢を正す。

「威勢の良い事だ……。 では、行くぞく

龍の紅い眼の色が光を増し、

再びびりびりとするような殺氣が広間中を包む。

さて どうするか。

先程のような失態は繰り返せない。
縮地では恐らく見破られてしまつだらう。

となると……【陽炎】を用いるか。

だが問題は尾でなぎ払われてはたとえ軌道を変えたといふで
その攻撃範囲に入つてしまふ。

「アウラ！ 上に飛べ！」

と、考へてゐるうちに横からホルスの声。
咄嗟に地面を蹴り、空中へと身を移す。

と、上昇終着点で足元に光が現れ、その高さのまま浮かんだ。

ホルスが咄嗟に【浮遊】の印を念映したのだらう。

何が起きたかわからなかつたが、
地面を見て目を見開く。

広間の床を埋め尽くすような赤い方陣。
それが怪しく光り輝いていた。

あれは確か 前に見たことがある。

炎術【フレイムグラウンド】

だが・・・

「なんつーでたらめなでかさだ・・・」

横でホルスがぼやく。

そつ、ホルスの言つ通りあれは桁違ひの大きさである。前に見たものはせいぜい、半径2・3メートルがいい所であつたが、下に展開されているのは裕にその10倍以上はある。とにかくあの方陣に触れば身を焼かれる事になるだらう。一度触れてしまえば、あの方陣の効果が続く限り身を焼かれ、自らの不死の特性で再生し、身を焼かれ、の無限地獄を味わう事となる。

そのような事になつては精神の方が耐えられるかどうかはわからぬい。

奴はこちらの不死の特性を知り、敢えてあの魔術を使つたのだろう。

そして何より、方陣は広間を埋め尽くしている。

これでは地面に降り立つ事ができない。

ふと、厭な予感が走り、はつとする。

「このままでは・・・

その一瞬の危惧の通り、空中に浮いている無防備な自分達を長く太い尾が唸りをあげながら横なぎに襲い掛かる。

「ち・・・！」

その先には何やら次の魔術を駆使するためか、魔力を練る事に集中していたホルスがいた。

刹那、反射的に体が動く。

現状の唯一の足場である【浮遊】の印を蹴り、なぎ払おうとする龍の尾に向かい、渾身の力をこめて両短剣を振つた。

迫り来る尾の存在に気づいた時には既に避け切れない距離だった。

『ち・・・!』

全力で【障壁】を念映する。

最も・・・大した効果は期待できないが。

逃れられない衝撃を覚悟する。

・ だが予想された痛みも衝撃も襲つては来ない。

自らに衝突する予定だつた尾の先は、

何故か自らを避けるように吹つ飛び壁に激突していた。

『んあ?』

思わず間の抜けた声を漏らしてしまつ。

が、前方を見直すと、すぐに状況を把握できた。

やつてくれる

笑みが漏れた。

アウラが自分が出した【浮遊】の印を足場とし、

龍の尾に向かい突進し、こちらに当たる前に尾を切断していたのだ。

当然足場から離れたアウラは床へ落ちていつたので、

急いで再度【浮遊】を念映する。

咄嗟の事とは言え無茶をする女だ・・・。

だがおかげで先ほどから練つた魔力が無駄にはなつていないうだ。

右手に練つた魔力を光の槍へと具現化させた。

それを大きく振りかぶり、真下へと投げた。

光術”ディスペルフィールド”の一種ではあるが、普通に使用したのでは既に展開されてしまっている”フレイムグラウンド”のような方陣魔術には効果がない。だがその特性を収束したものを槍に見立て、地面に突き立てれば、その周辺に張られた一切の方陣魔術を無効化できる。

突き立てられた光の槍は、地面に輝く赤い光に次々と漫透していき、その効果を打ち消していった。

『うし、もう下に降りても問題ないぞ』やや下方にいるアウラに声をかける。

「あ、ああ」

『わり。借りが出来たな』地面に降り立つた後、アウラに向かい、片手を立てる。
「何を言っている・・・。やつと一つ、こちらの借りを返せただけだ」と、そっぽを向かれた。

その姿を見て苦笑しつつ、前方に目を向ける。

龍もこちらの姿を視認する。

>>なかなかに面白い・・・<<
頭に声が響いた。
>>不死という恩恵があるにしろ、良く人の身でそれだけの力を得たものだくく今までの無感情な声とは違い、ほんの少しだけ愉悦に漫るような感情が見え隠れする声。

「ふむ・・・猶予をやうづ。」ちらからはず手を出さぬ。

今度はお前達の方から攻めてみてはどうだっだ？

それが何となく癪に障った。

余裕こきやがって・・・

と心の中で毒づいてるとある事に気がつく。

「ホルス・・・」

アウラも氣付いたのか、視線を尾に向けたままちらに声を掛けてきた。

『ああ・・・。つたくトカゲかよ』

そう、アウラが切った龍の尾が少しづつ再生しているのだ。

トカゲ・・・と比喩したものの、恐らくは

この龍はどの部分を傷つけても再生するだろ。

それは前に戦った靈獸がそうであつたからだ。

靈獸全てがそうとは限らないだろ。

先ほどの話　　靈獸が自分達と同じ”奴”から生まれてきたのであれば、

そういう特性を持つていてもおかしくは無い。

下手をすると奴らもひょっとしたら不死なのかもしれない。

それではこの龍を倒すことなど不可能なのではないか。

だがこの龍に関しては何も倒さなければいけない理由などない。

この龍は【力を示せ】と言つた。

例え不死であるうと、恐らくは一度でも奴に【死】に相当する攻撃を与えれば、

【力を示す】といった条件には充分である。

ならば

『アウラ、下がつていってくれ』

「何をするつもりだ？」

と、怪訝な顔の返事。

『せっかく時間をくれるって言つてるんだ。

それ相応の術をぶつ放す』

龍を睨み付けつつアウラに説明をする。

前にアウラが居れば巻き添えをくつてしまつだらう。

「・・・わかった。何か私にできる事は?」

アウラはこちらの言葉通り、後ろにさがりつつもう言つて来た。

『そりだな・・・。仮に、今から打つ術が奴に通じなかつたとして
も、

必ず隙は作れる。その隙に攻撃へ移ってくれ

「わかった」

そうは言つたものの、今から打つ魔術は

自らが扱う術の中で対単体ならば紛れも無く最強の術。

どんな存在であろうが、通じないという事は恐らく有り得ない。

しかしその分発動に著しい時間がかかるが、

『丁寧にこの龍は時間をくれるとの事。

ならば使わない手はない。

『あ、それと』

前方に佇む龍にも聞こえるように大きな声を出す。

『もし、このお方がいきなり攻撃してきたら食い止めてくれないか?
まさか・・・気高き靈獣様が自分の発言を破るとは思えないがな』

アウラが苦笑をしながら「ああ」と返事をする。

まあ・・・プライドが高そうなこいつの事だ。

恐らくはこれで平氣かとは思うが。

「何をするかは知らんが、予の言葉に偽りは無いへへ
ほれきた。」

『せいぜい・・・後悔しろ』

大きく息を吸いながら、両手を前にかざした。

- - Side - - - - -

なんとなく、だ。

奴らの全力を見てみたくなったのだ。

何故、そのような考えに至つたのか。
例え不死を得ようと所詮は矮小なヒト、
たかが知れていようと思つていた。

だがあの女は力をこめて振つた我が尾を切断し、
あの男は決して手加減などはしていない我が術を
いとも簡単に無効化した。

あの戦いより幾千年。

数十回と人が我が力を得ようと眠りを起こした。

だが何れもつまらぬ者達であり、

数秒と持たずに命を散らせた。

中には姿を見た瞬間逃げていつた者もいた。

矮小な人に辟易していた所を

久しぶりに戦いを”楽しい”と思えた。

それは奴らが不死という特性を主殿からもらつてゐる事実とは別に、

あの者達自体、充分に戦いを楽しめる力を備えていた。

だから恐らく、あのような戯れを思いついたのだろうか。

そして今、

こんな感情はいつ以来であろうか。
少し”後悔”をしている。

目の前で造りだされていく魔力は
紛れも無くこの身を滅し得るもの。
今この手で奴をなぎ払えば、容易く術の発動を防ぐ事が出来よう。
だがそれは出来ない。
自らの言葉を偽る事など、死にも勝る屈辱だ。
ならば。

奴の術の発動を待ち、それに合わせて、
我が最大の術をそれにあてがうのみ。

かつてこの身が”神炎龍”とよばれた所以、
至高の魔力より生み出されし白き炎、

【天界の神炎】を放つべく、

へブンズプレスへ

体内に全力を以て魔力を蓄積しはじめる。

血が騒ぐ。

まさかヒトなどと術の攻め合ひをする事になるとば、な。

『へ悠久の時を巡る導きの光よ。大いなる加護の力を此処にへ
かざした両手から幾つもの光が飛び、
前方に直径が自らの背丈の2倍程度の光の方陣が浮かび上がる。

』

- - Side Horus - -

まずこれが下準備。

光の方陣を作り、その近くで放たれる
魔術の威力を増幅する光術【アーケイン】

光術の基本ではあり、自分で言えば詠唱なしに即座に発動させる事
もできるが、
この術は今からする事の要でもある。

最大の効果を發揮できるよう、詠唱を省略せずに呼び出した。

次に指一本に魔力を籠め、印を描き出す。

【アーケイン】の方陣の一番上方に、
【閃光】の印。対する下方に【暗流】の印。
【煉獄】を左上に、【凍風】を右下に、
右上には【迅雷】、左下には【重力】
一つ一つの印に最大限の魔力を注ぐ。

本来同時に放つ事は愚である反属性同士の術。
だが術をなす6種の属性を同時に放つ事で、
その効果は大きく変化する。

同時に放たれた6種の魔力は、打ち消しあう事はなく、
一つの純粹な力へと変化する。

それは消滅の光。

その光が通過する所には何一つ残る事はない。

そして【アーケイン】により、消滅の光は増大される。
あの龍を包み込むくらいの光にはなるだろう。

100年ほど前に編み出したこの術。

未だ実戦で使用した事はない。

使用する必要もなかつたとも言えるが・・・。

口元を歪める。

自らの限界を試す機会などそうそう無い。
喜びすら覚えながら息を静かに吸つた。

『行くぜ・・・?』

【アーケイン】の中央に魔力を収束させる。

この6属性を併せて放つ自らのオリジナルの術、
【エレメンタルバースト】の発動は最後に【アーケイン】の中央に、
純粹な魔力のみを放つ事で対象へと放たれる。

だが術を放つ前、龍の様子を見て肝を冷やした。
奴は確かに言葉の通り、手は出してこなかつた。

しかし、その姿からは今までよりも遥かに大きい脅威が感じられた。
恐らくあれは・・・体内に桁外れの魔力を蓄積している。

こちらの術に発動に合わせ、あの魔力を何かしらの形で開放するつ
もりだらう。

今までの傾向から、それは恐らくは炎。

あれだけの魔力、どのような炎になるのか想像もつかない。

あらゆるものを消滅させる筈のこちらの攻撃すらもはじき返しかね
ない。

こめかみに汗が伝う。

『黙つてやられる気は さすがに無いわけか』

龍はそれに答えず、ひたすらこちらを見据えている。

『いいぜ・・・』

こうなれば力比べだ。
後は・・・。

『アウラ』

背後に居る相棒に声をかける。

「わかつてゐる」

と、アウラはたつと龍の横へと駆け出した。
さつすが

どうやらこちらの意は汲んでくれたらしい。

だが、なるべく彼女の世話になるような事態は避けたいものだ。

さて行こうか

眼を閉じて精神を集中させる。

『エレメンタル』

そしてありつたけの魔力を収束し

『バースト!!』

前方の敵へと解き放つた。

- - Side Aurora - -

凄まじい魔力の渦。

未だ発動すらしていないその術は、
既に充分脅威を感じるに値するものだった。

光り輝く大きな方陣を囲むように点在する6つの印は
全てが違う色を放ち、淡く点滅を繰り返している。

ホルスのする事にはもはや驚きは無いが、
それでもあれだけの魔術を駆使するに至つた
その才能と努力を考えると賞賛に値する。

「行くぜ・・・？」

ホルスは龍に向け、不適な笑みを浮かべつつ声をかける。

それはどこか、本当にこれを撃つていいのか？と
龍に確認をしているようにも見えた。

先ほどホルスは「術が通じなかつたらその隙に攻撃してくれ
などと言つていたが、あの表情を見ると
実の所こちらにそれをさせる気は毛頭無い様に思える。
それほど、あの術の威力に絶対の自信を持っているのだろう。

方陣はさらに光を増し、6つの印はその点滅を速くする。
だがそれとは別に、ぞくつと
何か言い知れない不安を感じた。

ホルスも同様のものを感じたのか、
目を見開いている。

いや寧ろ、こちらより明確にそれを感じ取つてはいるのか、
明らかに先ほどの表情とは一変している。

しかしこの状況を考えればこの不安が何なのかな
大方の予想がつぐ。

あれだけの術、いくら靈獸と言えども耐えられるとは思えない。
阻止は容易にできようが、奴は先ほど、こちらからは手をださない
”と言つた。

あのプライドの高そうな龍の事、それを違えることは無いだろう。

となれば行き着く答えは一つ。

ホルスが術を放つた瞬間に、
奴も何かしらの攻撃で対抗していくつもりだろう。

「いいぜ・・・」

ホルスは何かを振り切つたように再び笑みを浮かべた。

「アウラ」

振り向かずにはちらの名前を呼ぶホルスの意思を汲み取る。『わかつてゐる』

ホルスの術がもし龍の反撃に押されるような事があれば、自分がなんとかしなければならない。

向き合う龍とホルスを余所に、両者の真横へ身を移した。

ホルスはこちらに一瞬眼をやり、一瞬唇を吊り上げると、すぐさま前方に鋭い視線を戻した後、目を瞑つた。

その一瞬の静けさに、息を呑む。

そして次の瞬間、一際大きな甲高い音が耳を貫くと同時に点滅していた6つの印がそれぞれの色を主張するように大きく輝いた。

「エレメンタル」

方陣の中央に目に見えて光が収束する。

そして薄暗い筈の洞窟はこの瞬間、あの大きな力に照らされ、真昼の太陽の下の如き明るさとなつた。

「バースト！－」

その掛け声と共に巨大な6色の光の奔流が龍へと襲い掛かった。あれはもうすでに魔術と呼ぶ事を憚られる。

あれの前に立てば・・・

不死な筈の自分とてこの世に存在を残していられるか定かではない。

だがしかし、

その光を前にした龍はそれを迎え入れるようにゆうりと口を開き

光がもう一つ発生した。

純粹な白い光。

その光はホルスが放つ6色の光と激突し、
6色の光の進行を阻んだ。

雷が足元に落ちたような凄まじい轟音が鼓膜に響く。
眩しさに眼がくらみ、眼前に腕を添える。

あれは一体・・・

激突した二つの光は凄まじい余波を周囲に放ちつつ
互いに拮抗し合っていた。

ホルスの術は恐らくあの大きな方陣で威力を高めつつ、
さらに6属性の相乗効果での絶大な威力を出している。

それに対し、龍の口から出る光は純粹な力で対抗していた。
見ると、龍の全身を視認できるほどの魔力が覆っている。
巨体を巡るその魔力をあの光に変えて口から放つているのだろう。
その魔力量は底が知れない。

ホルスはやや苦悶の表情を浮かべていた。

対抗する龍が吐き出す光を押し切るべく、印に更なる魔力を注ぎ込
んでいるようだが、

先程から拮抗状態は変わらない。

いやむしろ 僅かだが押されてきていた。

このままでは、いずれあの白い光にホルスの術は敗れる。

だが龍は全身全霊をホルスに向けていた。

そう、隙だらけなのだ。

これは間違いなく自分の出番なのだろうが・・・。

おそらく攻撃のチャンスは一度。

一度でもこちらが攻撃をかければ、奴も警戒を向け、何かしらの対策を講じてくる可能性が高い。

ならば一度きりの攻撃をどこに向けるか、だ。

確実に奴にダメージを与える場所でなければ意味がない。考えられるのはやはり頭だが・・・奴の放つ光に近すぎる。あの光には絶対に近づいてはいけない。

本能がそう告げているのだ。

だが相手は人間ではなく御伽噺や神話にのみ出てくる魔物だ。他に効果がありそうな場所などわかるはずもない・・・が、ん・・・？

ふと不思議な事に気が付く。

龍の全身を巡る視認できるほど大きな魔力の流れは、発生させている口に巡っているわけではなかった。全身から漏れ出る魔力は一つの場所に吸い込まれるように流れている。

それは首の付け根。

という事は、奴は体内での光を作り出し、口から吐いているとでも言つのだらうか。

ならば・・・

龍の魔力が終結するその場所を見据える。

あの場所を突けば、龍の放つ光の威力を弱められる可能性は高い。

対象は決まった。

後は手段だが・・・。

確実にダメージを与える為、”縮地”を用い、
その勢いを殺さずに攻撃するのが妥当だとは思えるが・・・。
ん・・・？

一つの事を思いつき、天井を見上げる。
よし

自らの中で、あの魔力の集結点への攻撃方法が定まった。
光のせめぎ合いはさらにバランスが傾き、
龍の放つ光が伸びつつある。
急がねばならない。

用いる短剣は一つ。もう片方は鞘に戻す。
下手に両方の短剣を使おうとすれば威力の減退に繋がる。
ただ一点のみへ全ての力を注ぎ込む事にした。

すうっと息を吸う。
縮地の到達地点 天井 を睨み付け
地面を、強く蹴つた。

- - 風を切る。

瞬時にこの広間全体を見渡せる場所に到達。

そのまま”陽炎”の要領で即座にもう一度縮地に入るべく天井を蹴つた。
みしづと足に激痛が走る。
やはり相当に無理はあつたか。
だが今は、そのような事を気にしている時ではない。

ただ一点、あの魔力の終結点に全身全霊の攻撃を打ち込むのみ ！

つはああああああああああ！』

全ての力を榨り出すように声を上げ、

山を隠し化し、その地点に武器を突き立てた。

- - Side Horus - -

額から汗が滲み出る。

体内の魔力はもはや限界に達しゐておらず、ついでいた。

リナリズムの細部も含め、

ただ純粹な魔力のみでの域の威力の攻撃を放つ者と出会うなど、自らの人生の中で初めての事であった。

۹۷

これ以上の術の維持は難しい。

たが術を止め、あの光を受けければ恐らく自分は【消滅】する。
死ではなく【消滅】。

それは自らの不死という特性をも上回るもの。

まさかこんな形で生を終えるとも思っていなかつたが……

ま・・・・修行不足で妙がね・・・・

卷之三

急激に圧迫する力がなくなり、耳をつんざく声が広間に響き渡った。

一つの可能性にはつと気がつき、

何とか維持していた印と方陣を消去する。
はあと大きくため息を吐きながら地面にへたり込んだ

そのまま龍を見上げながら、

『ナイス・・・アウラ』

龍の上に乗っている相棒に声を掛けた。

龍は首を上に上げ、先程大きな声をあげた体勢のまま動かない。

アウラの攻撃した場所 恐らくこの靈獸の急所だったのだろうか。

当のアウラは何故か呆然としている。

自らの攻撃にここまで効果があつた事に驚いているように思える。

龍の姿が少しづつ薄くなつていった。

彼ら靈獸は基本的に死ぬ事はない。

死に相当する傷を受けた時、しばらくの間この世に留まれなくなるだけだ。

「> 実に・・・面白い者達だな〜
と、頭にまた再び低い声が響いた。

「> 我が名はゼノス 神炎龍ゼノス。

契約は成った。現在よりお前達に 予の力を託す〜

その声と共に薄くなつた龍の体ははじけるように光の粒となり、自らに突き立つ短剣へと収束した。

「お前達・・・?」

少しだけその言葉に違和感を感じた。

だが今はその違和感の正体を考える気力も沸かない。

再び薄暗くなつた広いホールの中に、
ぽつんと自分とアウラが残される。

まるで先程までの事が夢であつたがの如く。

『今回ばかりはもう駄目かと思ったがな・・・
ありがとなアウラ、本当に助かつた』
びしつと手を合わせ、命の恩人に向ける。

アウラは一瞬目を広げると、目を瞑り、

「莫迦か」

と一言言いながらふつと微笑む。

「それはお互い様だ」

『はは、そーかい』

だんつと、仰向けに寝そべる。

『づがれだー・・・』

自分でモだらしの無いと思える声が出てしまつ。
だがそれも仕方が無い事。

これだけ魔力を空っぽになるまで酷使したのはいつ以来だらうか。
正直今は、立つ気力すら沸かない。

「お休みの所悪い知らせですまないが・・・」

足元から溜め息交じりの声が聞こえる。

『なんだあ？ つつか寝るぞ俺・・・』

氣だるく返事。魔力の回復には睡眠が一番である。

「いーい、もうすぐ崩れるぞ」

地下であれだけの魔術合戦をすれば当然と言えば当然だが……その戦場となつた広間だけではなくそこから伝わつた崩壊の波は、この地下洞を利用したアジト全体に広がつてゐるようだ。

しかし・・・きつい。

魔力は体力と直結するものだ。

それが空っぽの状態でこの疾走はきつい。

『アウラ～・・・うおつと』

真横にかなり大きめの岩が落ちる。

「なんだ。喋る暇があるのならもつと足を動かせ」

遅いこちらの走りに焦れているのか、厳しい返事が返つてくる。

『おふつてくんね?』

「却下」

即答された。

今のはちょっと早かつたぞ。

「私とて少々まだ足を痛めている。

魔力が尽きたくらいで音をあげるな

『・・・はいはい。善処しますよ・・・』

とは言つものの魔力を使い果たしたとなれば並の魔術師であれば立つ事すら適わない。

何とか精神力のみで精一杯歩を進めているが……

それでも今の速度は一般人が走るより遅いかもしれない。

が、突如前にいたアウラが消える。

『お?』

急に左肩が持ち上がる。

「仕方ない・・・肩くらには貸してやる」と、すぐ横でむすつとしながら「くらの左手を肩に掛けるアウラの声。

『わりーな

「なに、礼には及ばない」

そう言ったアウラは、何か意味深な笑みを浮かべていた。

『つておおおおおー!』

そしてそのまま、全力疾走。

こちらの足は当然追いつかないでの、

引きずられたワカの様になっていたのは言つが及ばず。

『足! ちよ・・・少しスピードを いてつ!』

こちらの抗議も無視をされ、

そのままアジトの入り口に向かつて疾走 否、輸送されていった。

- - Side Aura - -

アジトの崩壊は割りと緩慢で、
出口に辿り着いた瞬間に崩壊、などと言つ
危機一髪な脱出でもなかつた。
ここまで急ぐ必要も無かつただろうか。

外に出た瞬間、ひやりとした空氣に身を縮ます。
すつかり夜が更けていた。
とりあえず肩に掛かつた”荷物”を降ろした。

「「Jの鬼め・・・」

と、こちらに恨み言を呴きつつ座り込むホルス。何やらその様子に笑いが漏れてきてしまつ。

「おいそこ、何が可笑しい」

それが癪に障つたのかこちらを見上げ、じと眼で睨み付けて来た。

『いや・・・安心した』

「・・・安心?」

ホルスが怪訝な顔で首を傾げる。

『お前にも、そういう一面があつたのだな』今までこの男は何をするにもどこか達観していて、その行動には何かしら計算をしながら動いている節がある。どうしても衝動的に感情で動いてしまう自分と比較し、劣等感を感じてしまう部分もあつた。

ホルスが自分と同じ、不死の体を持つと知つた後は余計である。自分もこうあらねばならないのか、と。

こちらの発言に、ホルスは眼を丸くした後、その意図を理解したのか、ため息を吐き、首を小さく横に振つた。
『どういう勘違いをしていたかあらかた想像はつくが・・・
例え不死だらうがなんだらうが俺は人間だ。
人間である限り感情によってどんな一面でもみせるつての。
ただ、そうだな・・・長く生きていると多少の事には動じなくなつちまうがな』

そう言つてホルスは少しだけ表情を曇らせた。

歳を重ねる毎に色々な経験をしていき、

感情を大きく動かさなくなつていくという事だらうか。

あの様子では、そうなつていいく自分を余り良くなは思つていなうに思える。

『ん・・・ そういえば・・・』

今のホルスの言葉で、一つ疑問が沸いた。
寧ろ今まで何故それを聞かなかつたのか。

「なんだ?」

『ホルス、お前は今何歳なのだ?』

自分と同じ不死であるならば、見た目での年齢判別など不能だ。
長く生きていると多少の事には動じなくなるなどといつ言葉は
当然、長くの年月を生きてきた者が言つ事だ。
それに何より、ホルスの魔術の腕は常軌を逸している。
恐らくは、自分よりかなり年上なのではないか。

「ああ、えーと・・・ 540、くらいか?」

ホルスが顎に手を当てながら平然とそんな途方も無い事を言い放つ。

・・・眩暈がした。

『・・・・・ ホルス』

この男は自分の10倍以上生きているといつのか。

「ん」

それならばむしろ・・・

『もう少し、老成したらどうだ?』

「・・・余計なお世話だ」

- - Side Yok i - -

『ふつ・・・』

机の上に山のように積まれた書類に目を向け、

思わず大きく息を吐く。

ダシュタ住民の要望書、

周辺町村からの移民希望文書、

盗賊襲撃の報告書、

隣国マラノからのネチネチとした抗議文、

市場においての取引詐欺被害届

etc etc . . .

中には明らかに自分の担当ではない物も混ざっているような気がするが . . . とにかくとりわけ最近は忙しい。

充実してはいるが、さすがにこの量は気が滅入るものがある。

それと何より . . .

自分を操り、隣国に戦争を起しそれぞれとした者の元へ向かつた者達

自分を助けてくれたあの男と、鋭い気配は持つがどこか幼さすら残す女性。

二人とも恐らく相当な手練である事は間違いないのだが、たつた一人で敵の本拠地へ向かつたというのは、やはり心配ではある。

それが気になり、抱えている仕事の処理も散漫になってしまっていた。

「ヨキ様」

部屋の入り口からノックと共に声が響く。

『入りなさい』

がちやりと開くドアから、

何やら少し困った様子の衛兵

よく自分の周りの世話をしてくれているロニースが入ってきた。

『どうした?』

用件を促す。

「それが……衛兵として志願したいという者達が今、門の前にいるのですが……」

衛兵ロニースのその言葉に苦笑が漏れる。

『こんな時間にか?』

「はい、こんな時間にです」

兵士は困ったように溜め息をする。

今はもう既に夜更けである。外も冷え初めているというのに……。志願であれば通常、朝か昼間に訪ねてくるのが通例だが、

一体何故またこんな時間に志願をしてくるのだろうか。

『ふむ……。また明日来て貰う様に言つてくれんか』
『やう仰ると思つまして、私もそのように申したのですが……』
と、ロニースは言葉を濁す。

『帰らないのか』

ふむ、と口元に手を当てる。

「なんでも、とらあえずヨキという人にこれを見せてくれ」との事
なのですが」

と、ロニースは何やら胸元から取り出す。
それは3枚の金貨であった。

『む』

手に取り、金貨を良く眺めると、
その正体に気づき、驚く。

『何がわかりますか?』

『これは、ティルフェルム聖教国の正金貨だ……』

「……は、はあ。何故そのようなものを……?』

何故も何も無い。

『いや、誰の差し金かはわかつた。その者達を二〇く。
それと、これは返しておいてくれ』

と、金貨を口ニスへ返す。

確かに、あれ一枚で一ヶ月は寝て暮らせるくらいの価値はある。
そんな物はおいそれと他人から受け取る事はできない。

「はつ。了解致しました」

兵士が一礼をし、ぱたんと扉が閉めた後、
苦笑いがこみ上げる。

このタイミング・・・。

大方敵のアジトに居た者を改心させ、
あまつさえその者達の今後の面倒をこじらひに押し付けてきた、
といった所だろうか。

まあ、確かに人手は足らない。

とはいえ元盗賊と思われる者を雇つほど切迫しても居ないが・・・。
『まつたく・・・これで貸し借りはなしですよ
と外の空を見上げ、呟いた。

まずは本格的に更正をせる為、
せいぜいたつぱりとしてやるとしよう。

何故か地面にうずくまる様に眠っていたようだ。
さすがに疲労がまだ残っているのか、

寝覚めが悪く、酷く眠い。

ゆっくりと立ち上がり、服に付く砂を払いつつ、
隣の木の下に田に向けると、黒衣を着た男がだらしなく大の字で眠
つていた。

その姿にため息混じりの苦笑をした後、
やや揺れる足取りでこの砂海では貴重な泉へ足を運ぶ。

その途中、視界の端に大きな岩が映つた。
昨日、大きな戦いがあつたその場所の入り口は、
今はもう瓦礫に埋もれて無くなっている。

激しい戦いを終えた後、
特に男の方は疲れきついて、
本来その男の術で一瞬で街に戻るあても外れ、
まして徒歩で戻る体力もない。

もうここで寝るぞと言い張り、砂海のど真ん中で寝そべる男を余所
に、
女は案外近くにあつたこの場所を探し宛てた。
砂海に点在するものの中でもごく小さいオアシス。
恐らくはあの洞穴の下に住んでいた者達が主に利用していた場所な
のだろう。

一夜の寝床とするには何もない砂の真ん中よりも遙かに良い。
そのまま一人はこの場所で一夜を明かし、今に至る。

女は暫し戦の跡を眺めた後、またすぐに視線を前方に戻し、
泉のほとりでしゃがみこんだ。

「 む？」

水で顔を洗おうとする前、ちょっととした違和感に女が疑問の声を上げつつ首を傾げる。

だがその正体が認識できず、顔を水に近づけてぱしゃぱしゃと顔に水を掛けた。

ぶるるつと水を払うと、ようやく頭の中が明瞭になつてきた。ここまで寝覚めが悪かつたのは生まれて初めてかもしれない。そして思考がしっかりと働き出した後、

泉に映る自分の姿を見つめ、女は”自分自身”の違和感を認識した。

「 ホルス！！」

なんともいえない迫力を持つたその声で男は大儀そうに目を薄く開く。

「んー・・・あー・・・お前、最後くらい格好良く締めろよ・・・」

男は目を擦り、口を大きく開けた。

まだ目が覚めきつていないので、意味が不明瞭な言葉を発している。「何をわけの分からない事を言つている！ それよりだ」

女が腰は手を当て、無言で男を睨み付けた。

ただならぬその気配に気だるげながらも男は体を起き上げる。

と、女の変化に気がつく。

昨日、女は戦いの途中に腹部に大きな傷を負つた。

傷自体はすぐに修復されたが、

服を修繕するなどという能力は無い。

その結果、女がかなり際どい格好となつていた事を男は気づいてい

たのだが、

戦いと脱出の際のドタバタでそれどころではなかつたといつ事もあり、

結局指摘する事を忘れていた。

が、それを自分で気づいた女は泉で自分の姿を確認しつつ、
破れた部分の所々を結んで何とか取り繕える程度に戻したようだ。
だがその後、この事を教えてくれなかつた男への不審が募つたのだ。
女が今、妙に高圧的に迫つてゐるのもその為だらう。

そして

「あー・・・残念。直しちつたか」

その余計な一言で、女の怒りが爆発し、
鞘つきの短剣が男の顔に食い込むこととなつた。

- -

「やついいえば 」

先ほど男を殴つた短剣の鞘を抜く。

抜き身の短剣は陽の光に晒され、いつにない光を放つてゐた。

三分ほど氣絶していた男は鼻の頭をさすりながら
それを見て目を見開く。

「 待て。早まるな。人殺しは良くないぞほんと」
片手を前にだしてずるずると後退する。

「何を勘違いをしている。

と言つよりお前は死なないだらうが・・・」

女は薄い視線を男に投げかけつつ、溜め息をこぼす。

「そうではなくてだな、この短剣なのだが　　」

一発殴つて気が済んだのか、
もはや女は何事もなかつた様な表情である。
寧ろ何かを男に相談したいような面持ちだ。

男はその様子を見て、女の意図を悟る。

「あー・・・。多分、だが、そん中にあいつが入つてゐると思つたぞ
「やはりか。奴の死に際に放つた光がこれに収束してこるよう
うに見えたのでな・・・
で、結局の所どうなつたのだ？　奴を封印できたと言つた事か？」

「いや　封印というより、つてあれ？」

お前、あいつが消えた時の台詞、聞いてなかつたか？」

男が首を傾げる。

「ああ、何やら聞こえてきたな。

大様な名前を言つた後”契約は成つた”がどうとか・・・
それがどうした?と言う表情で男を見返す。

「そのまんまだ。靈獸が自分の名を名乗り、

契約を交わすつてのは即ち相手を自分の主と認めたつて事だ。

お前の剣に宿つてるわけだし・・・つまりあの龍はお前の命令に
いつでも従つつてこつたな」

男の説明に、女はしばし呆然とする。

「つまりそれは、私が敵と戦えと命じれば

「」の短剣から奴が出てきて戦つと言つ事か・・・？」

「そういう事だな。正確に言えば靈獸は契約者が”名前”を呼ぶ事
で姿を現し、

その後命令をする事でそれを遂行するつて事らしいがな

女は信じられない、といった顔で手に持つ短剣を見つめる。

「契約・・・とやらの移行はできないのか？」

短剣を見つめたまま、やや弱い声で問う。

「移行・・・？ そりや無理だろ。

契約条件を満たした奴だけが”契約者”なわけだし つて待てよ？」

男は思い出したように顎に手を添える。

「確かにあいつ、”お前達”に自分の力を託すとかなんとか言ってたな・・・

つつ一 事は俺にも命令の権利くらいはあるのかもな

それを聞き、女は目を開く。

「なら、この短剣をお前に

女は不安なのだ。

あの靈獸の力は一歩間違えば軽く一つの街を吹き飛ばしてしまえるもの。

そんなものを自分が制御しきれる自信などなかつた。

「だーめだ」

が、男は女の考えをすぐに読み取り、首を横に振る。

「む 何故だ」

そう不機嫌そうに問う女の眼前に男は人差し指を突き出した。

「まず一つ、呼び出された後に”命令”はできるかも知れんが、靈獸を”呼ぶ”事が出来るのは一人。これは絶対だ。

つまりはアウラ、例え俺にその短剣を渡そうとあいつを呼ぶ事はお前にしかできない

未だ納得が行かないといった面持ちの女の様子を見つづ、

男は立てた人差し指に中指を加える。

「一〇〇目、その短剣はもはや靈獸を封じた”魔陣器”になっている。契約者以外が”魔陣器”に触れ、迂闊な魔力を送り込めば、

【再契約の儀】に入る。

その靈獸の場合、契約条件が【力を示す事】だつたな。
契約を辞退すれば何も無いだろうが・・・

お前が居なかつた場合、魔陣器に戻す事も出来ず、

♪♪今の世を見てみたいくくとかなんとか言つてあの龍が世界を飛び回る。

つていう事で昨日の一の舞だ。わかるか？」

その言葉にはさすがに女も俯いた。

昨日のような危険な事をまた招くわけには行かない。

男はさらに指を一本加える。

「ラスト二〇〇目、自分を信じじろ。

力なんつーのは間違つた使い方をしなければいくらあつても問題無い。

その力は少なくとも、俺なんかよりアウラが使ってくれた方が余程良いと思つぞ？」

と微笑する男の言葉に、女は眼を丸くし、しばしの間停止する。
が、すぐに男から目を反らし、

「さ、最後のは・・・納得が行かないが・・・」

やがて諦めたように溜め息を吐いた。

「私が持つしかない事はわかつた・・・」

そう言つた後、じつと手に持つた短剣を見据えた後、それを掲げた。
それを見た男は女の意図を理解し、一瞬躊躇したが、
その後口元を緩め、腕を組んでその様子を傍観した。

女は昨日の龍の言葉　自ら名乗つたその名前を思い出し、言葉にした。

「ゼノス！　姿を現せ」

途端、掲げられた短剣が煌々と輝く。

その光はやがて視界全体を埋め、辺り一帯を白に染めた。
女が眩しさに目を細めつつ、息を呑む。

ポトツ

妙な音がした後、短剣の光が消えた。

予想されたあの巨大な龍の姿はどこにもない。

男は何故か肩を震わせ、女はきょろきょろと周りを見回している。
そして

ゝみゅうく

「え？」

と、地面にはつぶらな瞳をした、

手のひらサイズ程度の黒い”羽の生えたトカゲ”が女を見上げてい
た。

それを見た女は額に手を当て、しばし考え込む。

ふ

後ろから唇という栓が取れた音がする。

「わはははははは！」

男が溜め込んでいた笑いを一気に吐き出した。

「 ホルス」

凍えるような空気が女より発せられる。

「お前、知っていたのか？」

そのただならぬ空氣に男はびくりとし、笑いを止める。

「い、いや、そいつが今は力を失っているつてのは予想できたけど
な・・・。

そんな姿になっていたのは予想外だった」

本当だぞ？」と付け加えながら男は警戒する。また顔に凶器食い込まれてはかなわない。だが、女は軽く溜め息を吐いた後、意外とあつたり「そうか」と納得した。

「で、いつか、元の姿に戻るのか？」

しゃがみこみ、黒いトカゲの顎を撫でつつ男に問う。トカゲは心地よさそうに目を閉じつつ、みゅ、と声を出している。「恐らくな。靈獸は「死」に相当するダメージを受ける事で力を一時的に失う。

予想・・・だが元の力を取り戻すのは20年程度は掛かると思つぞ」

「そうか・・・元に戻るか」

女のその返事に何やら少し残念そうな響きが混じつている事に、男はすぐに気づいた。

「アウラ・・・お前、そのトカゲ状態気に入ってるだろ?」

「ああ。これはこれで愛らしくていいではないか」

臆面も無く女はそう言った。

いつの間にか黒羽トカゲ、もとい神炎龍ゼノスは女の肩に乗り、頭を摺り寄せている。

契約者だから懷いているのか、それとも女の物腰によるものなのか。

何れにしても・・・

仮にもそいつは世界を滅ぼし兼ねない靈獸だぞ、と男はその様子を見て呆れ顔で息を吐いた。

「さて、これからどうするのだ?」

と、女は肩のトカゲから目を離し、男に向き直る。

男は、んーーーと悩むように上を向く。

「そうだな・・・。この辺にはもうとりあえず用はないしな・・・
一度”家”に帰る事にする」

それを聞いた女は大きく一度、まばたきをする。

「意外だな・・・。家などといつものがあるのかお前に」

そう本当に意外そうに言つ女に

「失礼な奴め・・・。俺を一体何だと思っているんだか」
不愉快そうに男は女に細めた眼で睨む。
「世捨て人とか・・・仙人とか・・・そういうた類だろうか」
そう顎に手を当てながら言う女に、がくつと頭と垂れる。

「・・・んで? お前の方はどうするんだ?」

溜め息をまじえつつ男は問う。

その問いに、女はしばし口を開き言葉を失う。

「ん? どうした?」

「い、いや そうだな・・・」

俯きながら言葉を濁す。

実は女自身、もはや男に付いて行くのが当たり前だと思つてしまつていた。

ようやく見つけた同じ時間を過ぐす者だ。

この男と共に戦う時は、今まで独りで戦つてきた自分としては、余りにも居心地が良すぎた。

女は首を振る。

だがしかしこの男と自分ではそもそも役目が違う。

自分は【人を助ける者】

男は【争いを止める者】

そつ、各自の使命を全うしなければならない。

それを違える事は生きる意味を失つ事。

男とてそれは同じであらう。

何やら複雑な顔をして考えにふける女を見て、

男はふつと笑いを溢した。

それに気づいた女は「何が可笑しい」と、男を睨み付ける。

「いや

男はそう呟き、笑いを噛み締めるのを見て女は「む・・・？」と首を傾げる。

女がどんな事を考えていたか、

男は女の表情の移り変わりを見てなんとなくわかつてしまっていたからだ。

「さて、と

男は思い立つたように【転移】の印を描く。

自らの家 根城に居る筈の者の顔を思い浮かべながら。

女はそれを見て

「もう行くのか？」

と、やや躊躇を見せる表情で言つ。

「ああ

どこか淡々とした返事。

「 そうか。では 達者でな

女はそう言つて手をあげた。

だが、男は紡いだ【転送】の印に手を当てる事なく、

「 なんてな

口元を上げ、違う方向に手を差し伸べた。

先ほど、女が何を考えていたか、男がすぐに理解した理由。

それは、自分も同じ心境だからである。ただ少しだけ、からかってみただけだ。最初から別行動などするつもりはない。

さらに言えば、今の自分達を生み出した【親】が、

”共に使命を果たせ”と言つていてのだから……。

とはいって、違う役割の者が一緒に行動するのだ。

何かしら言い訳となる決まりごとを作る必要はあるだらうか

「アウラ、一つ俺と【契約】をしないか」

手を差し出したまま、男は女に問いかける。

「 契約？」

女は男の意図が分からず、首を傾げた。

「そう、俺はお前の【人を助ける】役目を手伝い、お前は俺の【争いを止める】役目を手伝う契約、だ

「 」

その”答え”に女はしばし言葉を失う。

単純な事だったのだ。

それぞれの役割を、それぞれが助け合えばよいだけ。

役割の違いなどという隔たりは、その程度のものだった。

「契約条件は、この手を取る事。

さあ、どうする?」

と、男は悪戯を持ちかけるような顔でそう言つた。

女は眼の前に差し出された手をしばし呆然と見つめた後、やがて眼を閉じて静かに微笑む。悩む事など何も無い。

答えなど、とうに出でている。

女は眼を開け、男の眼を見据えながらゆっくりと、

差し出された手を取った。

& 1 t . , 契約 & 9 t . , (後書き)

この続きとかのプロジェクトは出来てはいるのですが、
いつ書かれるやうに . . .

最後まで読んで頂きましてありがとうございます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2430d/>

月虹-運命交叉-

2010年12月5日11時34分発行